磐城山遺跡（第 7-2・8・8-2 次）発掘調査報告書

―農地改良工事に伴う緊急発掘調査―

２０１８年３月

鈴鹿市

序

三重県鈴鹿市の北部を流れる鈴鹿川の流域には，縄文時代から中近世に至るまで，多くの遺跡が存在しています。三重県は，地理的な要因から，東西の文物が交錯し，時代ごとに様々な様相を呈しています。

ここに報告する鈴鹿市河曲（かわの）地区は，古代の河曲（かわわ）郡に相当します。壬申の乱の際に，大海人皇子（天武天皇）が通過した，「川曲の坂下」の有力な候補地でもあります。また，天皇家に采女を献上している，古代豪族大鹿（おおか）氏の本貫地ともされています。後に，伊勢国の国分寺が建立され，河曲駅家（うまや）が整備されるなど，交通の要衝として栄えた地域です。

磐城山遺跡の発掘調査では，弥生時代や古墳時代の文物が多く確認されるとともに，古代の遺構も確認されはじめています。これらの貴重な資料をもとに，鈴鹿市の歴史とその意義を発信し，豊かな地域社会の形成に少しでも貢献できれば幸いです。

発掘調査にあたっては，三重県教育委員会をはじめとし，市民の皆さま，地元である河曲地区，木田町自治会等から多大な御協力とともに，暖かい御支援をいただきました。文末となりましたが，皆さまの御誠意ある対応に，心から御礼申し上げます。

平成 30 年 3 月

例　　言

1．本書は，三重県鈴鹿市木田町字上條所在の磐城山遺跡第 7-2･8・8-2 次の発掘調査に係る報告書である。

2．調査は，平成 26 年度及び平成 27 年度に行った農地改良工事に伴う記録保存の緊急発掘調査である。

3．発掘調査は以下の体制で実施した。

（平成 26 年度 ; 第 7-2 次調査時）

調査担当　　鈴鹿市　文化振興部　考古博物館　埋蔵文化財Ｇ

組織及び構成　鈴鹿市考古博物館　館長　澤井　環

埋蔵文化財ＧＬ　藤原　秀樹

埋蔵文化財Ｇ　西村　浩

服部　真佳

田部　剛士（※ 現地調査担当）

吉田　隆史

木下侑之市

吉田真由美

小川　陽子

（平成 27 年度 ; 第 8 次・第 8-2 次調査時）

調査担当　　鈴鹿市　文化振興部　考古博物館　埋蔵文化財Ｇ

組織及び構成　鈴鹿市考古博物館　館長　澤井　環

埋蔵文化財ＧＬ　川久保治彦

埋蔵文化財Ｇ　藤原　秀樹

西村　浩

田部　剛士（※ 現地調査担当）

吉田　隆史

木下侑之市

小川　陽子

太田　有香

4．現地調査に係る発掘費用は，各年度の国庫補助金で負担し，報告書の印刷製本費は平成 29 年度の国庫補助金で執行した。

5．現地調査及び本書の作成及び編集は，鈴鹿市 文化スポーツ部 文化財課 発掘調査グループ（平成 28 年度に機構改革）の田部が行った。

6．Fig.3 では，国土地理院発行 1:25,000 地形図鈴鹿の一部を使用した。

7．本調査に係る遺物・図面・写真は，全て鈴鹿市考古博物館で保管している。

8．発掘調査及び報告書作成にあたっては，以下の各氏から有益な御教示等をいただいた。記して感謝いたしたい。

渡辺　寛・小澤　毅・竹田憲治・森　泰通・中村法道・石井智大・川部浩司・櫻井拓馬・宮原佑治・林　和範・三重県埋蔵文化財センター　（敬称略・順不同）

本　文　目　次

序
例言
目次 / 表目次 / 図版目次 / 写真図版目次
第Ⅰ章　はじめに ……1
　1　調査の契機 ……1
　2　調査の経過 ……1
第Ⅱ章　位置と環境 ……3
　1　地理的環境 ……3
　2　歴史的環境 ……5
　3　大鹿氏について ……7
第Ⅲ章　調査の方法 ……8
　1　調査区 ……8
　2　地区割り ……8
　3　遺構番号 ……8
　4　基本層序 ……8
第Ⅳ章　検出遺構 ……11
　1　竪穴住居 ……14
　2　掘立柱建物 ……24
　3　柵 ……33
　4　土坑 ……36
　5　道路状遺構 ……38
　6　溝 ……38
　7　小結 ……41
第Ⅴ章　出土遺物 ……41
　1　竪穴住居 ……41
　2　掘立柱建物 ……44
　3　土坑 ……44
　4　道路 ……46
　5　溝 ……46
　6　柱穴・ピット ……48
　7　包含層・検出 ……50
　8　縄文時代の出土遺物 ……50
第Ⅵ章　調査の成果 ……55
　1　弥生時代後期の集落について ……55
　2　古墳時代後期の集落について ……55
　3　古墳時代後期から古代の掘立柱建物群について ……55
　4　中世城館に係る遺構について ……58
参考文献 ……58
奥付 ……82

表　目　次

Tab.1　磐城山遺跡の発掘調査履歴 ……4
Tab.2　遺物観察表 ……51-54
Tab.3　掘立柱一覧表 ……56
報告書抄録 ……81

図　版　目　次

Fig.1　鈴鹿市の位置 ……3
Fig.2　鈴鹿市の地質 ……5
Fig.3　遺跡の位置 ……6
Fig.4　第 1-8 次調査区遺構配置図 ……9・10
Fig.5　調査区の地区割り ……11
Fig.6　遺構配置図①（SH・SD 番号入り） ……12
Fig.7　遺構配置図②（SA・SB・SK・SX 番号入り） ……13
Fig.8　SH0821/22/23・SH0841・SH0843 平面・断面図 ……14
Fig.9　SH0807/08・SH0830/31/32・SH0811/12/13 平面・断面図 ……15
Fig.10　SH0804/16/19/20 平面・断面図 ……16
Fig.11　SH0848/49/67/68 平面・断面図 ……17
Fig.12　SH0851 平面・断面図 ……17
Fig.13　SH0853/54 平面・断面図 ……18
Fig.14　SH0864 平面・断面図 ……19
Fig.15　SH0862/63/67 平面・断面図 ……20
Fig.16　SH0805/09/29/75/79/80/82 平面・断面図 ……21
Fig.17　SH0865/90/92 平面・断面図 ……22
Fig.18　SH08101 平面・断面図 ……22
Fig.19　SH08103/104 平面・断面図 ……23

Fig.20　SH08203/204/205/211/212 平面・断面図 ・・・

第Ⅰ章　はじめに

1　調査の契機

磐城山遺跡の発掘調査は平成５年の県道敷設工事に先立って開始され，平成9･10年の市道敷設工事関連の調査へと続いた。その後，しばらく発掘調査がなされることはなかったが，平成21年に地元から，敷設した道路面まで隣接する畑を床下げしたいという旨の要望があがった。過去に発掘調査が行われた隣地であり，遺構の存在が確実視される場所であったので，幾度か遺跡保護のための協議を行った。しかしながら，農地改良工事はやむを得ずとの結論に至り，事前に発掘調査によって記録を残すことにした。

届出がなされた範囲は5,000㎡以上と広大で，単年度での調査は不可能であったため，数100㎡を単位として複数年かけて調査を行うこととし，調査が終了した部分から工事を着手することとした。この一連の調査は，平成21年の第３次調査から開始し，平成27年度で第８次を数えるまでとなった。以後，平成28年度の第９次，平成29年度の第10次調査と，現在も発掘調査が進行中である（Tab.1）。

これまでの発掘調査の成果は，第３次調査のみ『鈴鹿市考古博物館年報』第13号の中に掲載したが（田部2011），他は第4･5次，第6･7次として磐城山遺跡の単独の報告書として刊行している（田部2014，2015a）。なお，市道敷設工事に伴う第1･2次調査の成果は未報告となっている。本書では，既に報告した調査以降に該当する，平成26年度の第7-2次調査と平成27年度の第8･8-2次調査について正式に報告する。

第7-2次調査は平成27年２月６日から３月18日まで実施した。平成26年度予算に僅かな余裕があったため，年度末にかけて，第７次調査区の西側を拡張して行った。調査面積は小さく，４月からはそのまま第８次調査が予定されていたので，遺構番号等は第７次のものを使用せず，８次調査区を示す「0801」から付与することにした。約１ヶ月間の調査で87㎡を調査し，第８次調査に引き継いだ。

第８次調査は平成27年６月２日から11月５日まで実施した。第８次調査区は第7-2次調査区から拡張したもので，約５ヶ月間の調査で426㎡を調査した。第8-2次調査は，平成28年１月25日から３月25日まで実施した。第８次調査区の西側を220㎡ほど広げて，約２ヶ月間調査した。いずれも北側は台地の端部に相当し，土砂の流出が著しいため遺存状態は悪かった。

いずれの調査も，過去に表土除去を済ませていたので，発掘作業員６～10名／日によって遺構の検出と掘削を繰り返して行った。

2　調査の経過

発掘調査の経緯や概要については既刊の概要報告があるが（田部2016，2017），以下調査日誌を抄録することで調査の経過に替える。

【調査日誌】

第7-2次調査（87㎡，平成27年２月６日～３月18日）

※遺構番号は第８次調査へ引き継ぐ

２月６日　発掘用具搬入。草刈後，遺構検出。現在溝①完掘。

２月９日　SD0803完掘。SH0804埋土，SH0807/08,14等周壁溝完掘。

２月10日　SH0816,17,21/22/23周壁溝掘削。SD0818,25,28完掘。SH0804下部にSH0819,20を確認。

２月18日　SH0830埋土撤去。SH0833南壁周壁溝,SH0804内等のピット掘削。

２月24日　SH0808/14/19内ピット掘削。SH0811/12/13,33/34,36/37等の周壁溝掘削。

３月２日　SH0804/19/20内ピット掘削。SH0821/22/23,41等の貼床を撤去。

３月３日　SH0821/22/23内ピット等掘削継続。

３月16日　第7-2次調査区としては，CQグリッドのラインまでとし，残りの遺構を掘削する。

３月17日　遺構掘削完了。全体清掃開始。

３月18日　清掃完了後，写真撮影。

第８次調査（426㎡，平成27年６月２日～11月５日）

※遺構番号は第7-2次調査から引き継ぐ

６月２日　草刈後，北区の遺構検出実施。一部，ピットの掘削に着手する。

６月３日　降雨のため休業。

６月４日　中区の検出を開始。

６月５日　中区検出継続。北区北端の落ち込み掘削。現代溝①・②の掘削。

６月８日　降雨のため休業。

６月９日　水抜き。中区検出終了。現代溝①・②の掘削継続。

６月10日　北区北端の落ち込み掘削完了後，北側からピットの掘削を開始する。現代溝①・②の掘削完了。

６月11日　都合のため休業。

６月12日　降雨のため休業。

６月15日　北側から竪穴住居上面のピットを含めて完掘していく。SH0852/53埋土掘削。両者は同一遺構かもしれない。

６月16日　SH0846埋土掘削。SH0852/53埋土掘削継続。両者を同一遺構だと判断する。

6 月 17 日　都合により休業。
6 月 18 日　降雨のため休業。
6 月 19 日　SH0852/23 を SH0853 として統合する。SH0846 の下部に SH0854 があることを確認する。SD0858 は SH0853 の間仕切り溝か。SH0853,54 とも南辺中央土坑を持つ。
6 月 22 日　SH0853,54 の南辺中央土坑掘削。SH0853,54,SD0856 内のピット，溝を完掘する。CO/CP40 の南から CO/CP41 にかけて総柱の掘立柱建物が建つことを確認し，他にも掘立柱建物になりそうなことに気づく。
6 月 23 日　北区内のピットを全て完掘。SH0862/63 掘削。SD0866 掘削着手。
6 月 24 日　北区の遺構掘削完了。中区の SH0862,63,64 埋土掘削開始。SD0866,68,SH0867 等にも着手。
6 月 25 日　都合により休業。
6 月 26 日　降雨のため休業。
6 月 29 日　北区の水抜き後，全体清掃。
6 月 30 日　清掃完了後，写真撮影。
7 月 1 日　降雨のため休業。
7 月 2 日　SH0864 埋土掘削後，周壁溝掘削着手。SD0867 着手。
7 月 3 日　SH0864 周壁溝完掘。SD0867 掘削継続。
7 月 6 日～ 10 日　一週間天候が優れないため，休業。
7 月 13 日　中区水抜き。SH0864 南辺中央土坑，周壁溝掘削継続。SH0879,82 埋土，周壁溝掘削。SD0878,SX0880 完掘。SH0881 着手。
7 月 14 日　SH0881, SX0880 完掘。周辺のピットも掘削する。
7 月 15 日　SH0864 完掘。現在溝①以西の掘削を完了する。SH0815 南辺周壁溝完掘。壁柱穴が巡ることを確認する。SH0879 上でピットを確認し，掘削する。
7 月 16･17 日　台風のため休業。
7 月 21 日　神戸中学校郷土史部の発掘実習受け入れ。中区東半分の遺構掘削と，南区の遺構検出を行う。
7 月 22 日　降雨のため休業。
7 月 23 日　南区遺構検出継続。
7 月 24 日　南区遺構検出完了。
7 月 25 日　夏休み子ども体験博物館の講座として，発掘体験を実施。
7 月 27 日　SD0887 は溝でなく，SH0875 の北辺周壁溝の可能性あり。SH0879/80/82,86 等の埋土の掘削。
7 月 28 日　SH0879/80/82 の埋土の掘削継続。南区の現代溝③の掘削に着手。
7 月 29 日　作業員は休業。図面作成のみ行う。
7 月 30 日　SH0879/80/82 埋土，周壁溝掘削継続。SD0885 完掘。
7 月 31 日　SH0879/80/82 埋土，周壁溝掘削継続。南区の現代溝③の掘削の継続。
8 月 3 日　SH0879/80/82 内ピット，南辺中央土坑の掘削着手。南区の現代溝③の掘削継続。
8 月 4 日　SH0879/80/82 内ピット掘削継続。SH0805 南辺周壁溝及び南辺中央土坑の掘削。SK0888 掘削。南区の現代溝①掘削着手。
8 月 5 日　SH0879/80/82 内ピット掘削継続。SD0876,89 完掘。
8 月 6 日　降雨のため休業。
8 月 7 日　水抜き。SH0879/80/82 内ピット完掘後，周辺の溝やピットの掘削に着手する。
8 月 10 ～ 14 日　一週間，お盆のため休業とする。
8 月 17 日　降雨のため休業。
8 月 18 日　中区の東端の溝やピットの残りの掘削を再開。
8 月 19 日　降雨のため休業。
8 月 20 日　水抜き。
8 月 21 日　中区を全て完掘。南区の現代溝①・③完掘。一部，SD0893（中世の溝か）の掘削に着手する。
8 月 24 日　SD0893 完掘。南区の遺構掘削を本格的に開始する。SD0860/61,94,95,96 等の溝の掘削に着手。一部，西端から単独ピットの掘削を行う。
8 月 25 日　台風のため休業。
8 月 26 日　博物館学芸員実習生受け入れ。南区で遺構検出後，SD0860･95･96 等の掘削を再開する。愛知学院大学白石浩之教授来跡。
8 月 27 日　SD0866,95,96,97,100,106, SH0898,101,104,SX08105 等の掘削。
8 月 28 日　SD0866,95,100,SH08101 及び南区のピットの掘削継続。作業員養成のための研修として，新しい調査区（後の第 9 次調査区に相当する範囲）を設け，その範囲にグリッドピンを設定する。
8 月 31 日　都合により休業。
9 月 1 日　降雨のため休業。
9 月 2 日　シルバー研修区の草刈り実施。
9 月 3 日　降雨のため休業。
9 月 4 日　南区のピット群の掘削は，現代溝①以西は完了する。SD0870 は竪穴住居となりそう。
9 月 7 日　都合のため休業。
9 月 8･9 日　台風のため休業。
9 月 10 日　シルバー研修区にて遺構検出継続。
9 月 11 日　検出完了。南区にて，現在溝①以東の掘削継続。SX08115 や竪穴住居の上面で検出したピット等を掘削。
9 月 14 日　シルバー研修区にて遺構検出継続。南区 SH08103/104 埋土掘削。SX08115 掘削。
9 月 15 日　シルバー研修区にて遺構検出継続。SH08103/104, SX08115 掘削継続。内部の周壁溝，ピット等掘削に着手。
9 月 16 日　白鳥中学校職場体験受け入れ。SH08103/104 内ピット，SH0889/90 埋土掘削。
9 月 17 日　降雨のため休業。
9 月 18 日　白鳥中学校職場体験継続。SH0889/90,SX08105/120 埋土完掘。SH08103/104,SH08118/119 等周壁溝完掘。
9 月 24･25 日　降雨のため休業。
9 月 28 日　SH08103/104,SK08124 完掘。南区東側ピット群の掘削に着手。
9 月 30 日　南区東側ピット完掘。全体清掃開始。
10 月 1 日　降雨のため休業。
10 月 2 日　ブルーシート，土嚢袋撤去後，水抜き。
10 月 5 日　ベルト撤去後，全体清掃継続。
10 月 6 日　全体清掃継続。
10 月 7 日　全体清掃完了後，写真撮影。発掘用具搬出。
10 月 8 日　都合により休業。
10 月 9 日　平面図作成。

10 月 13 日　図面作成継続。発掘用具片付け。
10 月 14 日　都合により休業。
10 月 15･16 日　図面作成継続。
10 月 19 ～ 23 日　都合により休業。
10 月 26 ～ 28 日　レベリング作業開始。
10 月 29 日　礫を持つピットの下部の埋土を掘削。掘立柱建物の断面図作成。
10 月 30 日　礫を持つピット完掘後，図面を加筆修正。
11 月 2 日　加筆修正した部分のレベリング作業。
11 月 4 日　焼土周り等の補足調査。
11 月 5 日　図面修正。本日にて第 8 次調査を終了する。

第 8-2 次調査（220㎡, 2 期　平成 28 年 1 月 25 日～ 3 月 25 日）
1 月 26 日　本日より，第 8-2 次調査として発掘を開始する。発掘用具搬入。第 8 次調査の西隣りに調査区を設定する。北端から遺構検出開始。
1 月 27 日　遺構検出継続。北端落ち込み掘削。南北の現代溝の掘削に着手。
1 月 28 日　北西区の遺構検出完了。現代溝は 2 条重複していることを確認し，現代溝㉑ / ㉒とする。北端の落ち込み完掘。下部で掘立柱建物のピット確認。SD0860/94 は 2 条の間が約 3 mで併行するので，中世後半の道路状遺構と考える。ピットの掘削に着手。
1 月 29 日　降雨のため休業。
2 月 2 日　SH0853/54 埋土撤去後，周壁溝完掘。SH0853 は壁柱穴が巡ることを確認する。SK08207,209,SD08208,56,SH08203,204,205,206 等掘削。
2 月 3 日　SB0859,211 半裁。北西区の西端でも別の掘立柱建物 (SB08212) があることを確認する。SH08203/204/205 内のピットを掘削開始。SX08210 掘削着手。
2 月 4 日　残りのピット，溝等を掘削。
2 月 5 日　都合により休業。
2 月 8 日　降雨のため休業。
2 月 9 日　残りのピット，溝等を完掘。南西区の遺構検出開始。現代溝 21/22 掘削開始。
2 月 12 日　南西区の遺構検出完了後，写真撮影。撹乱を撤去。北西からピットの掘削に着手する。SD0894 掘削完了。SH08215,216 埋土等掘削。
2 月 15 日　水抜きを実施。ピット掘削継続。SH0863,216,SD0870,208,217,218 等完掘。
2 月 16 ～ 29 日　平面図作成開始。
3 月 1 日～ 18 日　レベリング作業。
3 月 22 日　平面図加筆修正。
3 月 23 日　焼土周り補足調査。
3 月 24 日　図面修正。レベリング作業。
3 月 25 日　ブルーシート等撤去。発掘用具整理。本日にて，第 8-2 次調査を終了する。

第Ⅱ章　位置と環境

1　地理的環境

鈴鹿市は三重県の北部に位置する（Fig.1）。東は伊勢湾に面し，西は標高 900 m前後の鈴鹿山脈によって伊賀盆地や滋賀県と隔てられている。市域の西部は主に山地となっており，東部では台地や丘陵，平地，海岸と多様な地形を有している。

市北部には，主要河川である鈴鹿川が東流しており，その左岸には台地，右岸には沖積地が広がっている。この左岸の台地は，「水沢扇状地」と呼ばれている。この扇状地は，滋賀県との県境を南北にそびえる鈴鹿山脈の山裾から，東へ約 14km にわたって伊勢湾近くまで連なっており，右岸の沖積低地とは地理的な境界を明らかにしている。

水沢扇状地の地質は，第四紀更新世の地層である水沢扇状地堆積物からなり，内部川と御幣川によって形成されている。各地に平坦面が残されているが，扇頂部では 250 mあるものの，鈴鹿川左岸の扇端部では 40 mほどまで下がってきている。表面には赤色土がよく発達しており，その下位にチャートや頁岩，砂岩，花崗岩等の人頭大程度の礫を多く含む礫層が堆積する。

磐城山遺跡は，この水沢扇状地の扇端部に位置し，緩やかに傾斜しながら東へ張り出す舌状地形に位置している（Fig.2）。周囲には同じような舌状の台地が枝状に別れ，そこには多くの遺跡が展開している。

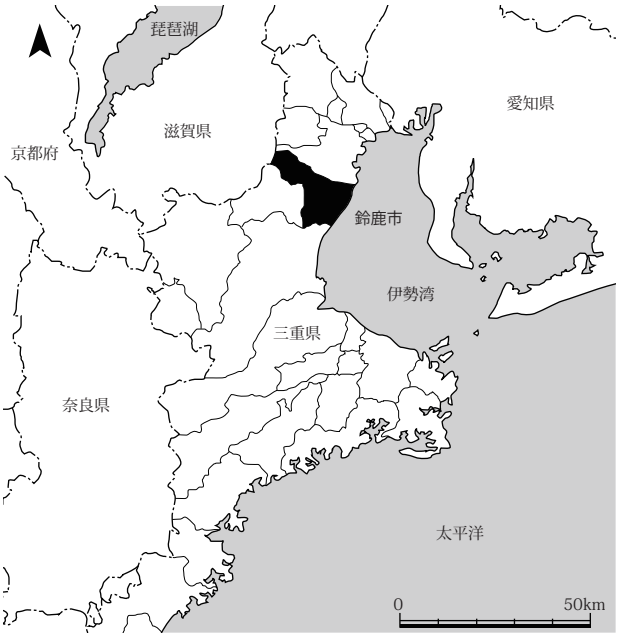


Fig.1　鈴鹿市の位置（S=1/2,000,000）

Tab.1　磐城山遺跡の発掘調査履歴

調査次数	調査要因	調査面積(㎡)	調査期間	調査担当	概要報告書 / 報告書	調査概要	遺構番号
プレ1次	道路建設（県道）	1,100	1993/5/11～1993/8/6	森川常厚	1994 『磐城山遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター	中世城館（西側に隣接する木田城跡）に係る堀状遺構を確認する。一部，竪穴住居や中世の土坑検出する。	01～
第1次	道路建設	3,000	1997/9/12～1998/2/23	杉立正徳	杉立正徳　1998 「Ⅱ.6. 磐城山遺跡」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』Ⅴ　鈴鹿市教育委員会	丘陵端部を寸断する濠（山中式）を検出し，その西側で竪穴住居等が多数確認する。	01～
第2次	道路建設	2,000	1998/8/20～1999/1/22	岡田雅幸	岡田雅幸　2000 「Ⅴ.7. 磐城山遺跡（2次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第1号	弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居を多数確認。古代の溝や掘立柱建物も確認される。柱穴から水晶出土。	01～
第3次	農地改良	740	2010/6/21～2011/3/31	田部剛士	田部剛士　2011 「Ⅳ.6. 磐城山遺跡（第3次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第13号	弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居を多数確認。古代の溝が南北にのびることを確認。	0301～
第4次	農地改良	315	2011/4/4～2011/10/2	田部剛士	田部剛士　2013 「Ⅲ.1. 磐城山遺跡（第4次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第14号 田部剛士　2014 『磐城山遺跡第4･5次発掘調査報告書』鈴鹿市考古博物館	竪穴住居が弥生時代後期初頭（八王子古宮式）まで遡ることが確認される。	0401～
第5次	農地改良	620	2012/6/25～2013/1/11	田部剛士	田部剛士　2014 「Ⅲ.2. 磐城山遺跡（第5次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第15号 田部剛士　2014 『磐城山遺跡第4･5次発掘調査報告書』 鈴鹿市考古博物館	丘陵北東端では遺構の残りが悪いものの，古墳時代後期の竪穴住居が多くなる。また，1次調査の濠は丘陵北端では確認されない。	0501～
第6次	農地改良	325	2013/8/20～2014/3/25	田部剛士	田部剛士　2015 「磐城山遺跡（第6次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第16号	弥生時代を中心とした竪穴住居に加え，中世の土坑墓2基が確認された。	0601～
第7次	農地改良	650	2014/4/2～2014/8/22	田部剛士	田部剛士　2015 「磐城山遺跡（第7次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第17号	弥生時代・古墳時代の竪穴住居と共に，古代の直線的な溝（区画溝か）を確認した。	0701～
第7-2次	農地改良	87	2015/2/6～2015/3/18	田部剛士	田部剛士　2015 「磐城山遺跡（第7次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第17号	弥生時代後期の竪穴住居とともに掘立柱建物を確認した。	0801～
第8次	農地改良	426	2015/6/2～2015/11/5	田部剛士	田部剛士　2017 「磐城山遺跡（第8次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第18号	弥生時代後期の竪穴住居の他，ほぼ同じ場所で掘立柱建物（倉庫）が9棟以上が建て替えられていることを確認した。	
第8-2次	農地改良	220	2016/1/25～2016/3/25	田部剛士	田部剛士　2017 「磐城山遺跡（第8次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第18号	第8次調査区から続く，竪穴住居や掘立建物等の延長を確認した。	08201～
	合計	9,483					

※ゴシック体は本書に掲載の調査

2　歴史的環境

市内において旧石器時代と縄文時代の遺構・遺物は少ないものの，台地上の西ノ岡Ａ遺跡を中心に，茶山遺跡，富士山越遺跡，北植松遺跡，境谷遺跡等でナイフ形石器の採集が知られている（Fig.3）。西ノ岡Ａ遺跡のナイフ形石器は 22 点採集されており，他にも掻器や削器が出土するなど，県下でも有数の旧石器時代の遺跡となる可能性がある（岡田 2005）。また，木田坂上遺跡では縄文時代晩期末の土器棺墓が２基確認されている（藤原 1996）。

磐城山遺跡周辺では，弥生時代に入ってから遺跡の形成が活発化する。弥生時代前期には，八重垣神社遺跡で大量の土器を包含する流路が幾筋も確認され（新田 2010），沖積地の利用が確認できるようになる。第Ⅱ様式の存在がやや乏しいものの，下流に 1.5km 離れた須賀遺跡では第Ⅱ様式の環濠と目される大溝や方形周溝墓等が確認されている（吉田 2012，田部 2013）。第Ⅲ・Ⅳ様式以降は，台地上で遺跡の展開が活発化する。第Ⅲ様式には寺山遺跡や境谷遺跡等で円形の竪穴住居が散見され（浅野 2007，2008，吉田 2007），第Ⅳ様式には扇広遺跡や寺山遺跡，境谷遺跡，沖ノ坂遺跡，中尾山遺跡等で方形へと変化することが知られている（藤原 2005，新田 2003，2005）。また，第Ⅳ様式の終わりには，中尾山遺跡の集落が衰退し，方形周溝墓が群集して築かれるので，周囲の集落の消長と関連して考究する必要がある。次いで遺跡が大きく展開するのは第Ⅴ様式後半の頃で，磐城山遺跡，南山遺跡等で竪穴住居が検出される（田部 2012，2014，2015，藤原 2007）。なお，この頃の墓域は判然としない。

これまで第Ⅴ様式前半の遺跡は希薄とされてきたが，近年，扇広遺跡や磐城山遺跡で竪穴住居が確認されたり，八重垣神社遺跡で方形周溝墓が検出されたりしているので，ようやくその姿が見えてきた観がある。この意味において，磐城山遺跡の調査は重要な知見をもたらしてくれるといえる。

古墳時代前期初頭に入ると，高岡丘陵上の青谷遺跡で竪穴住居が確認されるようになるが（大場・仲見 1972），磐城山遺跡の集落はほぼ衰退してしまう。また，環濠とされている溝も，ほぼ第Ⅴ様式（山中式）までには概ね埋まっている。この時期には，沖積地の八重垣神社遺跡や宮ノ前遺跡等で集落跡が確認されているので，遺跡の中心が再び低地部へ移動した可能性も考えられる（田部 2015b，2017）。なお，古墳時代中期段階の動向は不明確であるが，宮ノ前遺跡で初期須恵器が出土する等，引き続き低地部に活動拠点があったものと推定される。さらに，宮ノ前遺跡や河田宮ノ北遺跡等では，6 世紀代の遺物を大量に含む自然河道が確認されており，この段階の居館がある可能性も指摘されている（伊藤 2004）。

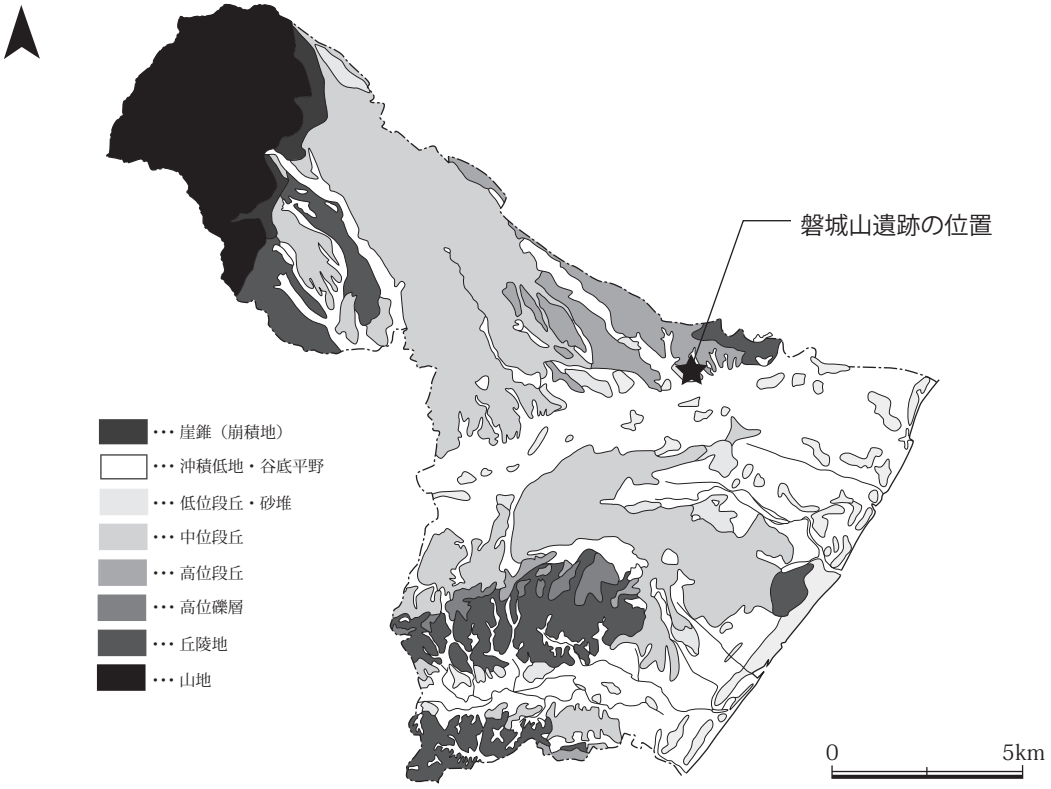
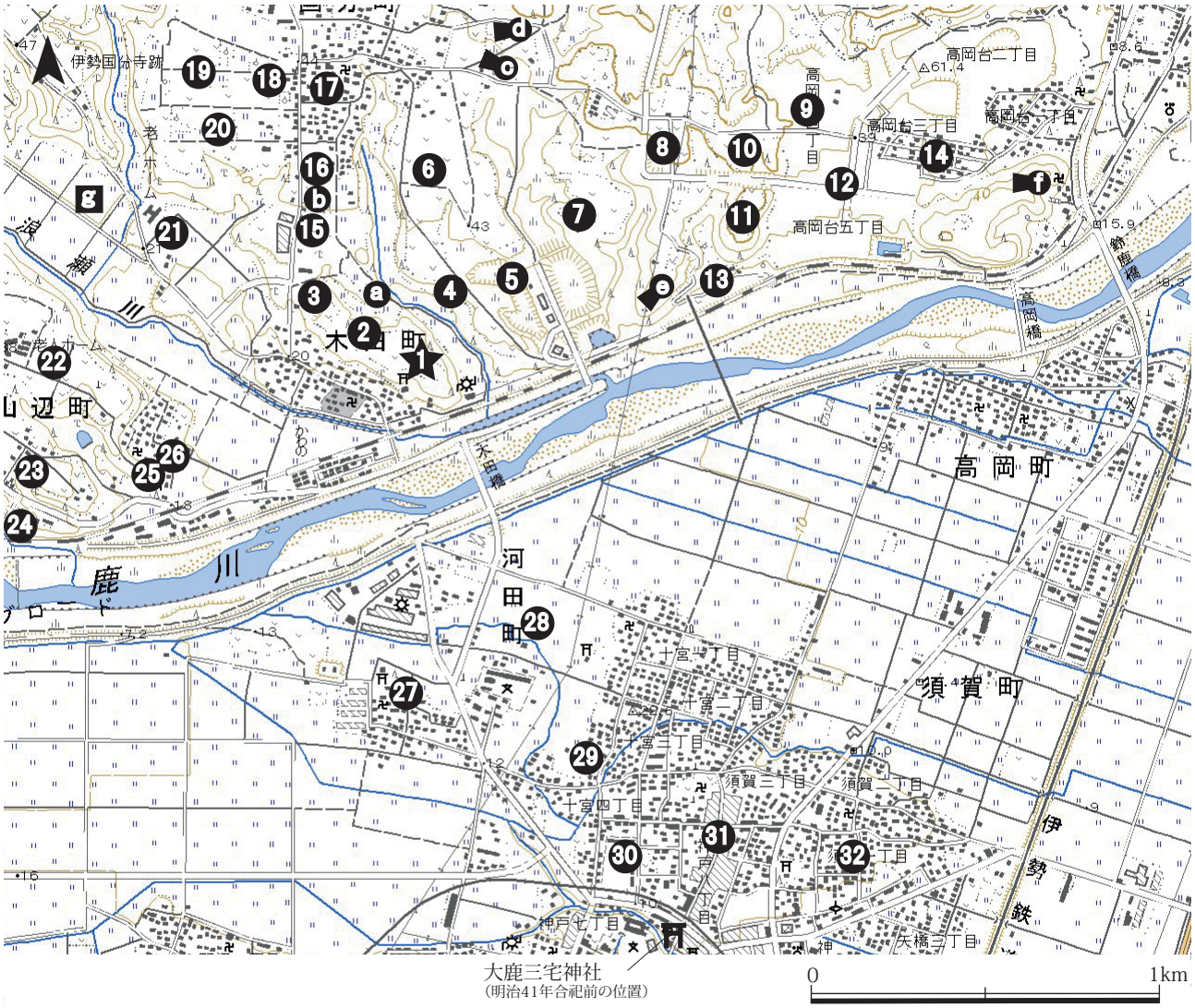


Fig.2　鈴鹿市の地質（S=1/200,000）

一方，鈴鹿川下流域の古墳は，左岸の台地上に築造されているものが目立つ。最古のものは寺田山 1 号墳と推定され，全長約 80 mの前方後円墳の柄鏡形を呈す。発掘調査がなされたことはないが，5 世紀初頭ないしは 4 世紀代に遡る可能性が指摘されている。他の前方後円墳としては，全長約 50 mの富士山 1 号墳，同 40 m級の高岡山 9 号墳，同 14 mの富士山 10 号墳等がある。富士山 1 号墳と高岡山 9 号墳は未発掘だが，富士山 10 号墳は，発掘の結果，埴輪列を伴う 6 世紀初頭の古墳であることが判明している（中森 1978）。寺田山 1 号墳が盟主的な古墳であり，富士山 1 号墳等がそれに後続する古墳になるのであろう。周囲に築かれた古墳群は，いずれも 5 世紀末から 6 世紀代の古墳であるようで，5 世紀代まで遡り得る古墳としては，直径約 35 mの円墳である大鹿山 1 号墳が想定できるかもしれない。6 世紀末から 7 世紀にかけての群集墳は，伊勢国分寺跡や中尾山遺跡等で見つかっている（藤原 2017，2018）。

古代になると，台地上に重要な施設が建ち並ぶようになる。7 世紀後半には，南浦遺跡（通称「大鹿廃寺」）で早くも白鳳寺院が建立される（浅尾 1993）。市内の 7 世紀代の瓦は，平田遺跡や天王遺跡，土師南方遺跡等で出土し（田部 2016，林 2004，山田 1973），山辺瓦窯跡で生産の痕跡が窺える（杉立 1997）。なお，この 7 世紀頃の集落は，境谷遺跡や国分寺跡などで確認されており，



1 磐城山遺跡　2 木田城跡　3 木田坂上遺跡　4 沖ノ坂遺跡　5 中尾山遺跡　6 国分東遺跡　7 境谷遺跡　8 寺山遺跡　9 扇広遺跡　10 西ノ岡 A 遺跡　11 西ノ岡 B 遺跡　12 東ノ岡遺跡　13 寺田山遺跡　14 青谷遺跡　15 南浦遺跡　16 国分南遺跡 17 国分遺跡（推定伊勢国分尼寺跡）　18 国分西遺跡　19 伊勢国分寺跡　20 狐塚遺跡（推定河曲郡衙跡）21 間瀬口遺跡　22 添遺跡　23 口山遺跡　24 南山遺跡　25 山辺窯跡　26 山辺東遺跡　27 河田宮ノ北遺跡　28 八重垣神社遺跡　29 宮ノ前遺跡　30 十宮古里遺跡　31 萱町遺跡　32 須賀遺跡

a 大鹿山 1 号墳　b 大鹿山 6 号墳　c 富士山 1 号墳　d 富士山 10 号墳　e 寺田山 1 号墳　f 高岡山 9 号墳　g 蛸田古墳

●･･･ 前方後円墳　■･･･ 方墳　●･･･ 円墳

Fig.3　遺跡の位置（S=1/20,000）

再び台地上で生活の痕跡が確認できる。

また，詳細な時期は不明ながら，伊勢国分寺跡の南に隣接して，古代河曲郡の郡衙とされる狐塚遺跡が確認されている（藤原 2016）。品の字に配置された政庁跡に加え，西方約 200 mには正倉が整然と建ち並んでいる。なお，これらの建物群は，国分寺建立以前の建物と推定され，国分寺建立に際して移動したと推定されるが，その場所は未発見となっている。8 世紀後半以降は伊勢国分寺跡がそびえ，東方 200 ～ 300 mには国分尼寺も並存していたものと推定される。これら国の重要施設は，古代官道とも無関係であったとは考えがたい。古代官道とは東海道のことであるが，市内で東海道を示す遺構は直接確認されていない。ただし，平田遺跡では幅 9 mの直線的な道路が，断続的に約 130 mにもわたって検出されている（田部 2016）。平田遺跡はちょうど，伊勢国分寺跡と「国府」の名前が残る国府町との中間に位置し，あたかも両者を繋ぐ位置，方向で検出されているので，東海道の可能性を考えておく必要がある。

中世後半になると，城館が大字毎に築かれるようになる。この内，沢城跡は沼状の周囲に盛土して築城した平城であり，内部には礎石建物も存在し，土師器皿を大量消費する等，中心的な城館であることが確認されている（田部 2009）。その後，16 世紀後半頃に神戸城へ移転したとされる。また，十宮古里遺跡では，残念ながら建物跡の確認されなかったが，おびただしい数の井戸が掘削され，多量の土器や陶磁器が投棄されていた（吉田 2018）。神戸城下の開発と軌を一にしている可能性があり，今後検証していく課題の一つである。なお，磐城山遺跡でも，木田城に関わると推測される地割りとともに，礫を多数詰め込んだ土坑墓と推定される遺構が 4 基以上検出される等，中世後半の人間の営為も確認されている。

中世末期（1567 年）には，織田信長による 1 度目の伊勢侵攻が行われる。この時は，神戸城の北約 3km の位置する高岡城において，山路弾正の指揮の下，これを防いだという。当然，高岡城の一つ西に位置する木田城も無関係であったとは考えがたく，高岡城を後ろから支える役割を果たしたのであろう。しかしながら，翌 1568 年の 2 度目の伊勢侵攻で再び襲撃された際には耐え切れず，信長によって平定されてしまう。その後は，信長の三男である織田信孝が養子縁組みにより入城し，城主として君臨することとなる。

3　大鹿氏について

古代豪族として『日本書紀』に大鹿氏の名が見え，鈴鹿市を本貫とする可能性が指摘されている（岡田 1995）。敏達天皇四年（575）の条がそれで，「次采女伊勢大鹿首小熊女菟名子夫人生太姫皇女更名櫻井皇女與糠手皇女更名田村皇女」とある。これによると，伊勢に大鹿氏という氏族があり，首姓を名乗っていること，小熊の娘に菟名子という人物がいて，采女として出仕していること，その菟名子が敏達天皇との間に 2 人の皇女を生んでいるとこと等が分かる。糠手姫皇女は後に押坂彦人皇子と結婚し，田村皇子（後の舒明天皇）を生んでいる。また，『古事記』の雄略天皇の条にも「伊勢国三重の采女」や「伊勢の采女」との記述があり，これらの采女を大鹿氏が輩出している可能性もある。いずれにしても，大鹿氏は伊勢国で唯一天皇家に繋がる家系であり，この時期に大鹿氏の本貫地において中央との関係が強くなることは十分に想像される。河曲郡は面積が小さい割りに，延喜式内社が二十座も存在し，中には「大鹿三宅神社」の名前もある。文献上には登場しないものの，大鹿のミヤケが存在した可能性もあり，磐城山遺跡の性格を考究する上で示唆的である。

その後は，伊勢神宮の創建から平安末期までの出来事を記した『太神宮諸雑事記』に，「河曲神戸預大鹿武則」の記録がある。河曲郡には神戸が設定されており，その役目を大鹿武則が負っていたとのことである。平安時代の遺跡としては，鈴鹿川右岸の低位段丘上にある萱町遺跡で見つかっている 9 世紀代の竪穴住居が顕著である。また，同じ段丘上の十宮古里遺跡や須賀遺跡等でも，井戸や流路が見つかっている。このように，鈴鹿川右岸の低位段丘上に比較的古代後半期の遺跡がまとまるようになる。

さらに，鎌倉時代には，源頼朝の命によって地頭御家人で駅家雑事の課役を負担していない者の名を提出させているが，この役目を担当したのが「大鹿兼重」や「大鹿国忠」という人物であったことが知られている。このことから，中世に至るまで大鹿氏が在地の氏族として活躍している様子が窺える。実際に河曲郡内でも，竹野一丁目遺跡や境谷遺跡，伊勢国分寺跡，大木ノ輪遺跡，上箕田遺跡等で中世前期の一般的な集落跡は確認されているが，有力者の館と推定されるようなものは未確認である（真田ほか 1970）。

なお，大鹿氏の本貫地については，三重県多気郡多気町の相可の地とする説もある。ただし，この説の理由は，相可が「オウカ」と読まれることを主な根拠としており，考古学的な遺跡のあり方や後の文献等の内容を踏まえると，鈴鹿市の国分町を中心とした河曲地区がふさわしいという（岡田 1995）。

第Ⅲ章　調査の方法

1　調査区

発掘調査は平成22年度の第3次調査から継続して行っている（Fig.4）。第3次調査区は，既設市道（第1･2次調査区）の北側に設け，毎年そこから北と西へ広げるように拡張してきた。平成26年度の第7次調査区にて台地の北端まで到達したので，そこから西側へと展開し，南西方向に拡張を繰り返しながら調査区を広げている。

よって，第7-2次調査区は，第7次調査区の西側に隣接して設けた。地番としては，鈴鹿市木田町字上條2275番，2276番の一部である。第8･8-2次調査区は，第7-2次調査区を包含する形で南西に拡張した。地番は，同上條2275番，2276番の残りと，2279番の一部となる。

調査区は，概ね100～200㎡程度の方形を目安として任意に区切って進めた。この小単位は，便宜上，調査年次毎に方位を用いた北区，中区，南区等と呼称し，一つの小単位を調査し終わった後に，次の調査区を順次拡張する流れで調査を進めた。第7-2次調査区は1単位のみで，約87㎡を調査した。また，第8次調査区は，北区，中区，南区の3区画，第8-2次は北西区，南西区の2区画ある。第8次調査区全体では，合計5区画の約646㎡が対象となる。

2　地区割り

調査地内においては，国土座標第Ⅵ系に基づいて3m四方の枡目（以下，グリッドとする）を設定した（Fig.5）。グリッドは，磐城山遺跡の存在する台地全体を被覆するように配慮し，X=-122,100，Y=41,000を基点として，記号と番号を割り振った。

南北方向には2桁の算用数字を与え，東西方向にはアルファベットの2文字を組み合わせて，北西隅の点をグリッドの名称とした。その結果，第7-2･8･8-2次調査区は北が36グリッド以南，南が49グリッド以北に収まる。また，西はCIグリッド，東はCSグリッドまでに含まれる。

3　遺構番号

調査範囲が広大なため，原則として遺構番号は通し番号とし，調査の進行順に番号を付すことにした。本書では，調査時の番号をそのまま利用することとする。なお，遺構の表記としてはSH0801のように表す。これは，下記の性格を示す記号と調査次数を表す「08」，調査段階で付与した個別識別番号「01」からの連番の組み合わせという意味である。ただし，第7-2次調査区は規模が小さく，調査区の位置から第8次調査区の先行調査的な性格が強いため，調査次数を示す番号は「08」とした。また，第8-2次調査区の個別識別番号は，8次調査で100番台まで使用したことから，「201」からとした。遺構には複数の遺構番号がつけられたものもあるが，本書では最終的に一つ番号に統一して表記した。なお，数字の前に表記したアルファベットの内容は下記の通りである。

SH･･･竪穴住居　SB･･･掘立柱建物　SA･･･柵
SK･･･土坑　SX･･･性格不明のもの　SC･･･道路
SD･･･溝　pit･P･･･柱穴・ピット

4　基本層序

調査区内において10～20cmの表土の直下で，黒褐色系の遺構埋土か黄褐色砂礫層（以下，地山とする）が存在する。第8次調査区の南側ほど，表土直下で黒褐色の遺構埋土が多く確認され，遺構密度が高かった。また，その深さも深い所で30cmに及んだ。

一方，各調査区の北側にいくほど，表土の直下で地山や礫層が確認された。ちょうど，調査区の北端は台地が急激に落ち込んでいることから，地形的に土砂の流出が激しかったと推測される。これを査証するように，竪穴住居でも周壁溝や柱穴などの深い遺構しか残らず，検出面からの遺構の深さも5～20cm程度と浅くなっている。

また，地山とした黄褐色砂礫層（赤色土）は，第4次調査区では70cm程度の厚さがあり，その下部に人頭大の礫を多量に含むにぶい黄灰色の層序が，約2m堆積している。これらの層序は，更新世に堆積したとされる古期水沢扇状地堆積物に該当する。磐城山遺跡の遺構は，この黄褐色砂礫層の上面から掘削されているが，この土層の流出が激しい台地の端では，その下層の礫層まで遺構が掘り込まれている。

なお，市内の残りのよい場所では，黄褐色砂礫層の上位に，黒色シルト層（地元では，黒ボクと呼称している）が堆積していることがある。この黒ボクは完新世以降の新しい堆積層といわれている。縄文時代晩期の遺構がこの黒ボクの上面から掘り込まれているので，それ以前ということは確認できるが定かでない。

磐城山遺跡がある台地上でも，本来は黒ボクが存在したはずであるが，周辺の弥生時代の中期以降の埋土に黒ボクが確認されないことから，それ以前に台地上の黒ボクはほとんど失われてしまったのであろう。

Fig.4　第 1-8 次調査区遺構配置図（S=1/300）

第Ⅳ章　検出遺構

今回の調査では，これまでの調査と同じく数多くの遺構が確認された。特に，竪穴住居の重複が顕著であった（Fig.6・7）。なお，第８次調査区の北端では土砂の流失によって，遺構の上部は既に失われてしまっており，表土直下に黄褐色砂礫層（地山）の下層である礫層が現れていた。検出された竪穴住居の多くは，北東隅や北西隅ないしは南辺中央に掘られた土坑（以下，南辺中央土坑とする）から溝が伸びていた。この溝の多くは標高が低い北側へのびており，水を逃がす排水の役割があったものと推定できる。

第８次調査の目立った成果は，これらの竪穴住居の上面で，数多くの柱穴を検出したことである。調査段階には把握しきれなかったが，のべ 13 棟の掘立柱建物が築かれている。いずれも総柱建物であり，内 10 棟は著しく重複する特徴がある。一時期に２棟存在する時期があったかもしれないが，繰り返し同一地点を選地するという固定性が感じられる。なお，出土遺物は柱穴という性格上少なく，弥生土器の混入の他は古墳時代後期から飛鳥時代にかけての須恵器の破片程度である。これらの建物は，周囲を方形に囲む可能性のある溝 SD0777 等の方位とほぼ一致する点は極めて示唆的である。

以下，比較的まとまった内容の遺物を出土した遺構を中心に解説するが，ある程度の遺構のまとまりごとに記述する。これは，重複している遺構を同時に掘削しているものを含んでいるためであり，取り上げ遺物が混在している可能性を孕んでいることによる。

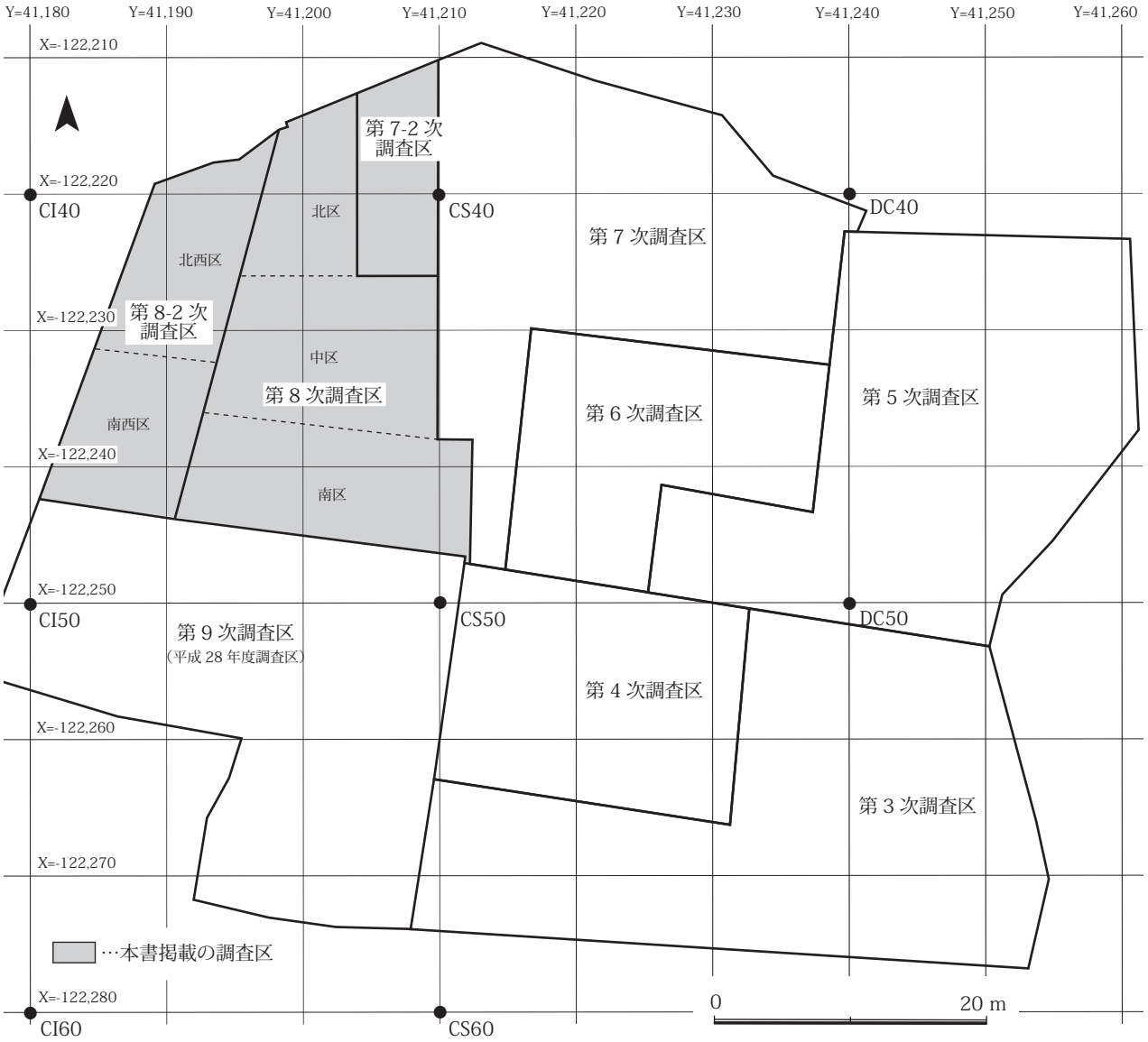


Fig.5　調査区の地割り（S=1/500）

Fig.6　遺構配置図①（SH・SD 番号入り）（S=1/200）

Fig.7　遺構配置図②（SA・SB・SK・SX 番号入り）（S=1/200）

1　竪穴住居

SH0821/22/23（Fig. 8）

第 7-2 次調査区の北端で検出した。南側半分程度を確認したにとどまるが，北半は土砂の流失が激しく崖となっており，大部分が消滅している。3 棟が重複して検出され，西側を SH0821，東側を SH0822 とした。また，SH0821 と SH0822 の下部で SH0823 を確認している。なお，3 棟はともに SH0841 よりも古い。

東西は 6 m前後で，南側の主柱穴が東西 2 ヶ所で確認されている。柱穴は 3 棟分が重複している。床面までの土砂が流失しているので，焼土等の痕跡は確認できない。

いずれも出土遺物に乏しいが，弥生土器のみで占められ，かつ後出する SH0841 が弥生時代後期の遺構と考えられるので，それ以前に遡る建物だと判断できる。

SH0841（Fig. 8）

SH0821/22/23 よりも新しく，SH0817 よりも古い建物である。東西約 8 m と規模が大きい。SH0821 等と同様，遺存状況が悪く，焼土等の痕跡は確認できなかった。

出土遺物は少ないながらも弥生土器のみで占められ，概ね弥生時代後期の建物といえる。

SH0843（Fig. 8）

SH0821/22/23 の西方で確認した。南側の主柱穴らしき柱穴が確認されたことから，竪穴住居と考えたが，西辺に当たる溝が 3 条以上が重複しているので，後述する SH0830/31/32 の排水溝と理解すべきかもしれない。あるいは竪穴住居と，排水溝とが重複していることも考えられる。

出土遺物は弥生土器のみであるので，弥生時代後期頃の蓋然性が高い。

SH0830/31/32（Fig. 9）

第 7-2 次調査区の北端で検出した。東西 7 ～ 8 m，南北 7 m前後の建物である。少なくとも 3 棟が重複していることを確認しており，南側から SH0830，SH0832，SH0831 とした。SH0832 が古く SH0831，SH0830 が新しい。また，SH0830/32 は SH0804 よりも古い。床面の中央部には直床炉を確認している。調査区の北側は急斜面となっており，遺構は消失してしまっている。

出土遺物は少ないが，弥生土器が出土しており，弥生時代後期頃の建物と判断される。

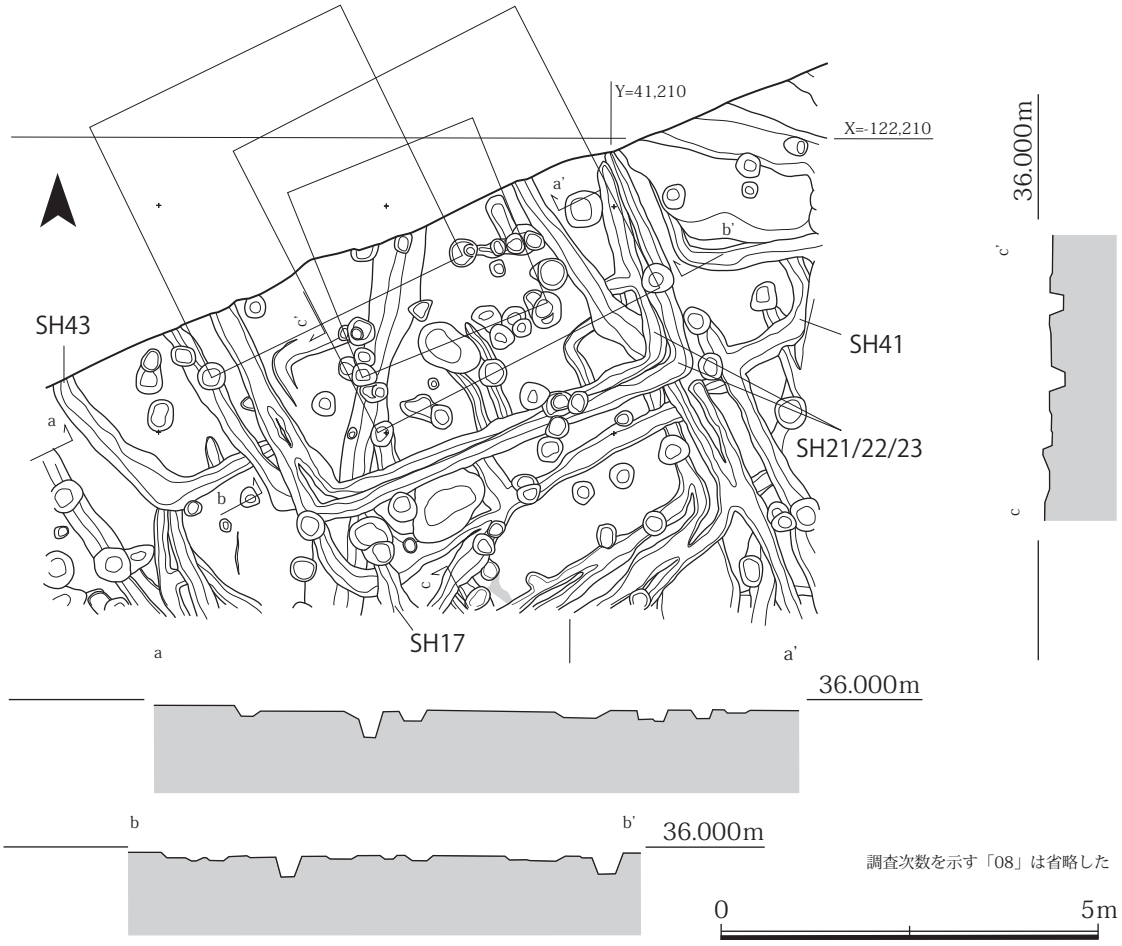


Fig.8　SH0821/22/23・SH0841・SH0843 平面・断面図（S=1/100）

SH0807/08（Fig. 9）

SH0830/31/32 と SH0821/22/23 との間で確認した。2 棟が重複しており，南側を SH0808，北側 SH0807 とした。北側の SH0807 が新しい。東西は約 8 mあり，南北は推定 7 m前後である。

出土遺物の量は少ないが，Fig.44-5 の鉢が出土している。5 は当初，SH0811/12/13 の西辺周壁溝として取り上げたが，該当部分からは外れており，本来 SH0807/08 の周壁溝に含まれていたと理解した。他も弥生土器で占められており，概ね弥生時代後期の建物だと考えられる。

SH0811/12/13（Fig. 9）

SH0830 等の中央で東西方向に走る溝を確認した。少なくとも 3 条以上が存在し，北側から順に SH0811，SH0812，SH0813 とした。重複関係は判然とせず，不明である。これらの溝の上面では焼土を 1 ヶ所確認した。

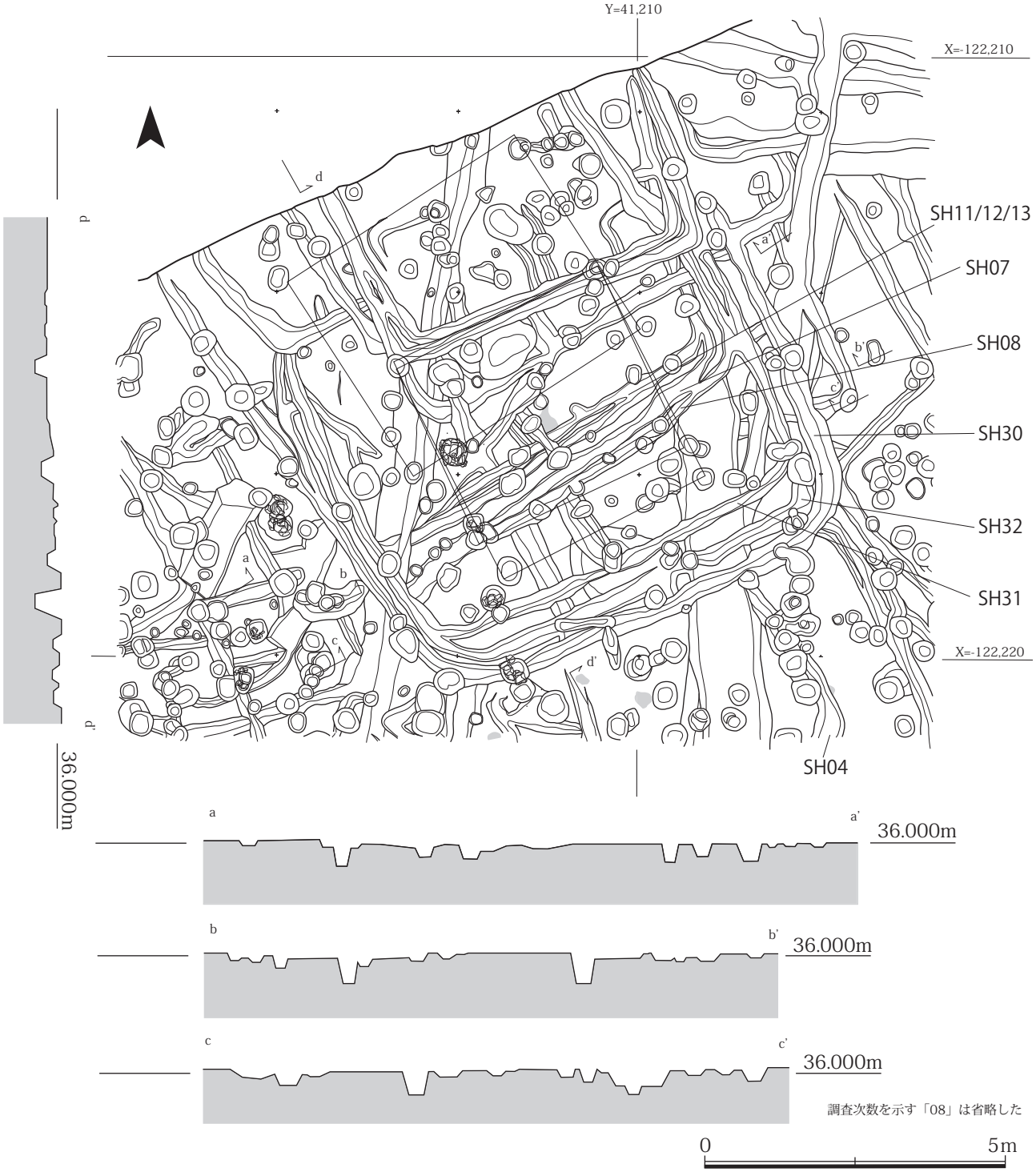


Fig.9　SH0807/08・SH0830/31/32・SH0811/12/13 平面・断面図（S=1/100）

その位置関係から，SH0830/31/32 の直床炉と推定されるので，SH0830 以前の遺構だと考えられる。

東側で北方で屈曲すると判断して竪穴住居として調査したが，明確な主柱穴は確認できなかった。また，後述する SH0848/49/67/68 等の北東隅から派生する排水溝である可能性も否定できない。

出土遺物は弥生土器のみで占められていることなどから，弥生時代後期頃の建物と考えて矛盾しない。

SH0816（Fig. 10）

第 7 次調査の際に SH0788 として報告していたものの西辺部分を SH0816 として調査した。前回の調査では確認しきれなかったが，SH0804 よりも古い建物であることを確認した。東西 5.8 m，南北 5.5 m前後となる。

出土遺物の特徴から，弥生時代後期頃の建物としてよいだろう。

SH0804/19/20（Fig. 10）

SH0816 の西側に隣接して確認した。SH0816 よりも新しい建物となる。SH0830/31/32 とも重複するが，SH0804 の方が新しい。東西は 6.8 m前後あり，南北もほぼ同じであろう。床面の中央に数ヶ所の焼土が確認され，これが直床炉に相当しよう。SH0804 の内部には SH0819/20 が検出されたが，これらとの前後関係等は詳らかにできなかった。

弥生土器が出土しており，概ね弥生後期の建物として理解できる。

SH0848/49/67/68（Fig. 11）

第 8 次調査区で検出した。いずれも SH0853 よりも古い。一応，4 棟の建て替えまでは理解できたが，本来，もっと棟数が多かった可能性は否めない。新旧関係は，SH0849，SH0867 より SH0848 が新しいことは確認できたが，他ははっきりと理解できなかった。

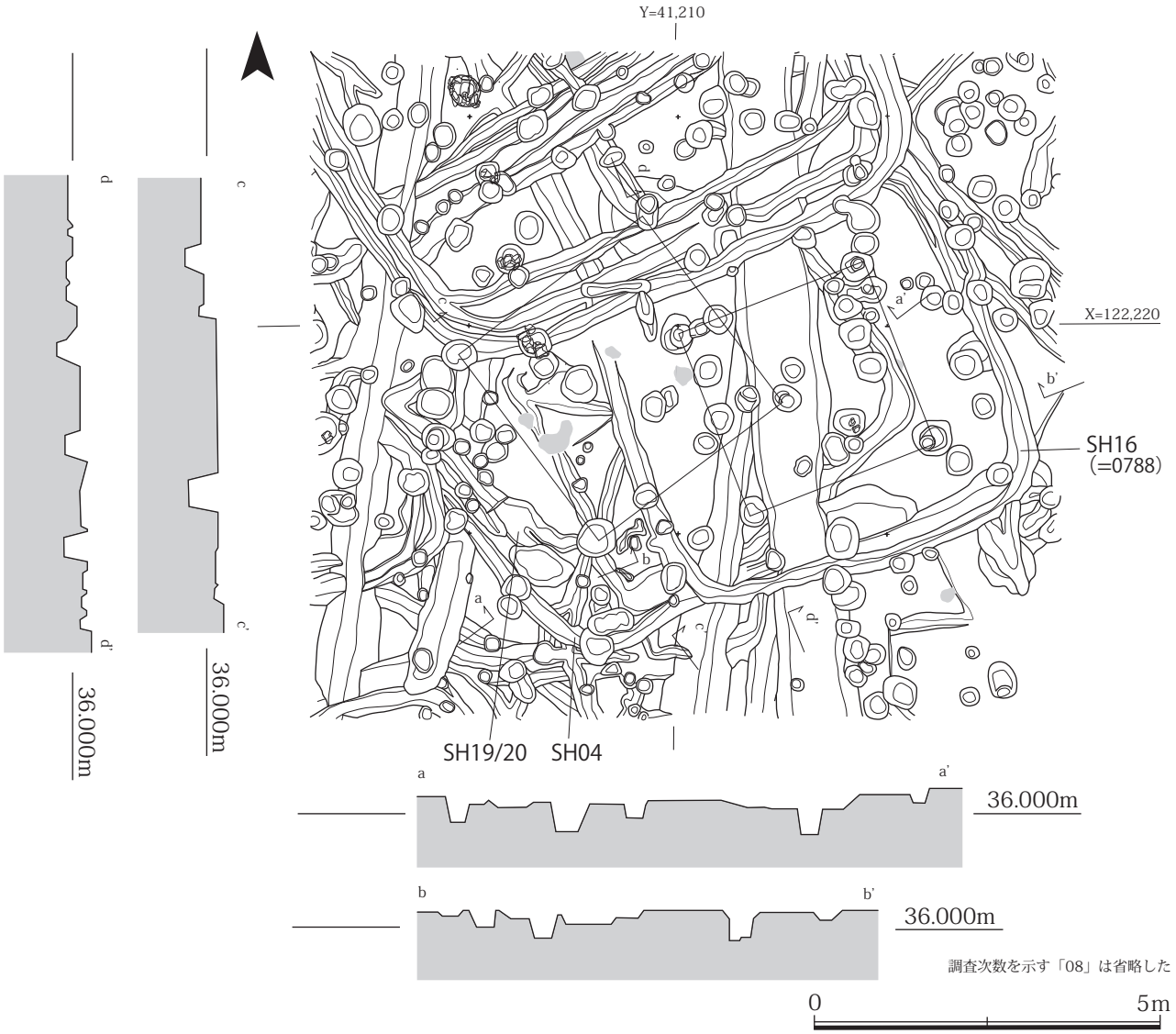


Fig.10　SH0804/16/19/20 平面・断面図（S=1/100）

4 棟の内で最大規模の SH0848 は，東西 5.5 m ある。南北は不明瞭だが，主柱穴の位置から同規模程度の 5.5 m前後と想定できる。柱穴は著しく重複している。焼土は確認できなかったが，1 基のみ南辺の中央付近で土坑を確認した。

これらの建物の北東隅は，現代溝によって削平されているため不明であるが，先に述べた SH0811/12/13 とした溝が，これらの建物から派生する排水溝となる可能性もある。

出土遺物はほとんどないが，遺構の重複関係から一番下位に相当する建物群とみられるので，弥生時代後期頃の建物として理解してよいだろう。

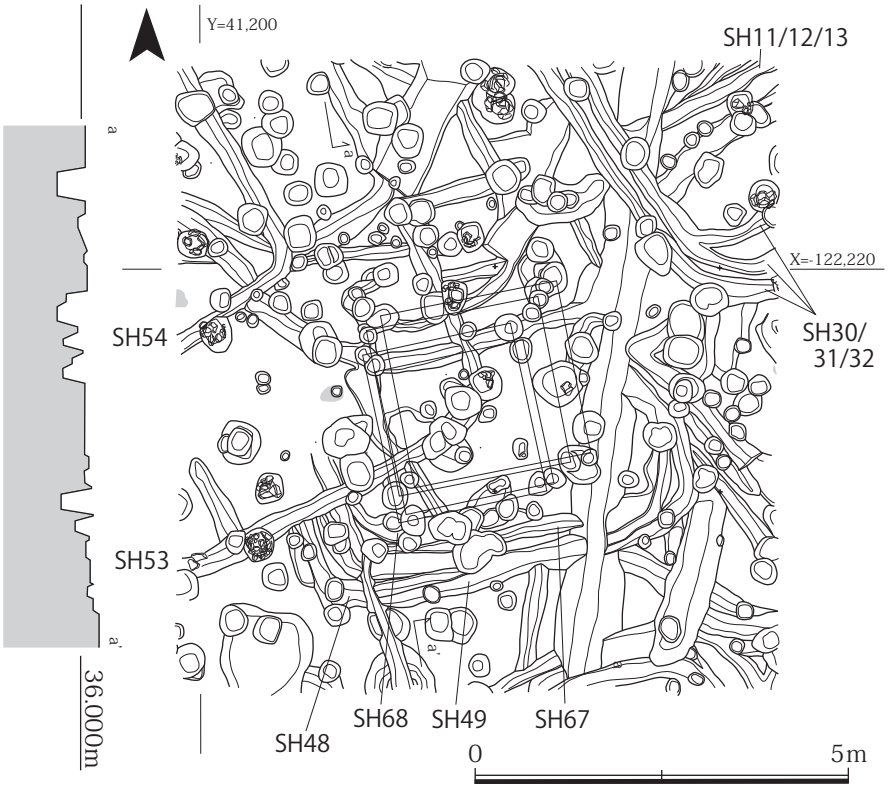


Fig.11　SH0848/49/67/68 平面・断面図（S=1/100）

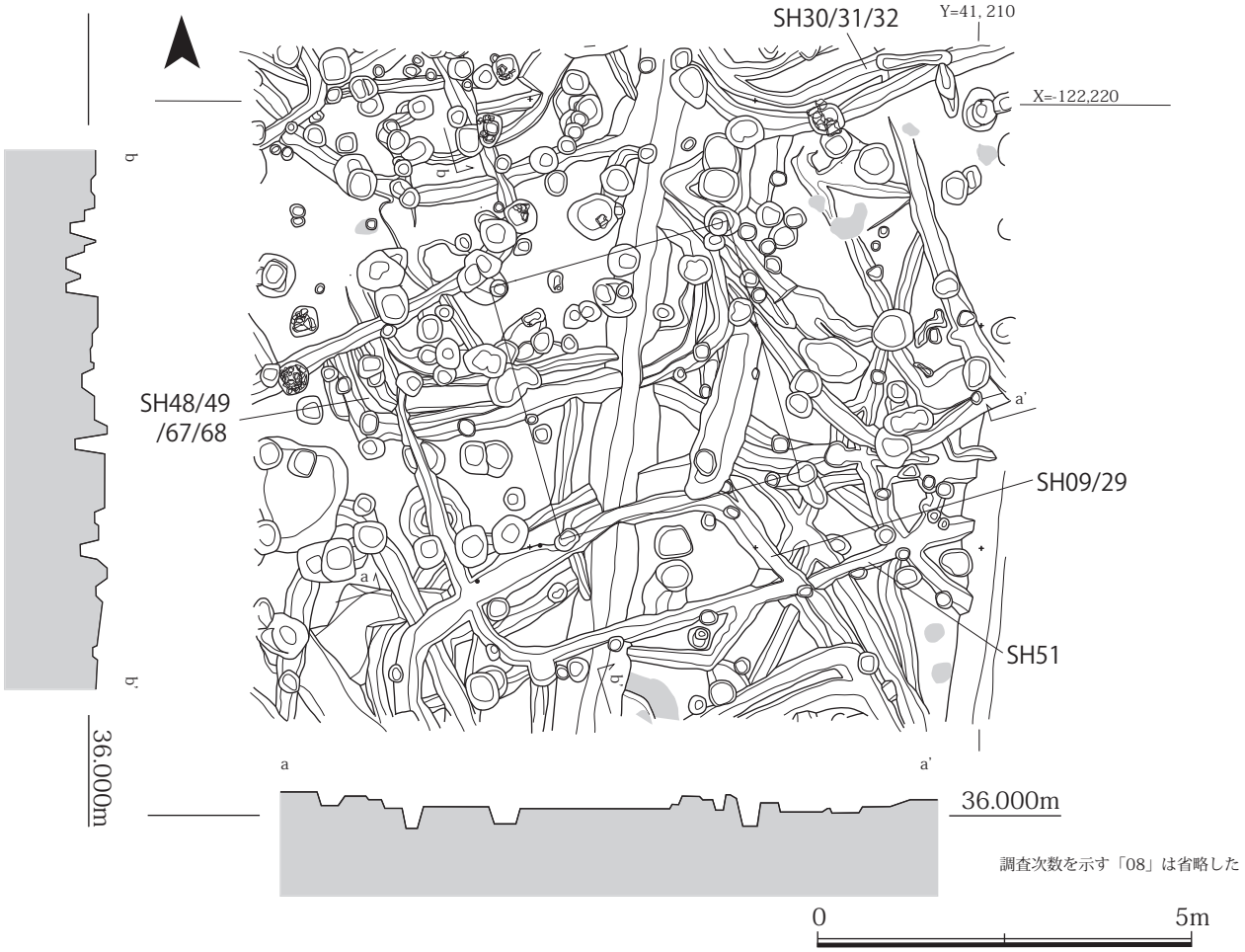


Fig.12　SH0851 平面・断面図（S=1/100）

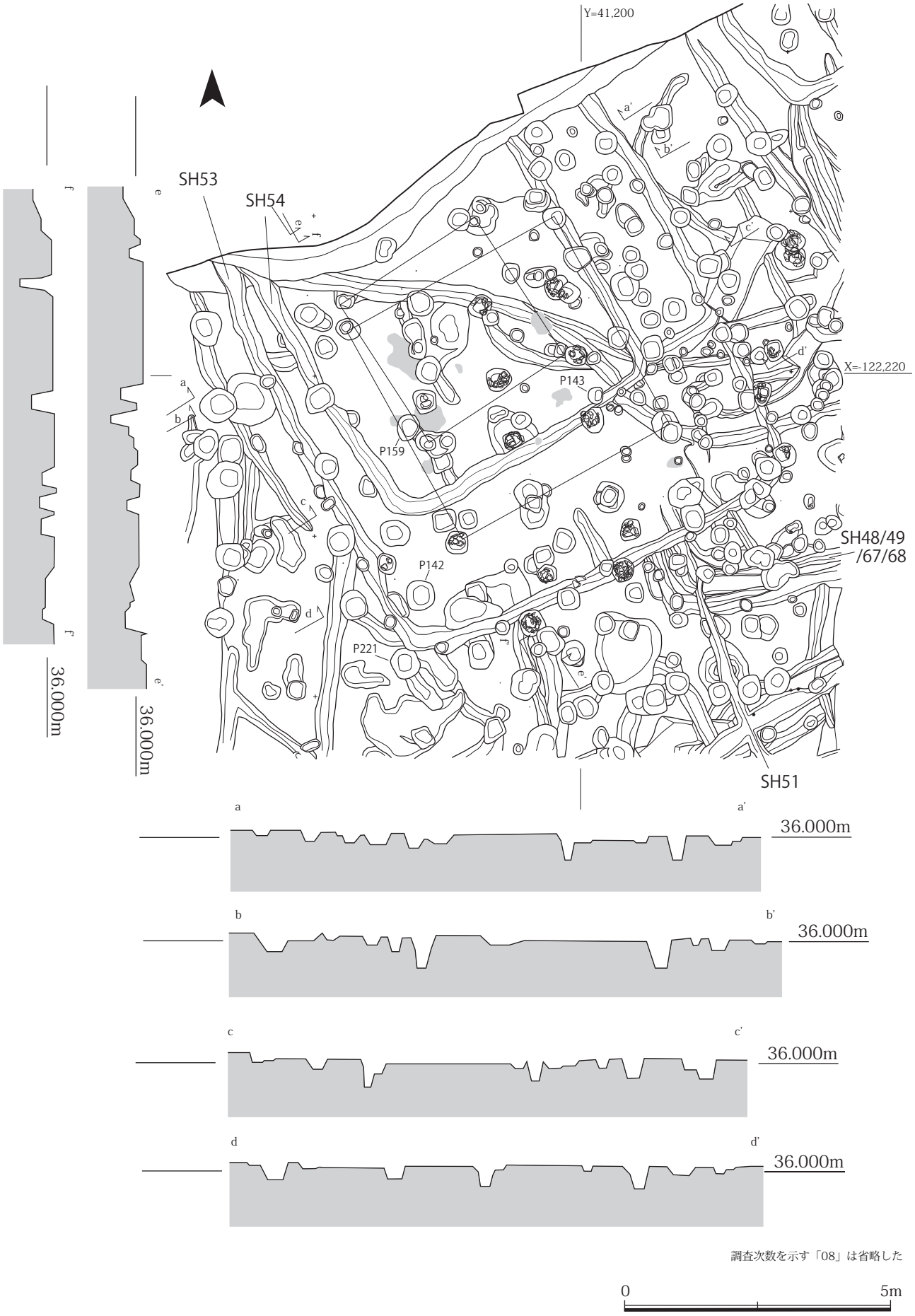


Fig.13　SH0853/54 平面・断面図（S=1/100）

SH0851（Fig. 12）

第８次調査区の北側で検出した。SH0848/49/67/68 や SH0805/09 等よりも新しく，SH0853 よりも古い。南側の周壁溝の肩には小柱穴（以下，壁柱穴とする）が巡る。他の辺は確認できなかったが，見落としている可能性もある。詳細は不明であるが，東西，南北とも 6.5 m前後となろう。焼土は確認されなかった。

SH0851 自体の出土遺物は乏しく年代を定かにし難いが，弥生土器ないし古式土師器の小片を含み，かつ後述する SH0853 よりも古いことから，弥生時代末頃の建物である可能性が高い。

SH0853/54（Fig. 13）

第８次調査区の北側で検出した。内側を SH0854，外側を SH0853 とした。SH0853 は SH0851 より古く，SH0854 や SH0848/49/67/68 等よりも新しい。

SH0854 は東西 5.8 m，南北 5 m以上となる。南辺中央土坑を持つが，壁柱穴等は確認できない。ちょうど中央に浅い土坑があるので，ここが炉跡であった可能性もある。

SH0853 は SH0854 よりも規模が大きく，東西 8.3 m，南北 8 m以上ある。床面の中央付近で焼土が複数ヶ所検出されており，これらが直床炉となるのであろう。南辺のやや西寄りで南辺中央土坑が確認され，そのやや東側で約 1 mの間仕切り溝を持つ。また，周壁溝には 1.2 ～ 1.3 mの間隔で壁柱穴が巡っている。

SH0854 の出土遺物は弥生時代後期のもので占められており，山中式の建物と考えられる。SH0853 も弥生土器ないし古式土師器が出土しており，弥生時代後期末から古墳時代前期初頭頃の建物として理解できる。

SH0864（Fig. 14）

第８次調査区の中央で検出した。SH0875 等よりも古い建物で，重複関係上，最も古い建物になる。

規模は東西は 6.7 m，南北 5.5 mで，平面形がやや長方形となる。南辺中央土坑を持ち，明確な 4 本柱の主柱穴を確認した。また，床面の中央には浅くくぼんだ土坑を持ち，その南側で焼土の痕跡を確認した。

出土遺物は弥生土器のみであるが，柱状脚の高杯が出土していることから，弥生時代後期の前半頃まで遡る可能性がある。

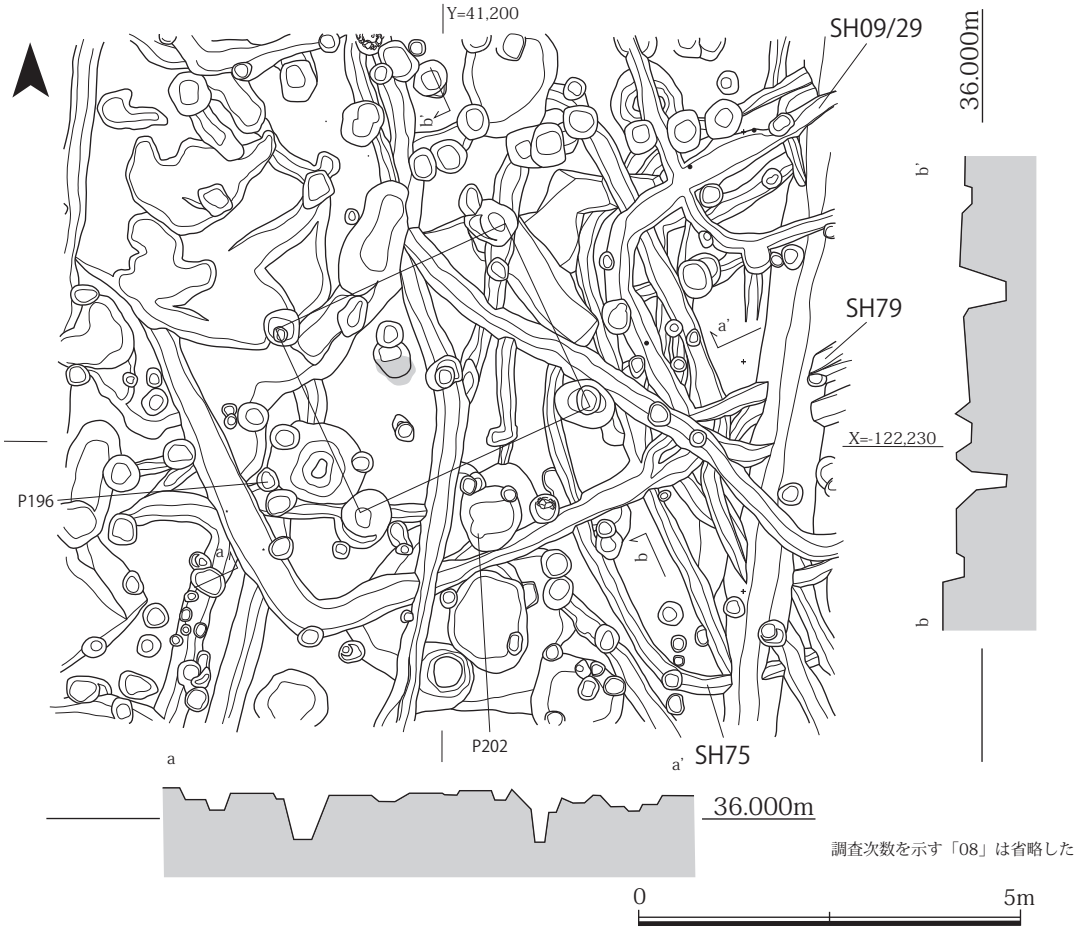


Fig.14　SH0864 平面・断面図（S=1/100）

SH0862/63（Fig. 15）

第８次調査区の中央で検出した。西側をSH0863，東側をSH0862とした。SH0862がSH0863よりも古い。ただし，SH0863の主柱穴等は明確にすることができず，竪穴住居ではない可能性も考えられる。

SH0862の東西は6.5 m前後，南北は6 m前後になろう。焼土やカマドの痕跡は確認できなかった。

SH0862の東辺周壁溝からは，須恵器や宇田型甕が出土しており，6世紀初頭頃の建物と考えられる。SH0863からも須恵器が出土しており，ほぼ同時期の建物と判断できる。

SH0867（Fig. 15）

第８次調査区の中央で確認した。調査の段階では竪穴住居と認識できず溝SD0867としていたが，円形住居の可能性があるので，ここで報告する。

南半分の周壁溝を検出したにとどまるが，直径６～７m程度の規模になりそうである。SH0862/63よりも古いことは確認しているが，SH0864との関係は不明確である。

弥生土器の小片が出土したのみで，帰属時期を明確にすることはできない。

SH0805(=74)/09/29/75/79/80/82（Fig. 16）

第８次調査区の中央東側で検出した。７棟が重複していることを確認したが，それ以上の建物があった可能性もある。①のSH0805(=74)，SH0829→SH0809と新しくなり，さらに②のSH0880→SH0882→SH0879となり，最後に③のSH0875の順で新しくなると理解して調査したが，重複が著しく判然としない。全体を概観すると，①の３棟の建て替え後に，②の３棟の建て替えへと移り，最後に③が建てられたと整理できる。

①ではSH0805とSH0829/09との前後関係が不明である。SH0805は東西6.5 m，南北6.0 m前後で，SH0829とSH0809がともに東西，南北とも5.5 m前後の建物となる。いずれも４本柱に南辺中央土坑を持ち，床面の中央に直床炉を有する。

②ではSH0880は東西5.5 m，南北5.0 mの小さい建物から，SH0882の東西6.0 m，南北5.5 m，SH0879の東西6.1 m，南北6.7 mと規模を拡張している。①の建物同様，４本柱の主柱穴，南辺中央土坑，直床炉が確認される。

③のSH0875は東西6.0 m，南北5.5 mの建物で，全体的やや西へずらして建てられている。４本柱の主柱穴は確認できるが，炉跡の推定位置は現代溝によって削平

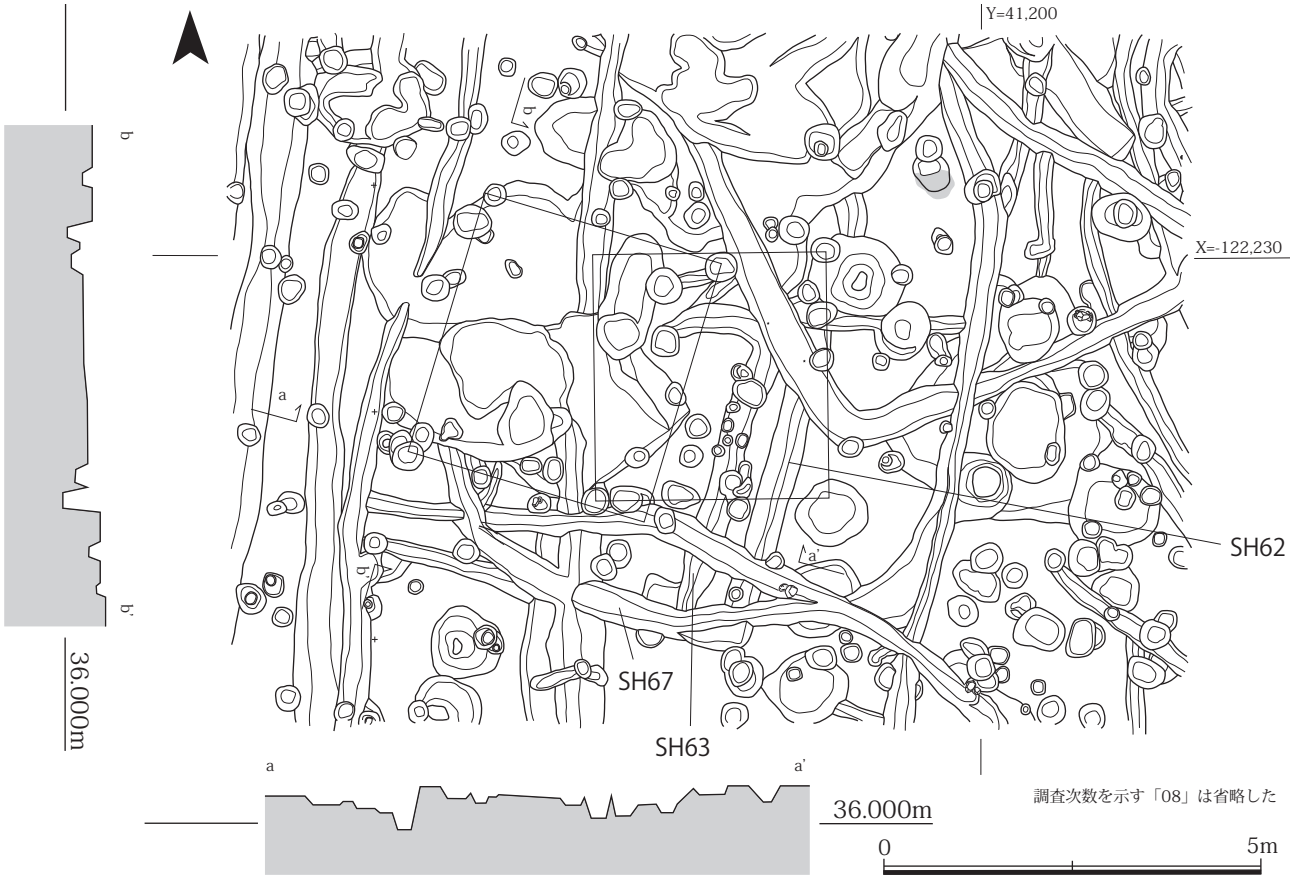


Fig.15　SH0862/63/67 平面・断面図（S=1/100）

されてしまっている。

いずれも詳細な帰属時期は不明であるが，弥生土器ないし古式土師器で占められており，弥生時代後期前後の建物と考えて問題ない。

SH0865(=89)/90/92（Fig. 17）

第 8 次調査区の南東で検出した。SH0865(=89) や SH 0890 は SH0892 よりも新しく，SH0879/80/82 等よりも古い建物である。ただし，SH0890 は南東の周壁溝と思しき溝が検出されただけなので，竪穴住居でない可能性もある。

SH0865 は東西 6.1 m，南北 5.3 m前後の建物で，4 本の主柱穴と南辺中央土坑，直床炉を持つ。SH0892 は東西 5.2 m，南北 5.0 mである。4 本柱の主柱穴を確認したが，南辺中央土坑や焼土等は未確認である。

いずれの建物も出土遺物に乏しいが，SH0879/80/82 等の重複関係から，弥生時代後期の建物だと判断される。

SH08101（Fig. 18）

第 8 次調査区の南で検出した。南側半分以上が第 9 次調査区にあるため，規模等は不明であるが，東西は 6 m 前後になろう。北東の主柱穴のみ確認しているが，焼土

Fig.16　SH0805/09/29/75/79/80/82 平面・断面図（S=1/100）

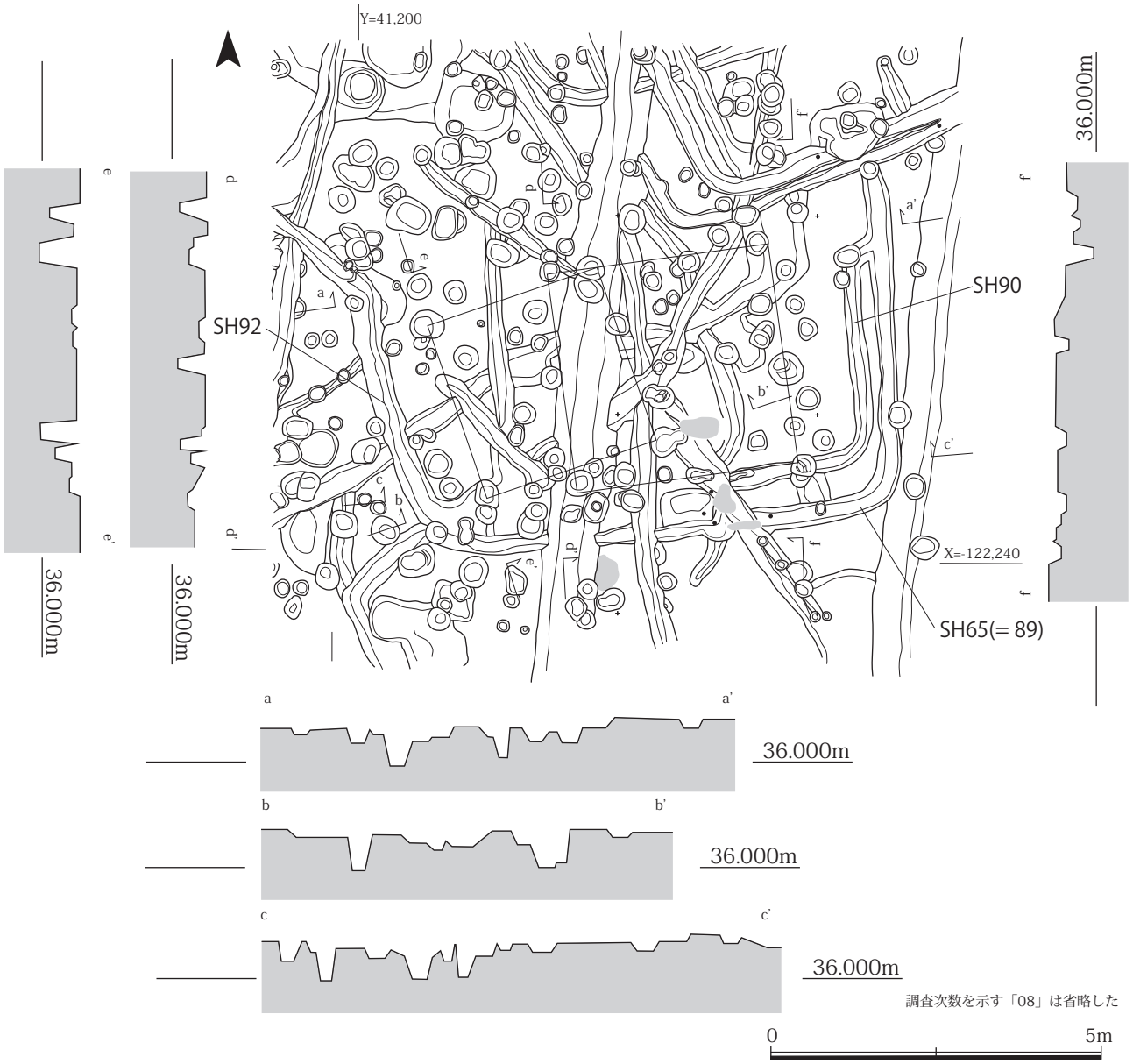


Fig.17　SH0865/90/92 平面・断面図（S=1/100）

を含め他の構造は不明な点が多い。

出土遺物に弥生土器が多く，概ね弥生時代後期の建物だと考えられる。

SH08103/104（Fig. 19）

第 8 次調査区の南西隅で検出した。2 棟の建て替えであり，内側の古い方を SH08104，外側の新しい方を SH 08103 とした。

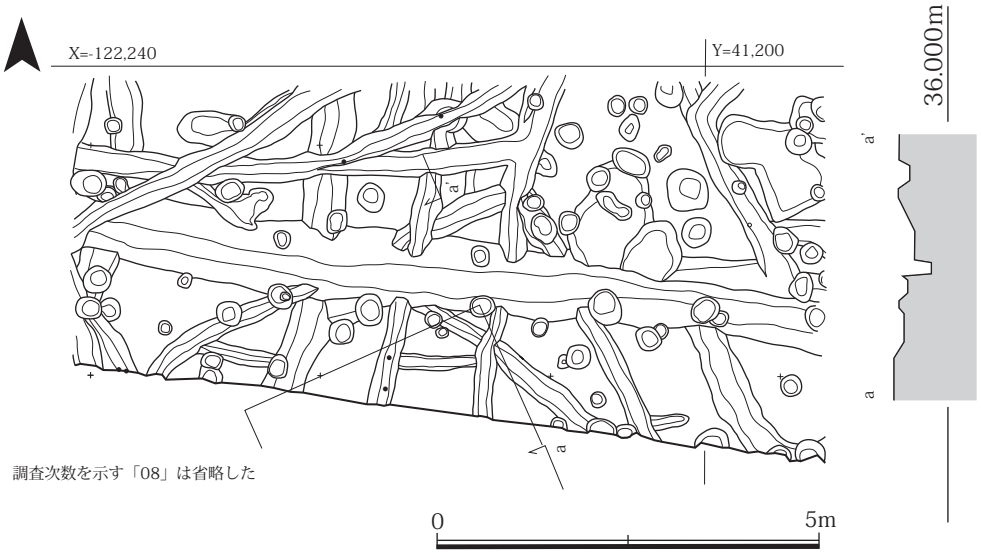


Fig.18　SH08101 平面・断面図（S=1/100）

Fig.19　SH08103/104 平面・断面図（S=1/100）

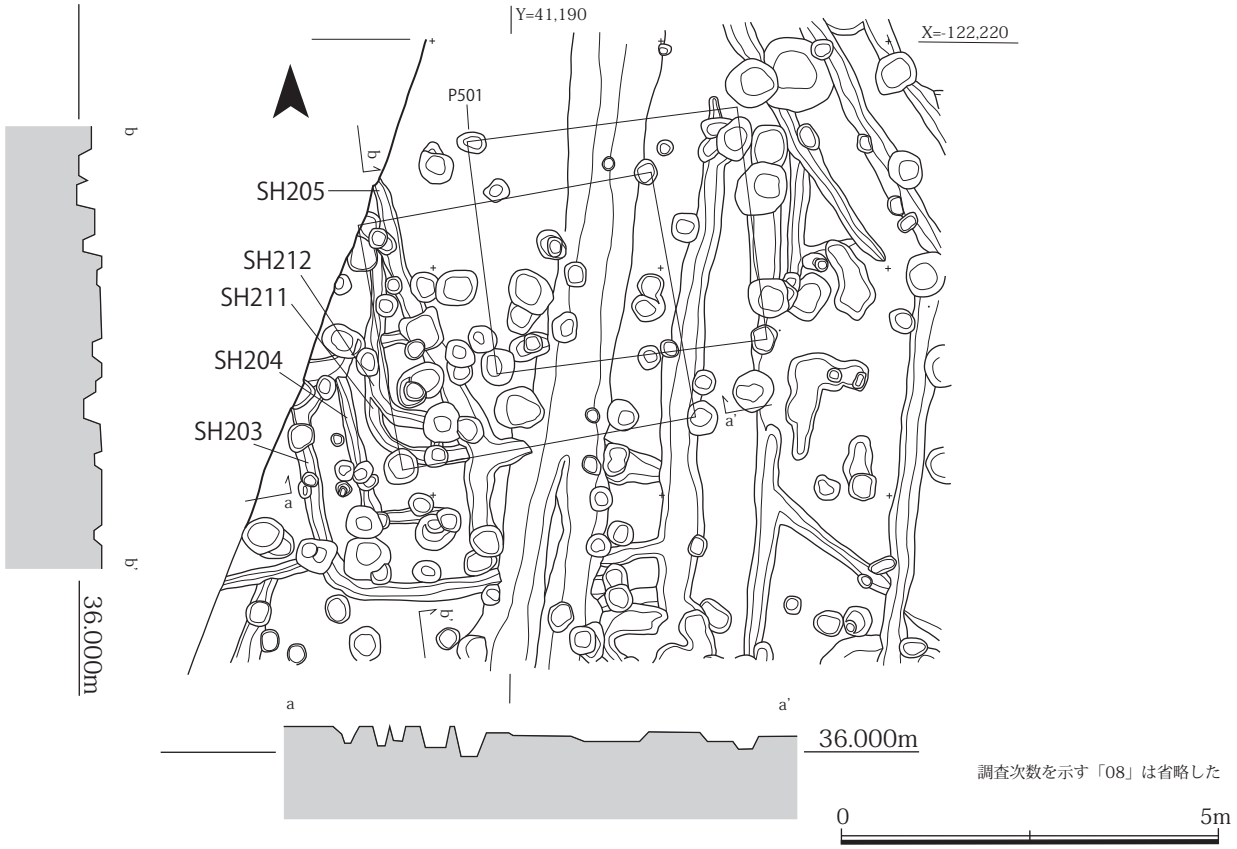


Fig.20　SH08203/204/205/211/212 平面・断面図（S=1/100）

東西 6.0 m，南北 5.9 mの規模で，4 本柱の主柱穴を持つ。また，南辺中央土坑を有し，床面中央には直床炉が確認されている。

出土遺物には弥生土器ないし古式土師器の他に，ミニチュア土器を含む。概ね弥生時代後期末から古墳時代前期初頭頃の建物としてよいだろう。

SH08203/204/205/211/212（Fig. 20）

第 8-2 次調査区の北側で検出した。いずれも竪穴住居の周壁溝の南西隅のみを確認したにとどまる。削平が著しいため , 様相ははっきりしない。

出土遺物は弥生土器の小片を確認している。いずれの建物からも乏しい量しか確認できず，これを以って建物の時期と判断してよいか明確ではない。

SH08202（Fig. 21）

第 8-2 次調査区の北側で検出した。竪穴住居の周壁溝の南西隅のみを確認したにとどまる。規模，主柱穴とも判然としない。

出土遺物には須恵器が含まれていることから，6 世紀代の可能性が高いが，小片のみであるので，この須恵器の年代が建物の時期なのかは明確ではない。

SH08215/216（Fig. 22）

第 8-2 次調査区の南側で検出した。2 棟が重複しているが，内側の古いほうを SH08216，外側の新しい方を SH08215 とした。南側が第 9 次調査の範囲に続くため不明であるが，東西は 6 m前後ある。おそらく 4 本柱の主柱穴を持つのであろう。なお, 焼土は確認できなかった。

出土遺物は少ないながらも弥生土器で占められおり，弥生時代後期頃の建物と理解できる。

2　掘立柱建物

第 8 次調査における最大の成果といえる掘立柱建物である。調査区の北東端で 10 棟が重複して検出された (Fig.23)。いずれも総柱建物であるので，倉庫だと考えられる。同一地点で繰り返し建て替えられており，選地に際して極めて固定的な様子が窺える。

調査段階では，SB0859 や SB0860，SB08125，SB08126，SB08211 程度の 5 棟を認識していたが，あまりにも他の柱穴が多かったため，明確な柱間（規模）等を把握しきれないまま調査を進めた。また，他にもいくつかの建物があることは理解できていたものの，明確な棟数を把握しきれないまま掘削を終了した。よって，約半数の建物は，S=1/20 の平面図を作成した後に図面上で確認したものである。

ただし，それぞれの柱穴は弥生時代後期の竪穴住居の上面で検出しているので，それより新しいものであることは間違いない。また，僅かながらも 6 ～ 7 世紀の須恵器が出土する柱穴があるので，それ以降のものであろうと判断できた。

なお，柱穴の重複関係は原則的に平面で確認することとした。そのため，一つの柱穴と認識していたものでも，掘り進むにつれて二つの柱穴が重複していることを確認することもあった。その際には，遺物を可能な限り区別して取り上げたが，土層断面を残すことはなかった。これほどの数の掘立柱建物が重複して建つとは思いもせず，今となっては土層断面を残さずに掘削したことが悔やまれる。

平面で確認した柱穴の重複関係を追って，掘立柱建物の新旧関係を追及していくと，たびたび矛盾が生じてしまう結果となった。自身の平面での観察力のなさを嘆く始末である。そのため，以下では特に新旧関係を述べず，次年度以降の調査成果を待って，遺跡全体の建物方位等を検討したい。

なお，離れた地点で別に 3 棟の掘立柱建物を確認しており，のべ 13 棟を検出している。

SB08211（Fig. 24）

第 8 次調査区から第 8-2 次調査区にかけて検出した。梁行き 2 間（4.0 m），桁行き 3 間（4.2 m）の，総柱建物である。柱間の距離は，それぞれ 2.0 m等間と 1.4 m等間であり，床面積は 16.8㎡ほどである。軸方向は北から西へ 7 度（以下，N-7°-W と表記する）振っており，唯一の南北棟である。柱の平面形はほぼ円形といってよく，残りのよい南側では検出面から 0.4 mの深さがある。

出土遺物は少ないものの，P556 と P557（平面図上にピット番号が入っているものは遺物が出土した柱穴で，無表記のものは 1 点の遺物も出土しなかった柱穴である）からは 7 世紀代の須恵器が出土している。

SB08129（Fig. 25）

第 8 次調査区で検出した。梁行き 3 間（4.0 m），桁行き 3 間（4.2 m）の総柱建物である。柱間の距離は，梁行きが 1.4 m +1.2 m +1.4 mとなり，桁行きは 1.4 m等間となる。床面積は約 16.8㎡ある。軸方向は N-9°-W の東西棟である。柱の平面形は方形に近い円形で，残りのよい部分で検出面から 0.4 mの深さがある。なお，P105 とその一つ西側の柱穴（ピット番号なし）には，拳大の自然礫が充填されていた。

Fig.21　SH08202 平面・断面図（S=1/100）

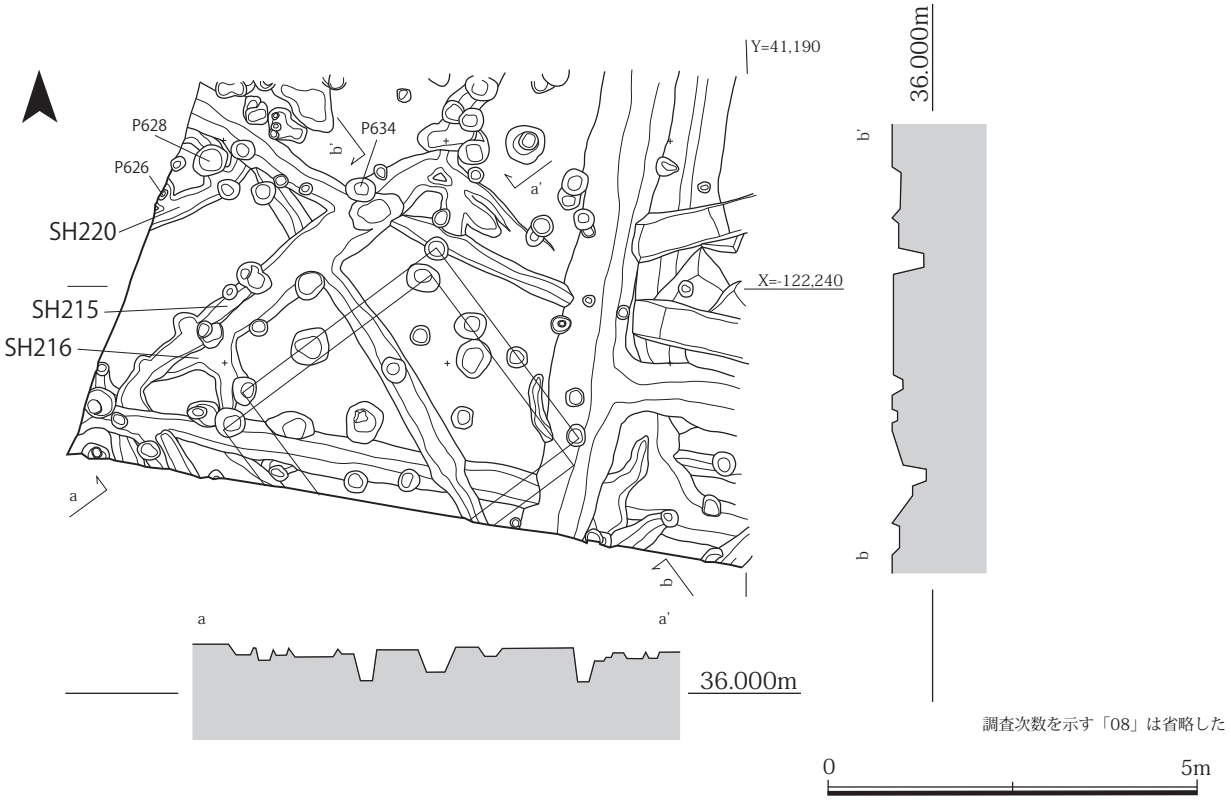


Fig.22　SH08215/216・SH08220 平面・断面図（S=1/100）

出土遺物は弥生土器の破片のみであり，本来の帰属時期を推定させるようなものはなかった。

SB08128（Fig. 26）

第 8 次調査区で検出した。梁行き 3 間（3.3 m），桁行き 3 間（3.6 m）の総柱建物である。柱間の距離は，梁行きが 1.1 m等間，桁行きは 1.2 m等間となる。床面積は約 11.9㎡と最小である。軸方向は N-8° -W の東西棟である。

柱の平面形は方形に近い円形で，残りのよい部分で検出面から 0.4 mの深さがある。なお，P135 の一つ東側の柱穴（ピット番号なし）でのみ，拳大の自然礫が確認された。掘り方の中位にて礫を確認しており，柱周りに配置した，いわゆる根巻き石だと考えられる。

出土遺物は P152 から須恵器の甕が出土しているが，これは SB0860 の柱穴と重複して取り上げているものであり，どちらの建物の出土遺物かは不明である。

SB0859（Fig. 27）

第 8 次調査区で検出した。梁行き 3 間（4.1 m），桁行き 3 間（4.35 m）の総柱建物である。柱間の距離は，梁行きが 1.3+1.3+1.5 mとなり，桁行きは 1.45 m等間となる。床面積は約 17.8㎡ある。軸方向は N-15° -W の東西棟である。

調査次数を示す「08」は省略した

Fig.23　掘立柱建物配置図（S=1/100）

柱の平面形はほぼ円形といってよく，残りのよい部分で検出面から 0.4 mの深さがある。P116 の他多くの柱穴で拳大程度の自然礫が確認された。SB08128 と同様，根巻き石だと考えられる。その様子から，柱自体の太さは直径 15 ～ 20cm 前後だと推定される。

出土遺物は弥生土器の破片のみであり，本来の帰属時期を推定させるようなものはなかった。

SB08126（Fig. 28）

第 7-2 次から第 8 次調査区で検出した。梁行き 3 間(3.8 m)，桁行き 3 間（4.5 m）の総柱建物である。柱間の距離は，梁行きが 1.4+1.4+1.0 mであり，桁行きは 1.5 m等間となる。床面積は約 17.1㎡である。軸方向は N-17° -W の東西棟である。

柱の平面形はほぼ円形で，残りのよい部分で検出面から 0.4 mの深さがある。いくつかの柱穴では根巻き石が確認され，その状況から直径 15 ～ 20cm の柱だったことが分かる。また，根巻き石の遺存状況から，SB08125 から建て替えらたと考えられる。

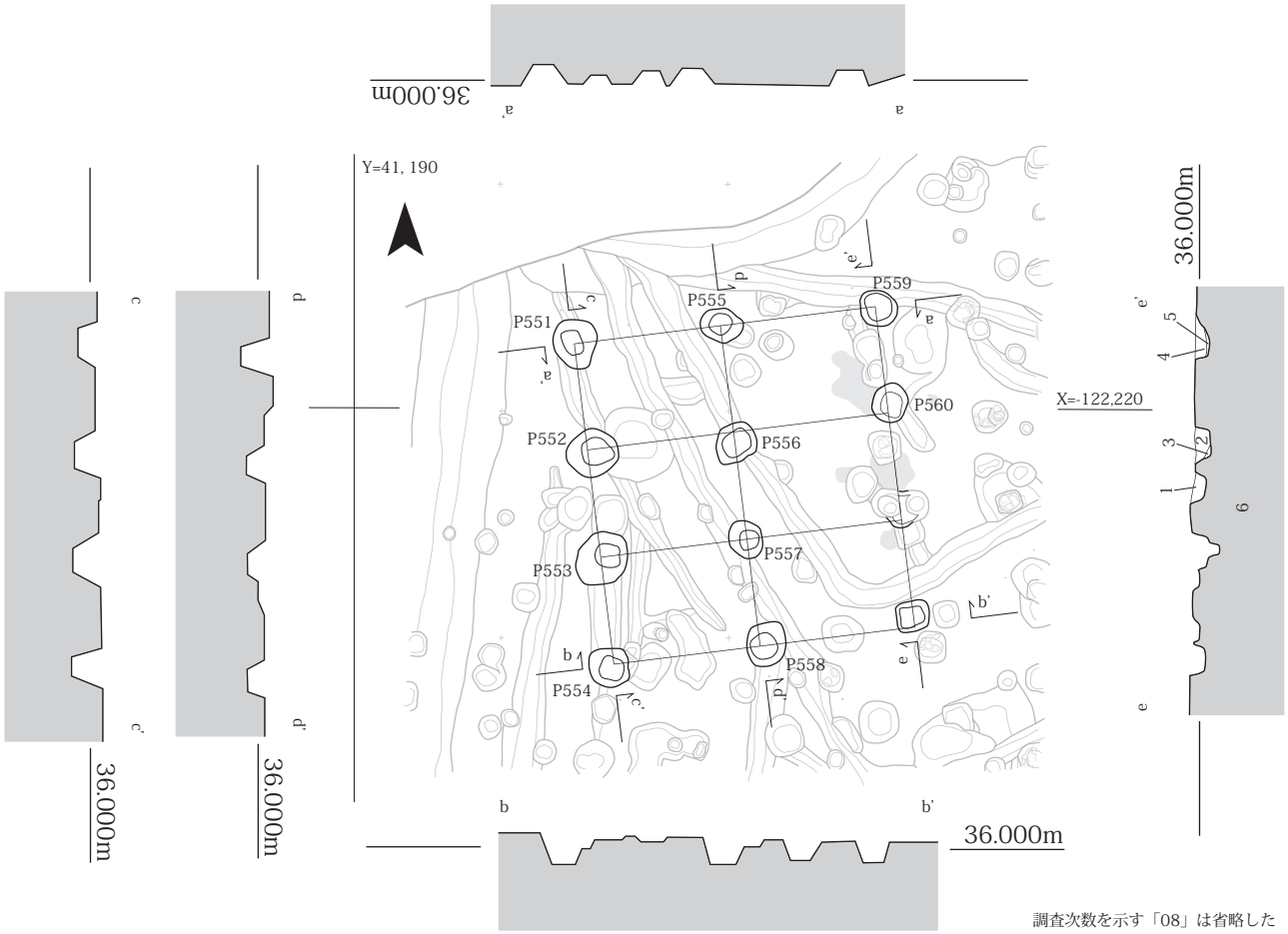
出土遺物は P128 から 6 世紀後半から 7 世紀代にかけての須恵器の杯 H 身が出土している。

SB08125（Fig. 29）

第 7-2 次から第 8 次調査区で検出した。梁行き 3 間(4.1 m)，桁行き 4 間（6.4 m）の総柱建物である。柱間の距離は，梁行きが 1.3+1.5+1.3 mであり，桁行きは 1.6 m等間となる。床面積は約 26.2㎡と最大規模を誇る。軸方向は N-16° -W の東西棟である。

柱の平面形は円形で，検出面から 0.5 mの深さがある。SB08126 に先行する建物である可能性が高い。

出土遺物は弥生土器の破片のみであり，本来の帰属時期を推定させるようなものはなかった。



1 黒褐色砂礫混シルト層 10YR3/2 しまり・粘性ややあり
2 黒褐色砂礫混シルト層 10YR3/1 しまり・粘性あり 炭化物・焼土ブロックを含む
3 黒色粘土混砂礫層 10YR1.7/1 しまりややあり・粘性強い
4 褐色砂礫混シルト層 10YR3/2 しまりややあり・粘性少しあり
5 黒色粘土混砂礫層 10YR1.7/1 しまりややあり・粘性強い (3 層と同質)
6 明黄褐色砂礫混シルト層 10YR6/8 花崗岩礫を含む (地山)

0 5m

Fig.24　SB08211 平面・断面図（S=1/100）

Fig.25　SB08129 平面・断面図（S=1/100）

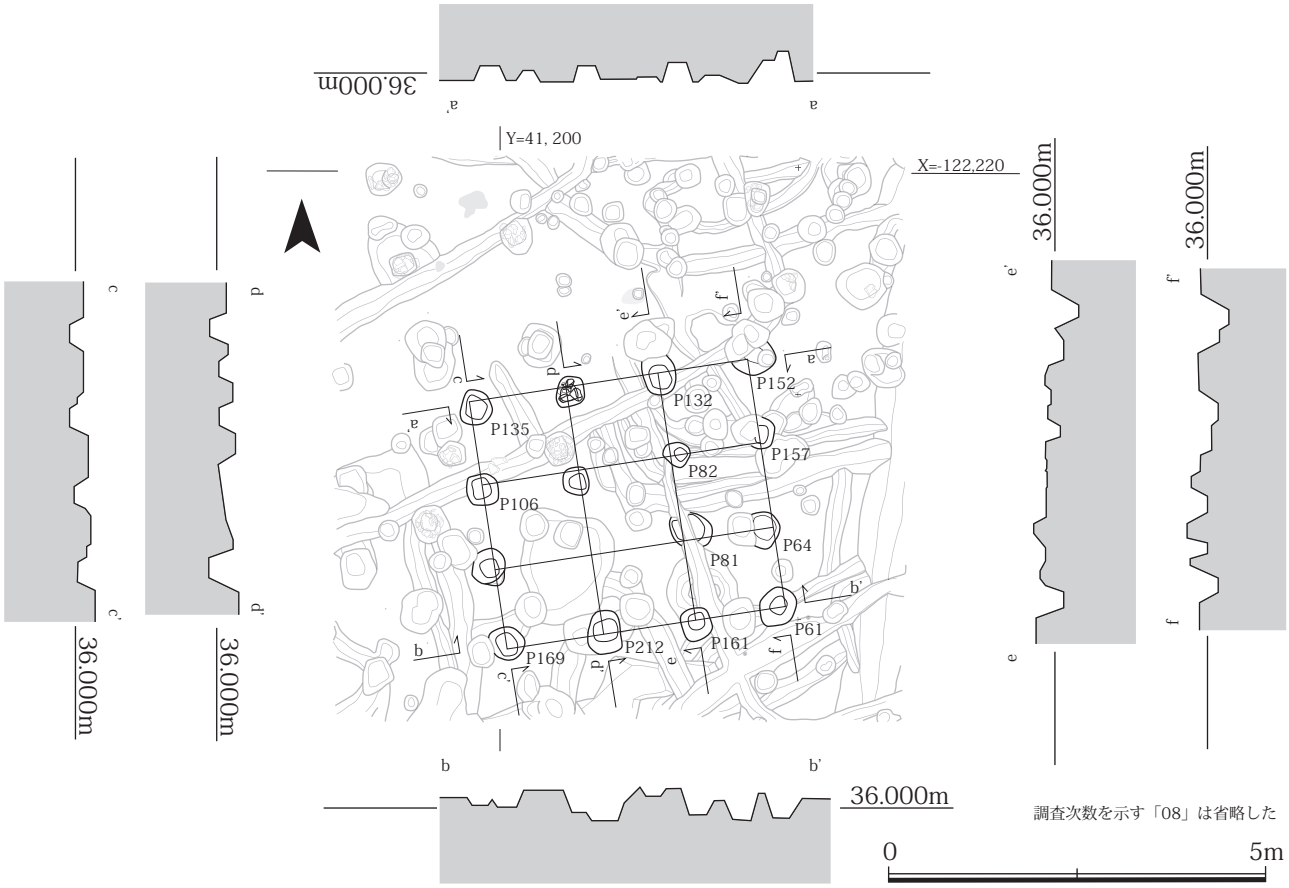


Fig.26　SB08128 平面・断面図（S=1/100）

Fig.27　SB0859 平面・断面図（S=1/100）

Fig.28　SB08126 平面・断面図（S=1/100）

SB08130（Fig. 30）

第８次調査区で検出した。梁行き１間以上，桁行き３間（4.5 m）の総柱建物である。北側は台地の端部で削平されているため，存在しない。梁行き１間の間隔が 2.0 mあるので，２間となって 4.0 mの規模となるのであろう。

桁行きは 1.5 m等間となり，床面積は 18㎡程度となろうか。軸方向は N-20°-W であり，東西棟になるのであろう。

柱の平面形はほぼ円形で，残りのよい部分で検出面から 0.4 mの深さがある。出土遺物は弥生土器片のみであり，本来の帰属時期を推定させるようなものはなかった。

SB08127（Fig. 31）

第８次調査区で検出した。梁行き２間（3.2 m），桁行き３間（3.8 m）の総柱建物である。柱間の距離は，梁行きが 1.6 m等間，桁行きは 1.25 m等間となる。床面積は約 12.2㎡と２番目に小さい。軸方向は N-26°-W の東西棟である。

柱の平面形はほぼ円形で，残りのよい部分で検出面から 0.4 mの深さがある。P73 の一つ西側の柱穴には自然礫が認められる。根巻き石であったのであろうか。

出土遺物は弥生土器の破片のみであり，本来の帰属時期を推定させるようなものはなかった。

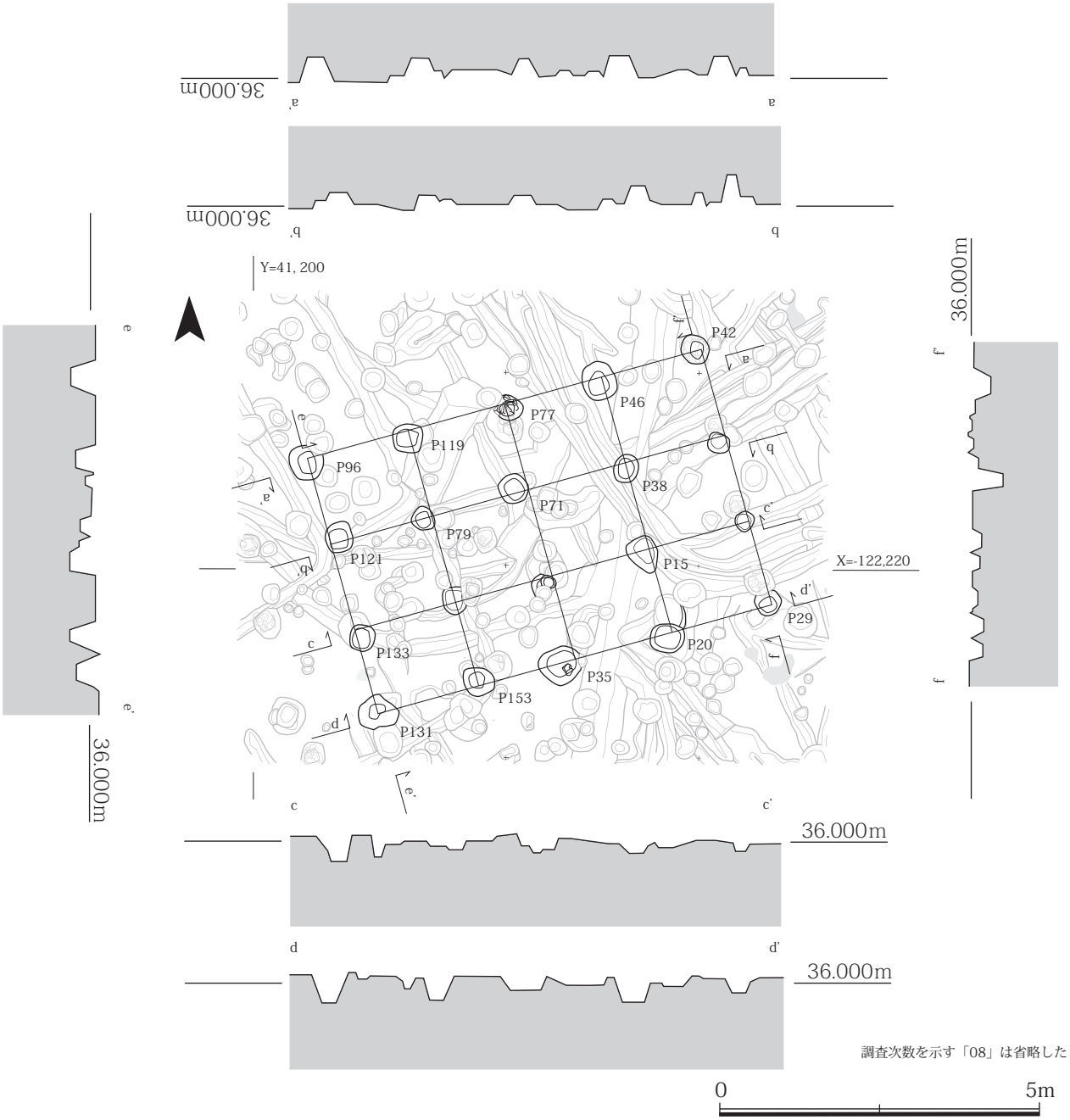


Fig.29　SB08125 平面・断面図（S=1/100）

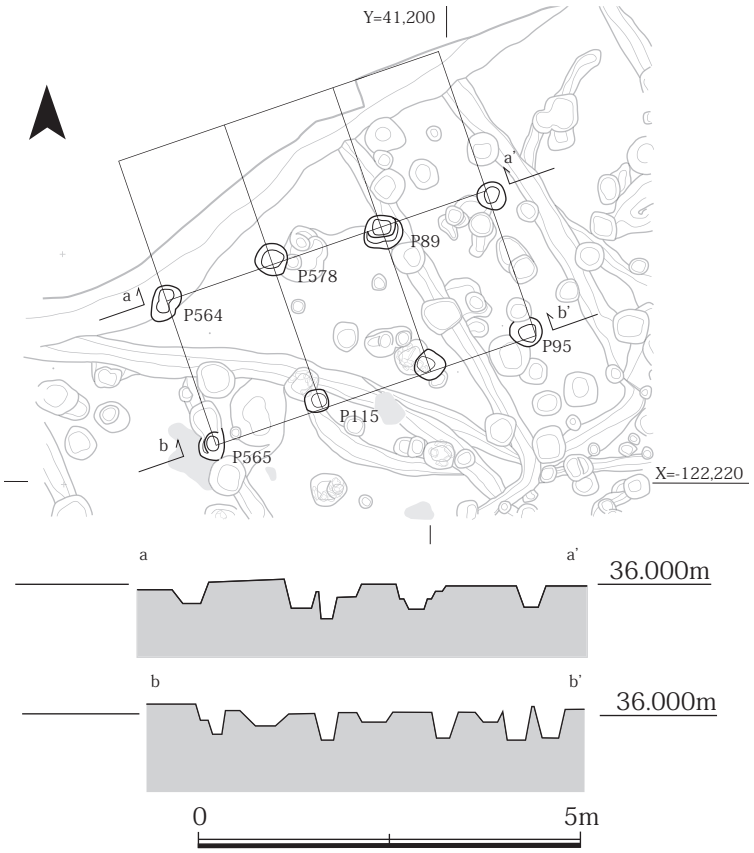


Fig.30　SB08130 平面・断面図（S=1/100）

SB08223（Fig. 32）

第 8 次調査区の北端で検出した。桁行き 3 間（3.8 m）を確認したにとどまる。北側は台地の端部で削平されているため全体の規模は不明である。桁行きは 1.25 m等間となり，軸方向は N-27° -W となる。東西棟になるのであろう。

柱の平面形は円形で，残りのよい部分で検出面から 0.3 mの深さがある。出土遺物は弥生土器の破片のみであり，本来の帰属時期を推定させるようなものはなかった。

SB0860（Fig. 33）

第 8 次調査区で検出した。梁行きが 3 間（3.7 m），桁行き 3 間（4.2 m）の総柱建物である。柱間の距離は，梁行きが 1.3+1.1+1.3 mであり，桁行きは 1.5 m等間となる。床面積は約 15.5㎡ある。軸方向は N-0° と座標北を向く，東西棟である。

柱の平面形は円形で，残りのよい部分で検出面から 0.4 mの深さがある。外側の

Fig.31　SB08127 平面・断面図（S=1/100）

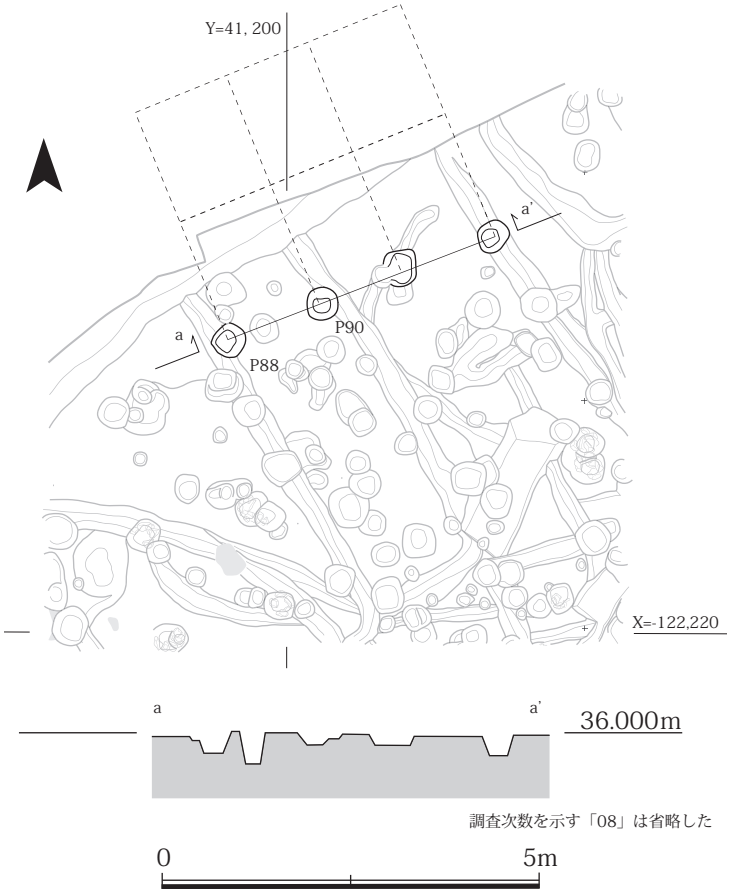


Fig.32　SB08223 平面・断面図（S=1/100）

柱穴は概して大きく，内側の束柱は小さい。P107 には根巻き石が確認され，その状況から直径 15cm 程度の柱が用いられていたようである。

出土遺物は P63 から 7 世紀代と推定される，須恵器の杯 H 蓋が出土している。

SB08133（Fig. 34）

上述してきた掘立柱建物とは位置が離れており，第 8 次調査区の南端で検出した。南側が調査区外のため規模等は不明であるが，おそらく 2 × 2 間以上の総柱建物になろう。

東西は 2 間（2.8 m），南北 1 間分（1.7 m）の柱穴を確認した。東西の柱間の距離は 1.4 m 等間となる。軸方向は N-1 ° -E となり，SB0860 の方位に近い。柱の平面形は円形で，残りのよい部分で検出面から 0.3 mの深さがある。

出土遺物は弥生土器の破片のみであり，本来の帰属時期を推定させるようなものはなかった。

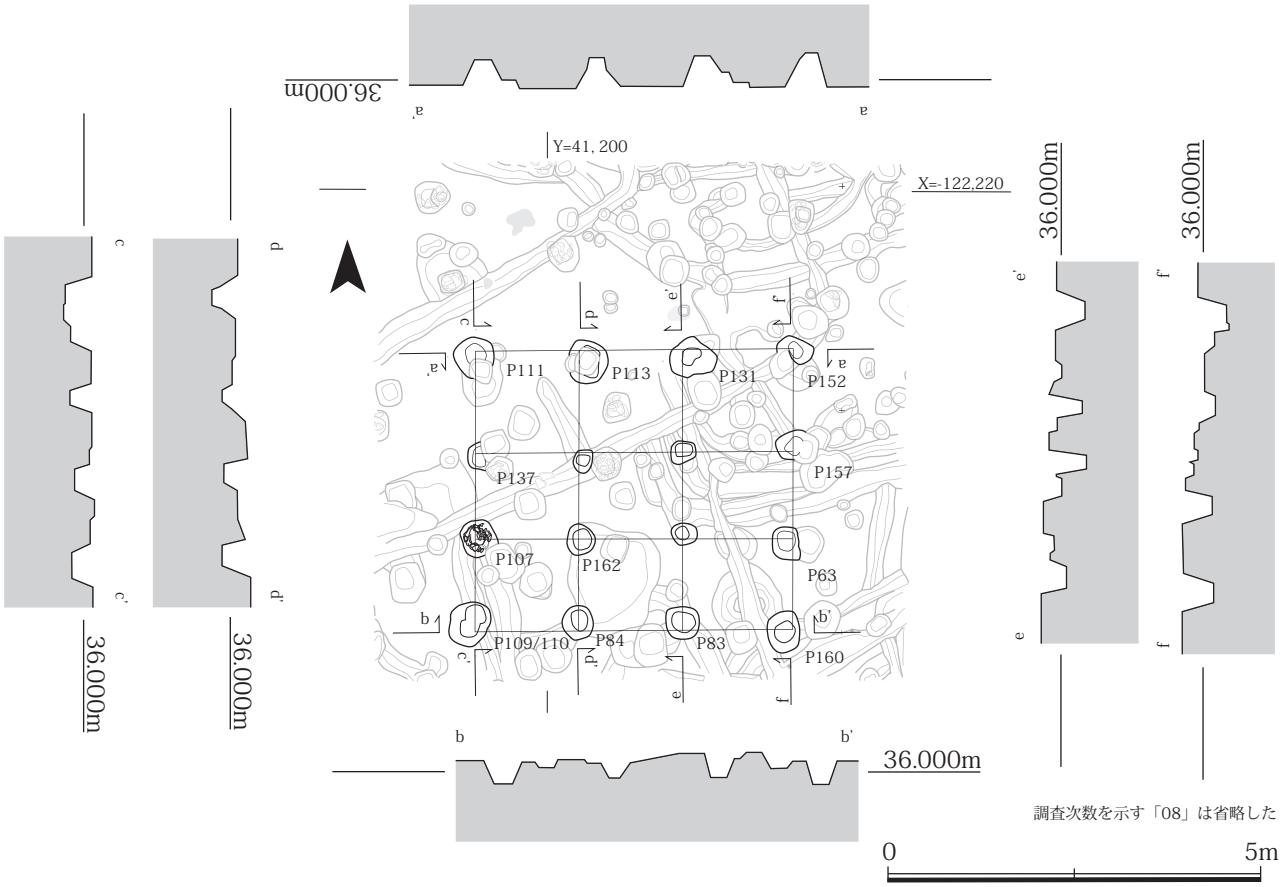


Fig.33　SB0860 平面・断面図（S=1/100）

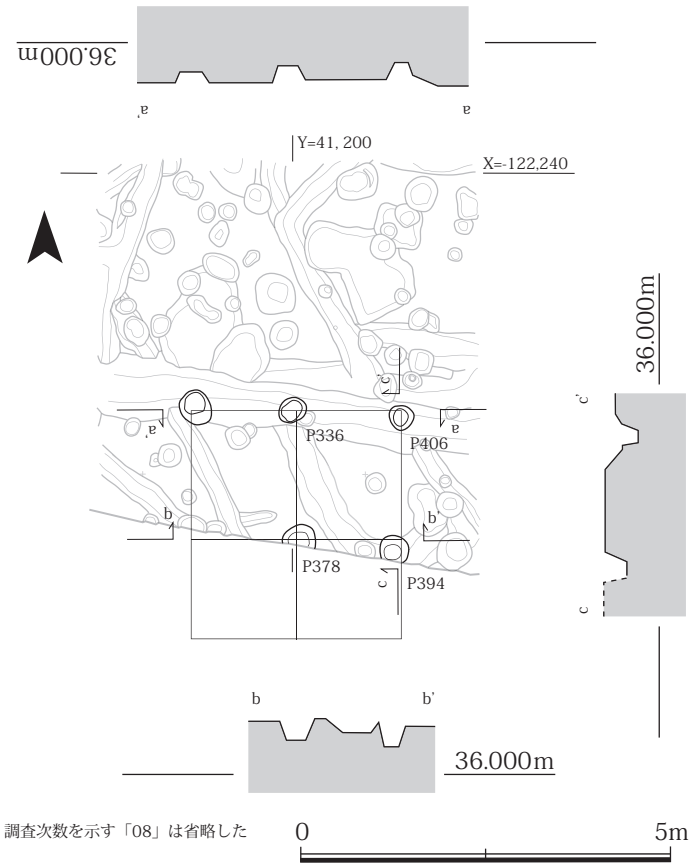


Fig.34　SB08133 平面・断面図（S=1/100）

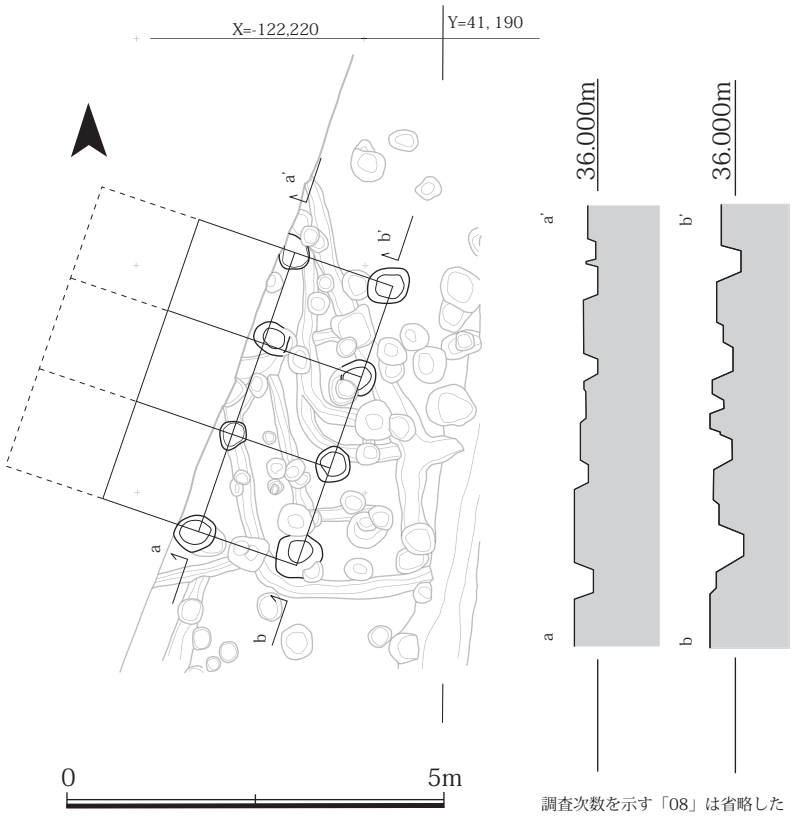


Fig.35　SB08222 平面・断面図（S=1/100）

SB08222（Fig. 35）

第 8-2 次調査区の北側で検出した。西側が調査区外のため，規模等の詳細は不明である。他の掘立柱建物とは異なり，離れた場所で検出している。おそらく 3 × 3 間の総柱建物で，東西棟となると想定される。

実際には，東西 1 間（1.35 m）以上，南北 3 間（3.9 m）の柱穴を確認した。南北の柱間の距離は 1.3 m等間となる。軸方向は N-18° -E となり，他の掘立柱建物とは明らかに異なる軸方向を持つ。柱の平面形は円形で，残りのよい部分で検出面から 0.3 mの深さがある。

出土遺物は弥生土器片のみであり，本来の帰属時期を推定させるようなものはなかった。

SB08132（Fig.36）

第 8･8-2 次調査区の南側で検出した。南側が調査区外のため，規模等の詳細は不明であるが，おそらく 3 × 3 間以上の総柱建物になろう。

実際には，東西で 3 間（5.1 m），南北で 1 間（1.5 m）以上の柱穴を確認した。東西の柱間の距離は 1.5+1.8+1.8 m となる。軸方向は N-4° -E となり，他の掘立柱建物とは異なる。柱の平面形は円形で，やや小振りである。残りのよい部分で検出面から 0.4 mの深さがある。

出土遺物は弥生土器の破片のみであり，本来の帰属時期を推定させるようなものはなかった。ただし，柱間の距離が 1.8 m と他と異なり規模が大きいことから，中世まで下る建物の可能性もある。

3　柵

今回の調査区内において，柵として理解できる柱列を 2 ヶ所確認した。いずれも第 8 次調査区の南東端で検出している。

柱穴の出土遺物は弥生土器が混在している程度で，出土遺物からの時期比定は困難である。ただし，位置関係等から掘立柱建物を遮蔽するものである可能性があり，今後の調査でも注意が必要といえる。

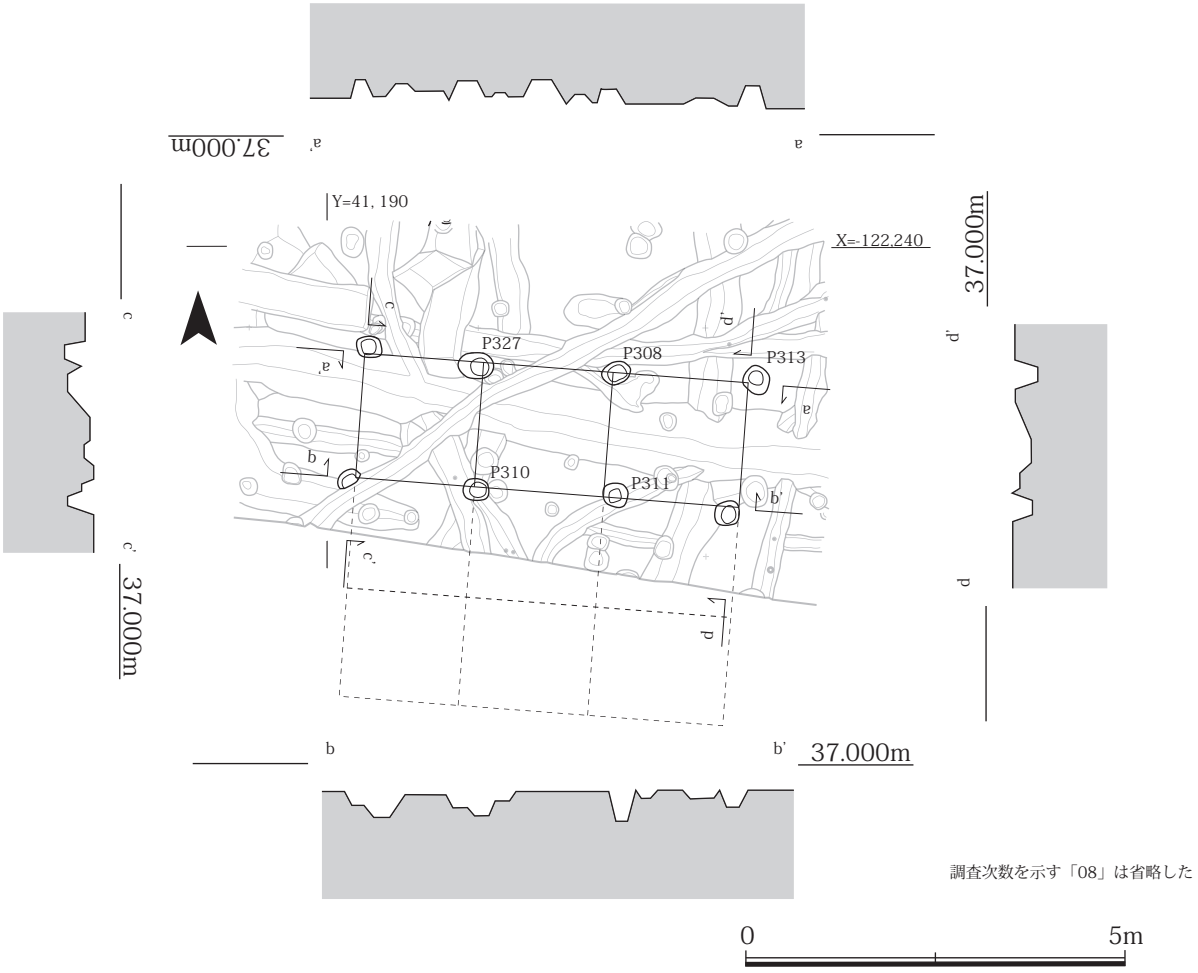


Fig.36　SB08132 平面・断面図（S=1/100）

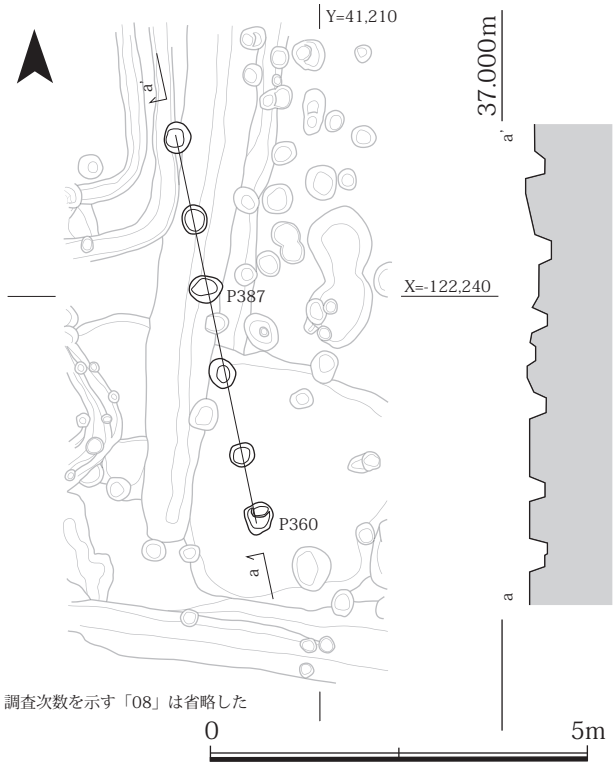


Fig.37　SA08131 平面・断面図（S=1/100）

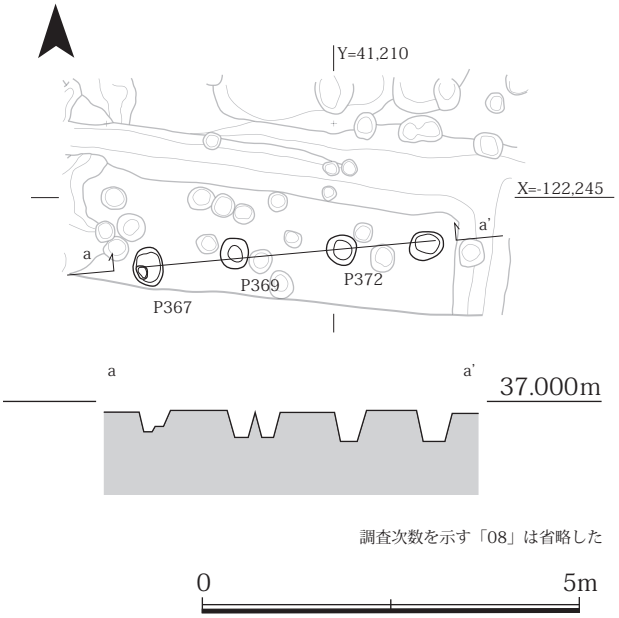


Fig.38　SA08134 平面・断面図（S=1/100）

SA08131（Fig. 37）

第８次調査区の南東で検出した。５間分（5.2 m）が南北方向に並ぶ。柱間の距離は，北から 1.2+1.0+1.2+1.2+1.0 mとなる。軸方向は N-12°-W である。柱の平面形は円形で，検出面から 0.2 mの深さがある。

出土遺物は弥生土器の破片のみであり，本来の帰属時期を推定させるようなものはなかった。

SA08134（Fig. 38）

第８次調査区の南東で検出した。３間分（3.9 m）が東西方向に並ぶ。柱間の距離は，北から 1.2+1.5+1.2 mとなる。軸方向は N-4°-W である。柱の平面形は円形で，検出面から 0.3 mの深さがある。

出土遺物は弥生土器の破片のみであり，本来の帰属時期を推定させるようなものはなかった。

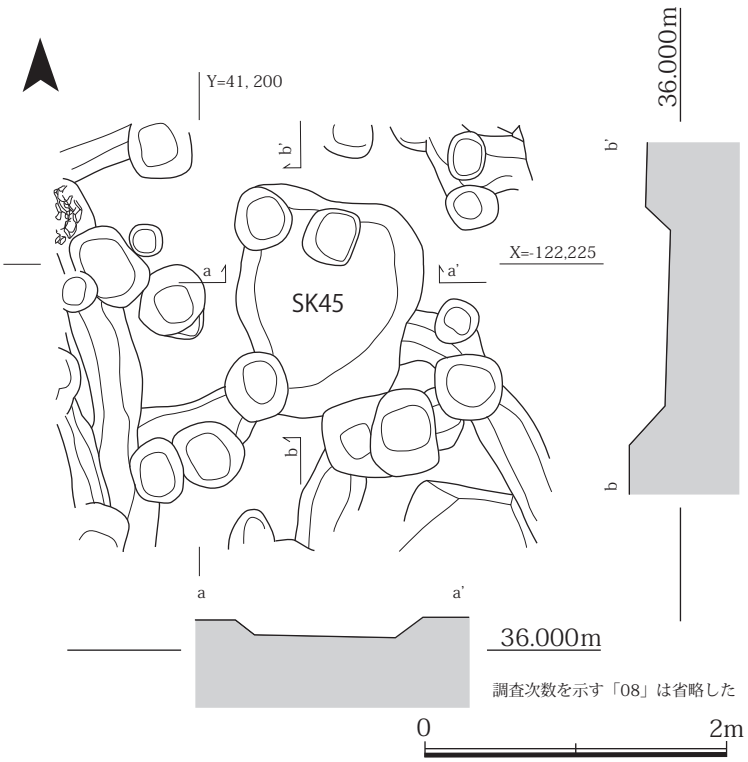


Fig.39　SK0845 平面・断面図（S=1/50）

Fig.40　SK0871 平面・断面図（S=1/50）

4　土坑

今回の調査区内において，土坑（SK 及び SX）として調査したものは 15 基あり，遺構の密度からみると極めて少ない。この内，SK0844 や SK0869，SX08123，SK08124，SX08130, SX08206, SK08207 としたものは攪乱であった。また，SK0888 や SX08105，SX08111，SX08112 は浅い凹みであり，明確な土坑とできなかったものである。よって，以下では 3 基のみを記述する。

SK0845（Fig. 39）

第 8 次調査区で検出した。東西 1.2 m，南北 1.5 m，深さ 0.2 m程度の不整形で，浅い落ち込みである。重複関係から，掘立柱建物 SB0860 や SB08128 等よりも古い土坑である。

出土遺物には弥生土器の小片しかないが，これらが土坑の年代を示すのか定かではない。

SK0871（Fig. 40）

第 8 次調査区のちょうど中央辺りで検出した。2 段の落ち込みを持つ土坑である。1 段目は東西 3.0 m，南北 2.5 m，深さ 0.1 m程度の隅丸方形を呈す。2 段目は，土坑のちょうど中央で東西 1.0 m，南北 1.2 m，深さ 0.25 m の規模で凹んでいる。

SH0864 より新しく，かつ SD0866 より古いことは確認できた。出土遺物には弥生土器があるが，量的に乏しく，これらが土坑の年代を示すのかは判然としない。

SX08115/120（Fig. 41）

第 8 次調査区の南東隅で確認した。当初，西側に SX08115，東側に SX08120 があるとして調査したが，連結して一つの不整形な土坑となった。

東西 4 m，南北 3.5 m前後であり，深さが 0.2 mある。現代溝②よりも古いことは間違いなく，SH08103/104

Fig.41　SX08115/120 平面・断面図（S=1/50）

Fig.42　SC08224・225 平面・断面図（S=1/200・1/100）

よりは新しい土坑である。

掘削した土量の割りに出土遺物が乏しく年代を特定することはできないが，弥生土器や須恵器が出土している。

5　道路状遺構

南北方向の道路跡が確認された。ほぼ同じ場所で２条の道路を確認しており，西側をSC08224，東側をSC08225とする。両者は重複しておらず，先後関係は不明である。いずれも弥生時代の竪穴住居や，古代と推定される掘立柱建物よりは新しいことを確認している。

側溝の埋土は褐色砂礫混シルト層の単層で，他の遺構埋土と比べてしまりがないものであった。出土遺物に山茶椀が少量出土していることから，鎌倉時代以降の埋没だと判断できる。ただし，これまでの調査では鎌倉時代の遺構や遺物は乏しく，後続する室町時代の木田城跡に関連すると思われる地割り溝や，土坑墓等がよく見つかっている。これらのことから，今回見つかった道路跡は室町時代まで下って考えておいた方が妥当と判断している。

SC08224（Fig. 42）

西側の側溝であるSD0894と東側の側溝であるSD0860の間を道路跡と認定した。両者の溝の芯々間の距離は3.0～3.3 mである。

北端は削平されているためはっきりしないが，南は調査区外へと続いていく。確認できた総延長は23 m以上となり，ゆるやかに湾曲しながら北へのびていく。路面は残っていなかった。SD0860のなかほどで，ほぼ同じ位置にSD0861が確認されており，掘り直されながら維持されていたのか，あるいはもう１条の別の道路が重複しているものと考えられる。

なお，北側はすぐに台地の端となっているので，おそらく台地の下へ降りる道として機能していたのであろう。

SC08225（Fig. 42）

全体に削平が著しく不明瞭であるが，東側の側溝としてSD0882を確認した。SD0882はSD0866やSD0898，SD0899の上面に僅かに残っていた程度であり，下部の遺構掘削と同時に消滅してしまった。

また，西側側溝もはっきりしないが，南北の溝の痕跡が認められるので，SH0862の東辺周壁溝とした溝の上面辺りに存在した可能性がある。その場合は両者の溝の芯々の距離は1.8 mの一間道となる。あるいは，並行する区画溝の可能性も比定できない。いずれにしても，調査段階ではっきりと把握できずに掘り進めていたので，詳細は南側の調査区の結果を待って結論したい。

また，北端は不明瞭であるが，SC08224のように湾曲はせず，直線的にのびていく。確認できた長さは19 m以上となる。路面は残っていなかったが，方位はN-12°-Eである。

磐城山遺跡の眼下に広がる沖積地（十宮以東）にはN-20°-Eの条理地割が施工されており，これとはやや異なる方位を示している。ただし，十宮以西（河田から甲斐）にかけての条理地割りの方位はN-10°-E前後とされており，今回見つかった道路の方位と近似する。

6　溝

これまでの調査と同様，溝が多数確認されている。特に，竪穴住居の北東ないし北西隅や南辺中央土坑から派生して北東ないし，北西方向へのびていく。今回の第８次調査区周辺は，ちょうど台地上でも最も標高の高い場所に位置し，北東あるいは北西方向へと緩やかに傾斜している。そのため，建物が配置された所から適切な方向へ排水のための溝を切ってあるのであろう。

SD0818（Fig. 43）

第８次調査区の中央やや北側で検出した。SH0805/09/29の北東隅から北東方向へのびる排水溝である。平面状では幅広に見えるが，３条が重複して確認されたためである。2.5 m以上を確認したが，以北はSH0804/19/20等によって不明である。弥生土器が出土している。

SD0856/57（Fig. 43）

第８次調査区の北端で確認した。SD0856よりSD0857が新しいが，SH0854よりも古い溝である。おそらく，SD0857はSH0848/49/67/38の北西隅から，北西へむかってのびる排水溝だと想定される。のべ７～８ mほどを確認したが，北端は土砂が流失しているのでそれ以北は不明である。

SD0856は，SH0851の排水溝であろうか。弥生土器と思われる小片が出土している。

SD0810/25（Fig. 43）

第7-2次調査区の南端から第８次調査区の北東で検出した。SD0810は第７次調査のSH0710の北西隅から，北西方向へのびる排水溝である。SD0825より新しく，SD0818よりも古い。第７次調査から含めてのべ７ mを確認したが，SH0848/49/67/68以西は不明である。弥生土器と思われる小片が出土している。

SD0825はSH0804/19/20よりも古く，かつSH0805/09/29よりも古い溝である。以南のどの竪穴住居に付

属するのか判断に悩むが，SH0879/80/82 辺りが該当するだろうか。弥生土器と思われる小片が出土している。

SD08226（Fig. 43）

第 8 次調査区の北東で検出した。SH0875 の北東隅から北東方向へのびる溝である。SH0815 よりも古く，SH0809/29 よりも新しい。6 m以上を確認した。遺物は一切出土していない。

SD0868(=133=206)（Fig. 43）

第 8 次調査区から第 8-2 次調査区にかけて検出した溝である。SH0880 ないし SH0882 の北西隅から北西方向

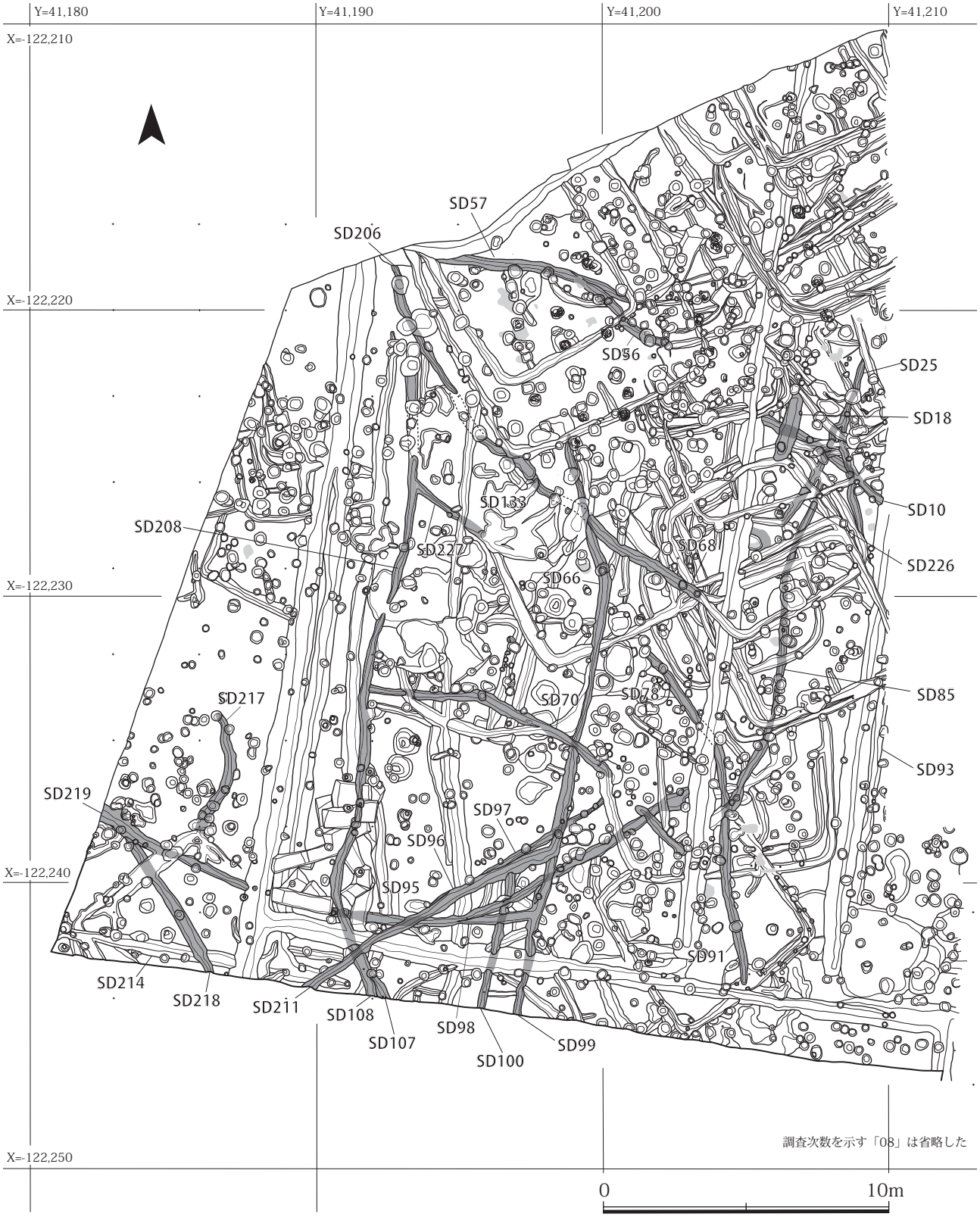


Fig.43　竪穴住居に付随する排水溝の平面図（S=1/200）

へのびる溝であろう。SD0868 と SD08133，SD08206 と別々の番号を付けて調査をしたが，一続きの溝と理解できる。総延長は 16 m以上あり，北西へ続いていく。SH0864 よりも新しい。

いずれの溝からも弥生土器が出土しているが，SD08133 から山中式の高杯が出土している。

SD08227（Fig. 43）

第 7-2 次調査区から第 8 次調査区にかけて検出した溝である。SH0864 の北西隅から派生する排水溝で，4 m程北西にのびて，SD08208 と接続するようである。出土遺物は一切ない。

SD0891(=78)/85（Fig. 43）

第 8 次調査区の南側で検出した。SH08103/104 から派生する排水溝と考えられる。SD0891 は SH08103/104 の南辺中央土坑から派生し，北へ伸びた後，北西方向へ向きをかえてのびていく。総延長 13 m以上を確認した。

なお，この北西へ向きをかえている以北を SD0878 として調査したが，SD0891 と一続きの溝だと理解できる。弥生土器のみが出土し，概ね弥生時代の溝と考えられる。

SD0885 は SH08103/104 の北東隅から派生する溝で，北北東へ伸びていく。12 m以上を確認した。SH0815 よりも古いが，SH0875 や SH0879/80/82 等よりも新しい溝と理解できる。弥生土器の他に，土師器や須恵器が出土している。土師器や須恵器は混在した可能性が高く，溝本来は弥生時代のものであった可能性が高い。

SD0870（Fig. 43）

第 8 次調査区の中央で検出した。判然としないが，SH0880/90 の南辺中央土坑から派生していたと推定される。約 9 mはど北西に伸びた後，向きを西方へかえて 4 mのび，SD08208 に接続する。

SH0862/63 や SD0866，SD0895 等より古い溝になりそうである。弥生土器が出土している。

SD08107/108(=208)（Fig. 43）

第 8 次調査区の南西隅から第 8-2 次にかけて検出した溝である。ゆるやかに湾曲しながら北方向へのびる。総延長は 23 m以上となる。南端で SD08107 と SD08108 とが重複するが，SD08107 が新しい。また，両者ともに SD0896 より古い溝である。

山中式でも比較的古手の高杯が出土しており，古い溝と理解できる。

SD0866(=99)（Fig. 43）

第 8 次調査区の南端から約 15 mほど北北東へのびた後，北西へ向きをかえて 5 m続く。SH0853 よりも古く，SH0864 よりは新しい。SD0896/97/98 との関係は明らかにできなかったが，SD0895 よりは古いと理解できた。調査区外へと続くので詳細は不明であるが，竪穴住居に伴う排水溝の可能性が高い。

須恵器が 2 点混じっているのものの，大部分は弥生土器で占められる。山中式の頃の溝だと理解できる。

SD0896(=221)/97（Fig. 43）

第 8 次調査区の南西隅から北東方向へのびる溝である。SD0897 よりも SD0896 が新しい。SD896 は約 11 m北東方向へのびた後，SD0866(=99) と接続する。

なお，SD0897 は SD0866 よりも東まで続いていくようだが，SH0889/90 以東は削平のため消滅している。

ともに弥生土器が出土している。

SD0895(=219)/98（Fig. 43）

第 8 次調査区の南端から第 8-2 次調査区の南端へと続く溝である。SD0895 と SD08219 は一続きの溝で，SD0898 や SD0866/99 よりも新しい。

SD0895 は SH08103/104 の北側にもう 1 棟別の竪穴住居があり，その北西隅からの排水溝の可能性も考えられるが，削平のため判然としなかった。弥生土器ないし古式土師器が出土している。

SD08100（Fig. 43）

第 8 次調査区の南端から北方向へのびる溝である。約 5 mのびた後，SD0896 に接続している。調査区外のため詳細不明であるが，竪穴住居からの排水溝だと想定される。弥生土器が出土している。

SD08217（Fig. 43）

第 8-2 次調査区の南側で検出した。SH08215/216 の北東隅から派生する排水溝である。北方向へ約 4 mを確認したが，以北は削平のため消滅している。遺物は一切出土しなかった。

SD08218（Fig. 43）

第 8-2 次調査区の南端で検出した。約 6 mにわたって北西方向にのびる溝であるが，調査区外のため詳細不明である。おそらく竪穴住居に付随するのであろう。SH08215/216 よりも古い溝である。弥生土器や砥石などが出土している。

SD0893（Fig. 43）

第８次調査区の東端で確認した。現代溝とほぼ平行して北北東へのびる溝である。隣接する現代溝ほどではないが，埋土のしまりがなく他の排水溝とは明らかに異なる。現代溝に先行する区画溝であった可能性がある。

出土遺物には弥生土器の他に，須恵器や山茶椀がある。最も新しい遺物でも山茶椀であるが，埋土の様子などから鎌倉時代まで遡るとは考えにくい。SD08214 とともに室町時代以降の地割り溝になるのではないだろうか。

SD08214（Fig. 43）

第 8-2 次調査くの南端で東西方向に検出した。現代溝よりは古いものの，SH08215/216 よりは新しい。また，埋土もしまりがなく，新しい溝であることは明らかである。

図化できるような出土遺物はないが，弥生土器や須恵器，山茶椀，土師器の羽釜，陶器等が出土している。このことから，室町時代以降の溝だと考えられる。

７　小結

これまでの調査と同様，竪穴住居やそれに付随する柱穴，焼土，溝等を多数確認した。これらの遺構が著しく重複しているため，発掘現場は非常に煩雑となっている。調査面積 724㎡の中に，約 50 棟もの竪穴住居が確認されており，これは県下でも有数の遺構密度である。そのために，発掘調査には時間がかかっている。

弥生時代の竪穴住居は，4 本柱の主柱穴を持つものが基本で，周壁溝は全周する。中には，南辺の中央に貯蔵穴とされる土坑を持つものもある。一辺は 5 ～ 7 mの正方形ないし方形が主流であり，床面中央に直床炉を備える。今回はじめて円形の可能性がある建物を 1 棟確認した。鈴鹿市内では，一般的に円形住居は弥生時代中期中葉くらいまでとされており，後期には方形に変化すると理解されている。この竪穴住居からの出土遺物は乏しいため，年代を特定し得ないが，磐城山遺跡の開始が更に遡る可能性もあり，今後の検討課題の一つである。

なお，今回の調査区からは，これまでとは異なった内容が確認できた。それは，古墳時代後期から飛鳥時代と推定される掘立柱建物群である。これまでも掘立柱建物は確認されていたものの，台地の東部では 3 棟のみ（第 3 次調査以降の数）であった。しかしながら，今回の第 8 次調査だけで 13 棟もの掘立柱建物が確認された。これらは，いずれも総柱建物で，倉庫になると想定される。特に，調査区の北東部では 10 棟もの建物がほぼ同じ場所で繰り返し建て替えられており，極めて固定されている様子が認められた。これらの建物が集中する範囲は，第 1･3･4･7 次等で確認していた方形と想定される区画の北東部に相当する。年代が定かでなく，区画溝との直接的な関係を特定できないものの，区画の一角に倉庫群が固まって構成されていたと推定される。

奈良時代から鎌倉時代の遺構や遺物は不詳で，その後目立ってくるのが室町時代である。これまでは，室町時代以降の地割りや土坑墓が確認されていたが，今回は地割り溝に加え，道路状の遺構や中世まで下る可能性のある掘立柱建物も確認できた。すぐ西側には，木田城跡も残されており，徐々にではあるが木田城の様相も明らかとなってきている。

第Ⅴ章　出土遺物

磐城山遺跡から出土する遺物は，遺構の密度の割りに少ないのが現状である。第7-2次調査では，遺物整理箱（55 × 33 × 10cm）に 7 箱，第 8 次調査で 32 箱，第 8-2 次調査で 8 箱を数えるに過ぎない。しかも，多くが小片となっており，復原あるいは図化できるものは限られている。この中でも，SD0866 や SD0895 からはややまとまった量の遺物が出土したといえる。

以下，出土遺物は遺構のまとまりごとに解説する。これは遺構の重複が著しいため，逐一，明確に区分して遺物を取り上げることが困難であったことによる。そのため，各遺構とも，若干の遺物の混在が認められることを明記しておく。

なお，いずれの出土遺物も磨滅が激しく，調整等が不鮮明であるものが多い。器壁が 1mm 近く剥落しているものも存在し，遺存状況は決して良好とはいえない。

１　竪穴住居

SH0830/31/32（Fig.44）

1 ～ 3 が SH0830, 4 が SH0831/32 の出土遺物である。3 は山中式の高杯の脚端部と考えられ，他も弥生時代後期頃のものであろう。

SH0807/08（Fig.44）

5 は SH0807/08 の周壁溝から出土した。ほぼ完形で

あり，珍しく残りがよい。幅 1.5cm 程度の粘土紐を積み上げて成形している。内外面ともハケの後，上半部にはオサエながらナデ消している。口縁端部は角頭状で面を持ち，やや内傾している。弥生時代後期のものであろう。

SH0816（Fig.44）

6･7 は SH0816 の出土遺物である。6 は SH0816 の貼床撤去の際に出土した。受口状の口縁を呈し，口縁外面に刺突を施すが，磨滅が著しく不鮮明となっている。7 の口縁は外反し，内面に横方向のハケを残す。ともに，弥生時代後期頃のものであろう。

SH0814（Fig.44）

8 は SH0814 から出土した，弥生土器の壺の底部片である。全体に磨滅し，調整等は窺えない。時期は定かでないが，弥生時代後期頃のものだろう。

SH0804（Fig.44）

9･10 が SH0804 の出土遺物である。9 は弥生土器の壺であろう。10 は土玉である。1/3 程度しか残存していないが, おそらく 4cm くらいの球形に穿孔を施している。帰属時期ははっきりしないが，おそらく弥生時代後期頃のものと考えられる。

SH0851（Fig.44）

11 は SH0851 から出土した，弥生土器の壺である。やや上げ底の小型壺である。内面はナデとオサエにより平滑に仕上げている。弥生時代後期頃のものだろう。

SH0853/54（Fig.44）

12 ～ 18 は SH0853/54 の出土遺物である。12 は広口壺の口縁部で，端部はやや下方に引き出している。13 は壺の底部であろう。14 は受口状口縁の甕であるが，磨滅が著しく調整等は見えない。15･16 は高杯である。15 はやや浅い杯部を持ち，端部及び屈曲部を拡張させ。明瞭な段を作り出している。16 は小片のため，口径の誤差が大きい。

17 は砂岩製の砥石である。使用面は 1 面に限られるが，よく磨滅（図の網掛け部分，以下同じ）している。線状痕は認められない。18 は緑灰色のチャート製の石鏃である。両面とも中央には素材面を残しているが，丁寧に押圧剥離されている。長さ 3.6cm，重量 3.3 g の完形品である。18 のみ S=1/2 で図示してあるので, 注意されたい。18 が他と伴うのか定かでないが，概ね弥生時代後期のものと考えてよい。

19･20 は SH0854 として取り上げた遺物である。19 は山中式の高杯である。20 は砂岩製の磨石と敲石の複合石器である。磨石としての利用場所は片側平坦面及び側縁，上端であり，下端のみ敲打痕が観察される。

SH0864（Fig.44）

21 ～ 28 が SH0864 の出土遺物である。21 は西辺周壁溝，28 が東辺周壁溝，22 ～ 25 が南辺中央土坑，26 が P215（北西主柱穴），27 が P187（南西主柱穴）から出土している。21 は弥生土器の甕で，緩やかに外反した口縁を呈し，端部には面を持つ。22 は壺であろうか。口縁はやや内湾する。23 は壺ないし甕の脚台部分である。端部には 5 条程度の浅い凹線が巡らされ，直径 6mm 程度の穿孔も施される。24 は受口状口縁の甕である。口縁外面には刺突を施し，頸部以下は 4 条の直線文，刺突，波状文，刺突と繰り返す。25 は高杯の脚部である。筒状から広くハ字状に開く端部を持つ。筒状の脚部にはミガキの痕跡が残されている。26 は甕の底部であろう。平底で，内外面ともナデとオサエで仕上げられている。27 は台付甕の脚台部でろう。28 は砂岩製の敲石である。細長い上下両端に敲打痕が観察される。これらの特徴から，弥生時代後期のものと考えられるが，山中式をやや遡る可能性を持つ。

SH0862/63（Fig.44）

29 ～ 31 が SH0862, 32 が SH0863 の出土遺物である。29 は須恵器の杯 H 蓋で，口径は 14.0cm，器高は 5.1cm ある。回転ヘラ削りは反時計周りで，幅広い。端部の稜は比較的明確で，天井部に降灰痕が認められる。30･31 は土師器の甕で，いわゆる宇田型甕の範疇である。30 の口縁は水平に外方へ引き出すが，31 は斜め下方へと引き出している。概ね 6 世紀前半頃のものとして理解してよいだろう。

32 は須恵器の杯蓋である。29 と比して丸味を帯び，口径 13.2cm，器高 4.8cm とやや小型化する。やや幅広な回転ヘラ削りを時計周りに施す。天井部と立ち上がりの外面から内面全体にかけて色調が異なっており，重ね焼きされていたことが分かる。29 よりもやや新しいが，概ね 6 世紀前半のものであろう。

SH0867（Fig.44）

33 は SH0867 出土の弥生土器の台付甕である。外面にはハケが残る。脚台部のみであるので，詳細な年代等は不明である。

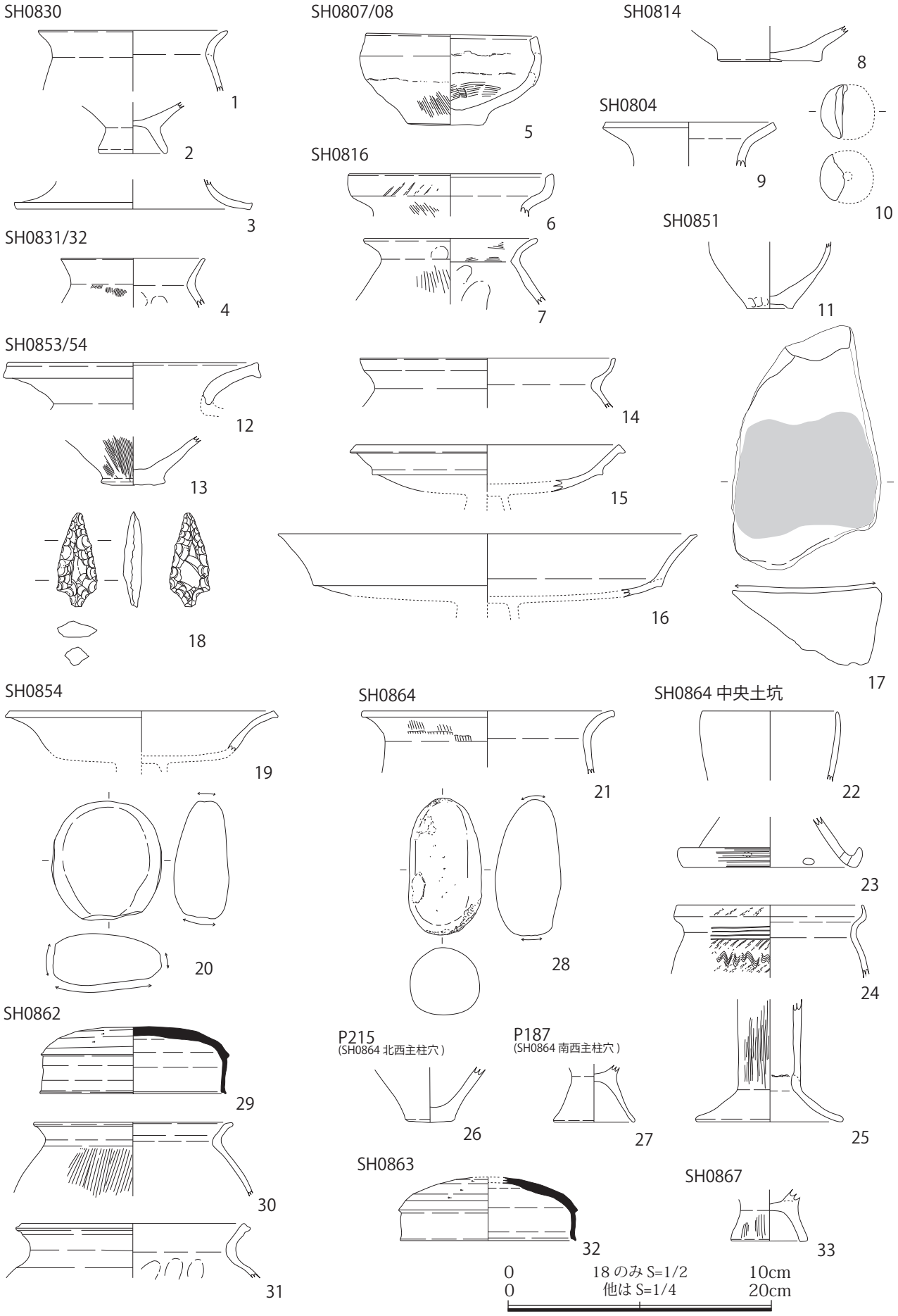


Fig.44　竪穴住居の出土遺物①（S=1/4･1/2）

SH0805/09/29/79（Fig.45）

34 ～ 38 が SH0805/09/29/79 の出土遺物である。34 は小型の壺で SH0879 の南辺周壁溝から出土している。35 は土玉である。直径 3.1cm で，厚さ 2.1cm の断面形が算盤玉状を呈する。SH0805/29 埋土から出土した。36 は凝灰岩製の砥石である。目の細かい石材を選択しており，長さ 3.9cm と非常に小型である。仕上げ用の砥石として利用されたのであろう。断面形は長方形で 4 面ともよく使い込まれている。一部に線状痕を残す。SH0805/09 埋土出土。37 は下呂石製の石錐である。一部に円礫の表皮を残す。よく使い込まれており。先端は磨滅して稜がとけている。SH0809/29 西辺周壁溝から出土している。38 はハイアロクラスタイト製の磨製石斧である。刃部は両刃で，先端には衝撃剥離痕が認められる。部分的に敲打の痕跡が残り，敲打の後に研磨していることが分かる。SH0809/29 西辺周壁溝から出土した。

これらの土玉や石器から時期比定することは困難であるが，一緒に出土している土器の破片等から弥生時代後期頃のものと理解してよいだろう。

SH0889/92（Fig.45）

39・40 は SH0889 南辺周壁溝，41 は SH0892 南辺周壁溝の出土である。39 はく字甕であるが，磨滅のため調整等は不明である。40 は壺の体部から底部の破片で，下半分は完形である。幅 2cm 程度の粘土紐を積み上げている。41 は弥生土器の甕の底部破片であろう。

いずれも弥生土器で，概ね弥生時代後期と考えてよいだろう。

SH08103/104（Fig.45）

42 ～ 45 が SH08103/104 の出土遺物である。42 は高杯の脚部として図化したが，天地が逆転して壺の口縁になる可能性もある。外面には縦方向のミガキが施されている。43・44 はミニチュア土器である。西辺周壁溝から隣接して出土した。43 は壺形であり，頸部はユビオサエによる。44 は上げ底で，甕形になるのだろうか。45 は，同じく西辺周壁溝から出土した，砂岩製の砥石である。長さ 30.7 ｃｍと大型である。主に最も平坦となる面を利用しており，大きく磨滅している。なお，裏面もやや磨滅しており，両面に使用痕跡が残る。

これらの年代は定かにし難いが，概ね弥生時代後期頃のものとして理解してよいだろう。

SH08101（Fig.45）

46・47 が SH08101 の出土遺物である。ともに弥生土器で，壺の口縁である。46 は大きく開く。概ね弥生時代後期頃のものであろう。

SH08215/216（Fig.45）

48・49 は，ともに SH08215/216 南辺周壁溝の出土遺物である。48 は受口状口縁の甕であるが，施文状況は磨滅のため不明である。49 は高杯の脚端部である。円形の透かしが 1 ヶ所確認できる。いずれも弥生時代後期頃のものである。

２　掘立柱建物

SB08211（Fig.46）

50 が SB08211 の P556，51 が同 P557 から の出土遺物である。50 は須恵器杯であるが，杯Ｈの蓋の天井部だと理解した。丸みを帯びており，口径は 10cm を少し越える程度と想定され，非常に小さい。

51 は須恵器の杯Ｈ身である。口縁端部を僅かに欠くが，口径は 8.5cm と非常に小さい。小片であるため，誤差もあろうが，小型であることは間違いない。ともに口径が小さいことから，7 世紀代のものであろう。

SB0860（Fig.46）

52 が SB0860 の P63 から出土している。約 1/3 が遺存しており，掘立柱建物の出土遺物の中では残りのよいものである。

須恵器杯Ｈ蓋であり，口径 13.2cm，器高 4.5cm ある。全体に磨滅が著しいが，天井部はヘラ切りのようである。天井部と口縁の境には緩やかな段が残り，口縁短部の内側には沈線状の凹みが 1 条巡る。6 世紀後半から 7 世紀にかけてのものであろう。

SB08126（Fig.46）

53 が SB08126 の P128 から出土した。須恵器杯Ｈ身で，口径は 10cm 前後に復原される。受け部には重ね焼きの痕跡が残る。底部は扁平なようであり，6 世紀末から 7 世紀頃のものであろう。

SB0860/128（Fig.44）

54 は P152 の出土遺物である。P152 は SB0860 か SB08128 のどちらかに帰属する。須恵器甕の頸部片である。他の須恵器の年代と概ね同じものであろう。

３　土坑

SK0871（Fig.47）

55 は弥生土器の壺の底部である。SK0871 の第 1 層目

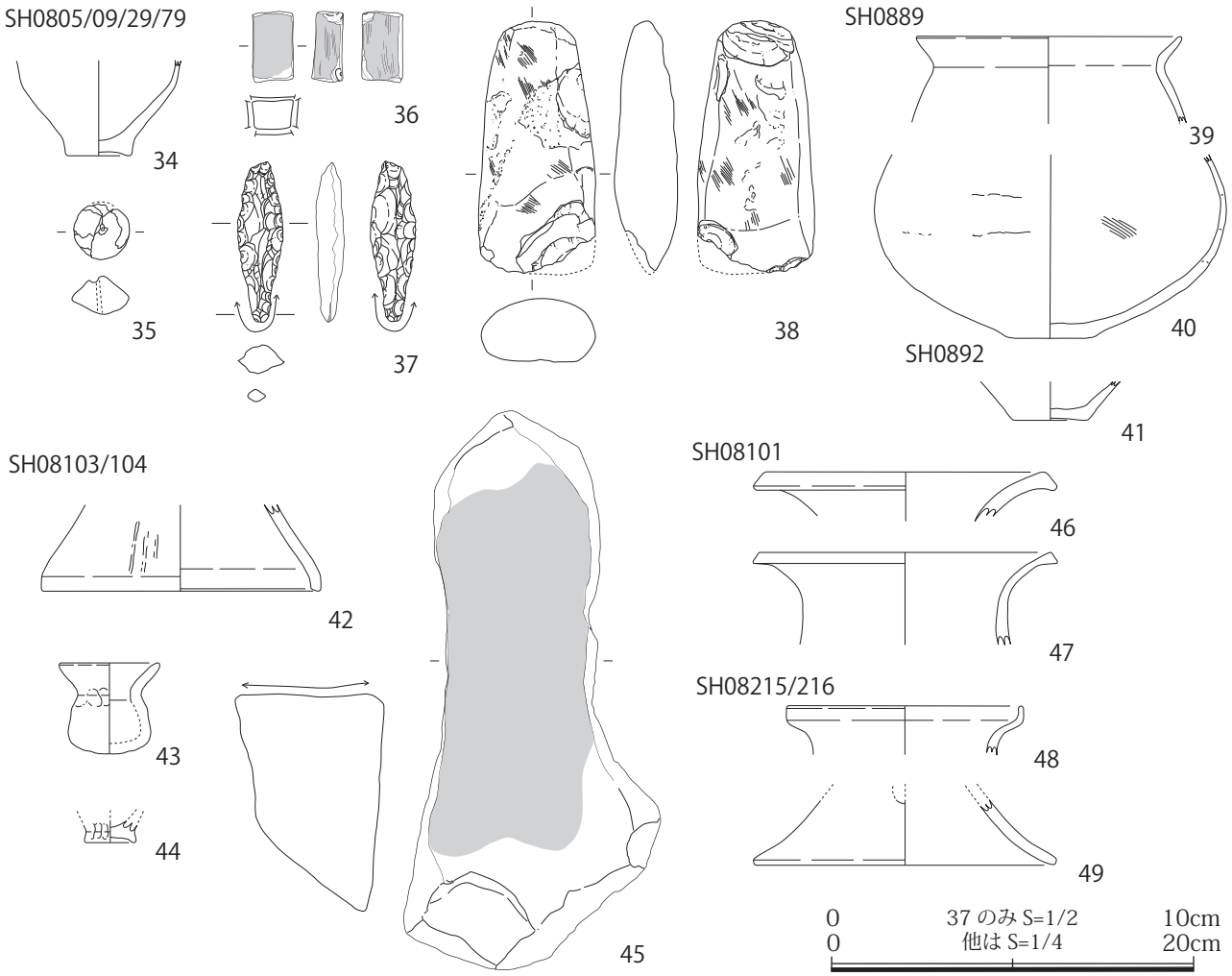


Fig.45　竪穴住居の出土遺物②（S=1/4･1/2）

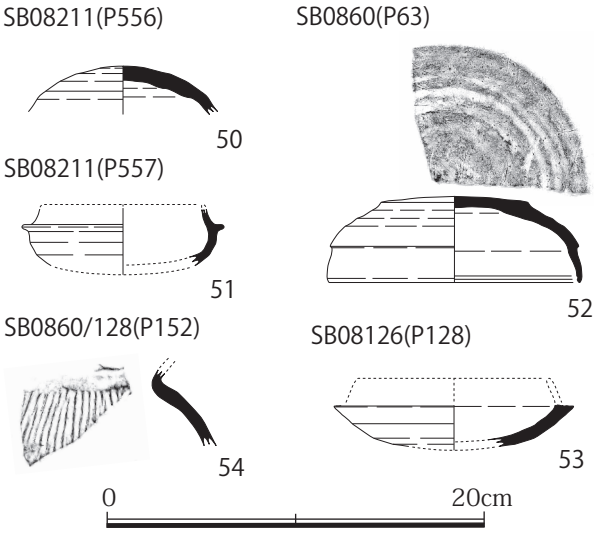


Fig.46　掘立柱建物の出土遺物（S=1/4）

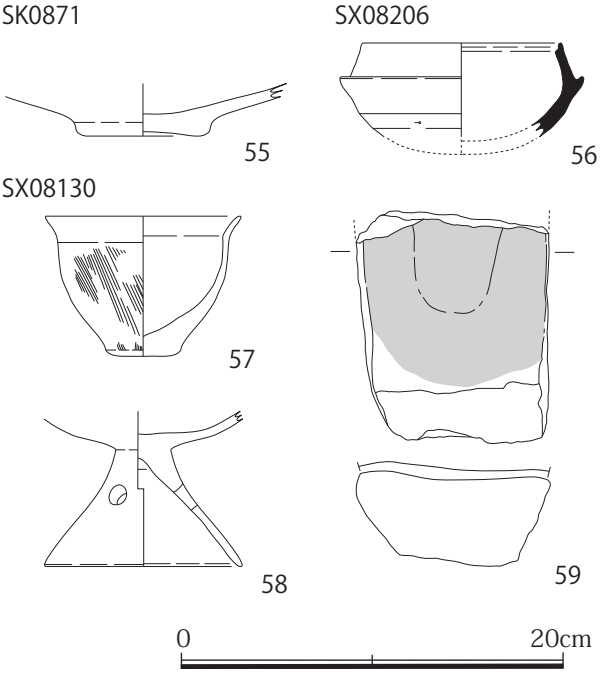


Fig.47　土坑の出土遺物（S=1/4）

（1 段目の落ち込み部分）から出土した。底部径は 7.0cm あり，比較的大型である。

SX08206（Fig.47）

56 は SX08206 から出土した，須恵器杯 H 身である。遺構の項で触れなったが，この SX08206 は掘立柱建物 SB08211 に接しており，この須恵器は本来 SB08211 のものであった可能性も考えられる。

口径を 10.4cm として図化したが，焼け歪みが大きいため，口径の誤差は大きいものと推定される。内面から受け部にかけて降灰痕が確認され，重ね焼きされたことが分かる。全体的に丸みをおびるが，概ね 6 ～ 7 世紀代のものと推定される。

SX08130（Fig.47）

57 ～ 59 は SX08130 から出土した。SX08130 は木の根等の撹乱と推定されるが，周囲に位置した竪穴住居の遺物が巻き上がったものの可能性が高い。調査区の南端でるため，南側に竪穴住居が隠れている可能性も否定できないが，北側にある SH08103/104 のものであったことも考えられる。

57･58 は弥生土器ないし古式土師器であり，57 が鉢，58 は高杯になる。57 はほぼ完形であり，外面に黒斑を持つ。59 は凝灰岩製の砥石である。片側 1 面のみが使用され，中央は浅く凹んでいる。上半分程度を欠損する。弥生時代後期末から古墳時代前期初頭のものとして理解できる。

4　道路

SC08224（Fig.48）

60 と 61 が SC08224 東側溝の SD0860 から出土した。ともに山茶椀の口縁部である。60 の口縁部は比較的直線的にのび，61 はやや内湾する。ともに鎌倉時代のものであろう。

62 も SC08224 の出土遺物であるが，SD0861 から出土している。須恵器の甕になろう。古墳時代頃のもので，混入品だと理解できる。

5　溝

SD0863(= 133)（Fig.49）

63 ～ 65 が SD0863=133 から出土した。いずれも弥生土器で，63 は壺，64 は台付甕，65 が高杯となる。65 は上下 2 段に円形の透かしを持つ。上の透かしは 1 ヶ所で，下部は 3 ヶ所あけられている。上の透かしの周辺には 6 条 1 単位の直線文が 3 段以上施される。山中式の高杯だと理解できる。

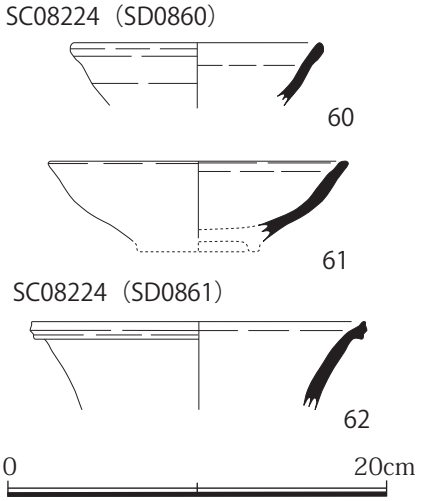


Fig.48　道路の出土遺物（S=1/4）

SD0891（Fig.49）

66 は SD0891 から出土した。口縁端部を僅かに欠くが，内外面とも密にミガキを施す。弥生時代後期頃のものであろう。

SD0885（Fig.49）

67 は SD0885 から出土した。台付甕の脚台部である。内部はナデ上げている。

SD08108（Fig.49）

68 ～ 70 は SD08108 から出土した。68 は弥生土器の甕で，口縁はく字状に開く。69 は高杯で，杯部内面にはやや粗いミガキが施される。口径は 15.8cm とやや小さく，端部はヨコナデにより外反する。山中式の高杯である。

70 は磨製石斧で，刃部周辺の一部分が残存している。刃部は両刃である。比較的扁平で，側縁は研磨によって面が形成される。

SD0870（Fig.49）

71 は SD0870 から出土した。高杯で，口縁はやや外反しながら短く立ち上がる。一部に縦方向のミガキが認められる。山中式の古いものであろう。

SD08107/108(=208)（Fig.47）

72 ～ 75 までは SD08107/108=208 から出土した。72 は弥生土器の甕で，73･74 は高杯である。74 はやや薄手のつくりで，椀形を呈する。いずれも弥生時代後期のものとしてよいだろう。

75 は凝灰岩製の砥石である。使用面は 3 面あり，い

ずれもよく磨耗しているが，線状痕は認められない。

SD0866（Fig.49）

76 ～ 83 は SD0866 から出土している。全て弥生土器で，76･77 が壺，78･79 が甕，80 ～ 83 が高杯となる。76 は大きく開く広口壺である。77 の口縁は段を有する。あるいは，破片のため口径が小さくでてしまっただけで，受口状口縁の甕になるのかもしれない。78 は受口状口縁の甕で，端部外面には刺突を施す。

80 は高杯の口縁端部であり，81 ～ 83 は脚部である。82 の上部には 1 ヶ所のみ透かしがあるが，他は下部にだけ透かしがあけられている。これらは山中式の高杯で，他の土器も同じ時期のものとして理解できる。

SD0896(=221)（Fig.49）

84 ～ 87 は SD0896(=221) から出土した。いずれも弥生土器で，84･85 は広口壺になる。85 の口縁端部は下方へ大きく垂下する。86 はく字甕，87 は台付甕となる。弥生時代後期のものであろう。

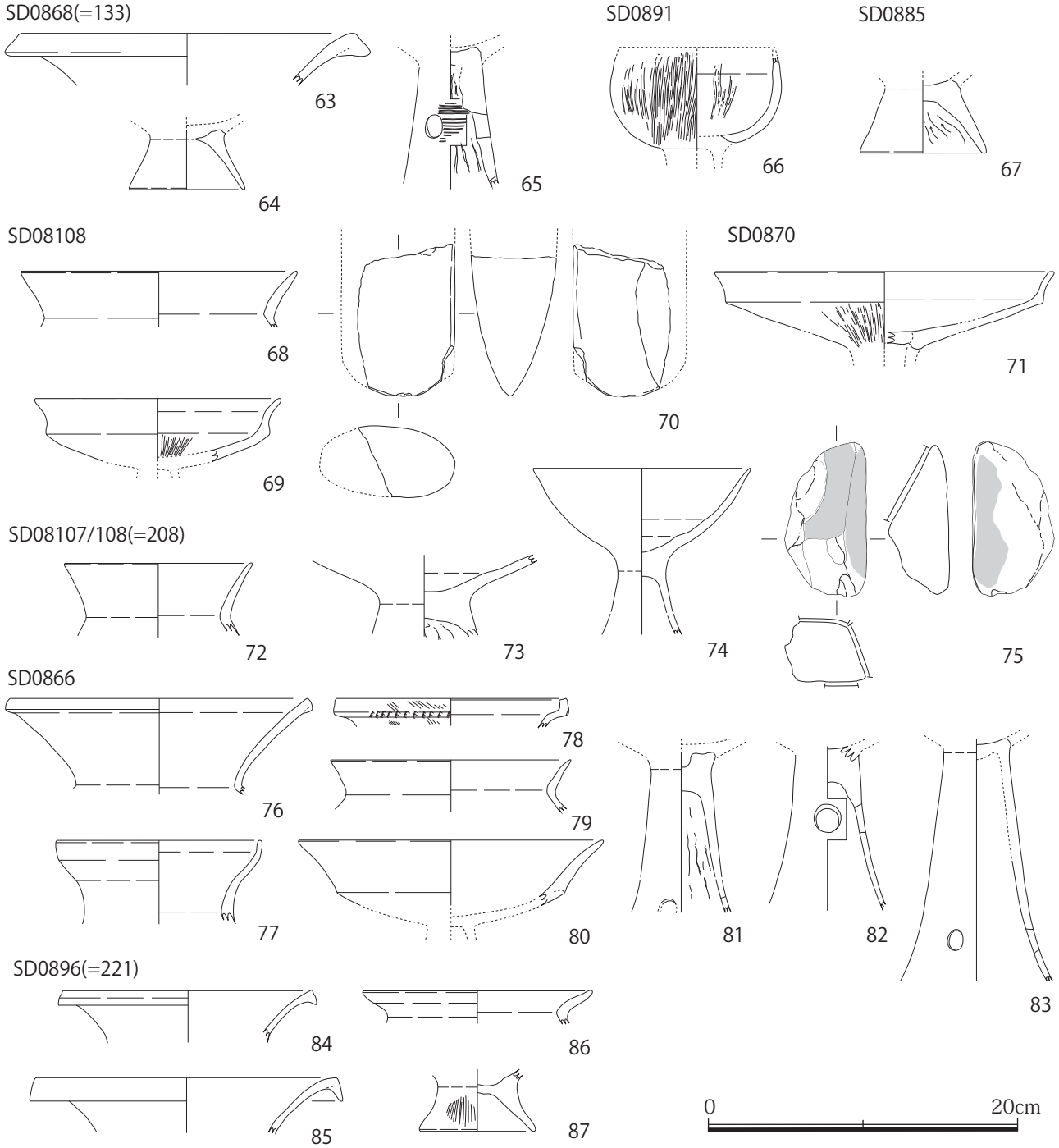


Fig.49　溝の出土遺物①（S=1/4）

SD0895(=219)（Fig.50）

88 ～ 92 は SD0895(=219) から出土した。88 ～ 91 は壺で，92･93 が甕，95 は高杯である。94 には透かしがなく，他の高杯とはやや形状が異なるので，壺や甕が上にのる器形の土器で，その脚台部になるのであろう。88 の口縁内面には，磨滅のため不鮮明ながら，羽状刺突が施されていることが確認できる。95 の上部には直径 6mm の穿孔が 1 ヶ所のみ施される。概ね弥生時代後期のものであろう。

SD0895（Fig.50）

96 は SH0886 として調査したが，竪穴住居でなく本来は SD0895 の可能性が高いため，ここに独立されておく。弥生土器の広口壺で，口縁端部は上下に肥厚しており，そこに刺突を施している。

SD08100（Fig.50）

97 ～ 99 は SD08100 から出土した。いずれも弥生土器である。97 は壺としたが，甕の可能性もある。98 は高杯の脚端部で，99 は台付甕となる。99 の上下は接合しないが，両者の胎土や出土状況から，同一個体と理解できた。SD08100 からは比較的残りのよい土器が出土したものの，弥生時代後期頃のものとしか分からなかった。

SD08218（Fig.50）

100･101 は SD08218 から出土した。100 は受口状口縁を呈する甕で，外面には刺突が施される。101 は砥石である。上半分を欠損するが，扁平な礫を素材とし，表裏両面と小口面の全てを利用している。表裏とも中央に縦長く筋状の凹みが認められる。また，小口面には細い筋状凹みが特徴的に認められる。

SD0893（Fig.50）

102 は SD0893 から出土した。山茶椀の底部の破片である。高台には籾殻痕が観察される。鎌倉時代のものであろう。

6　柱穴・ピット

P142（Fig.51）

103･104 は SH0853 内の P142 から出土した。ともに弥生土器で，103 は壺，104 は高杯になろう。

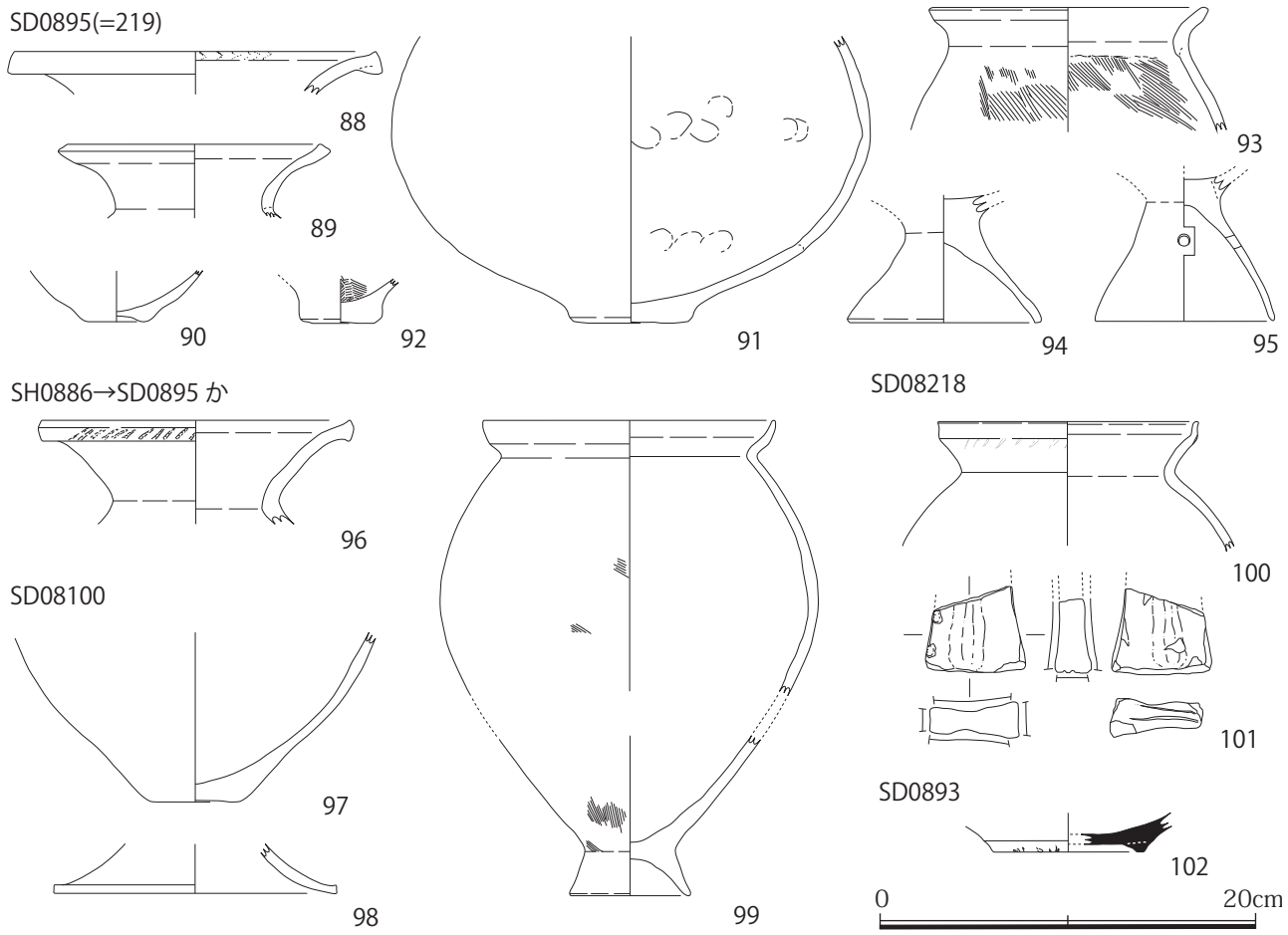


Fig.50　溝の出土遺物②（S=1/4）

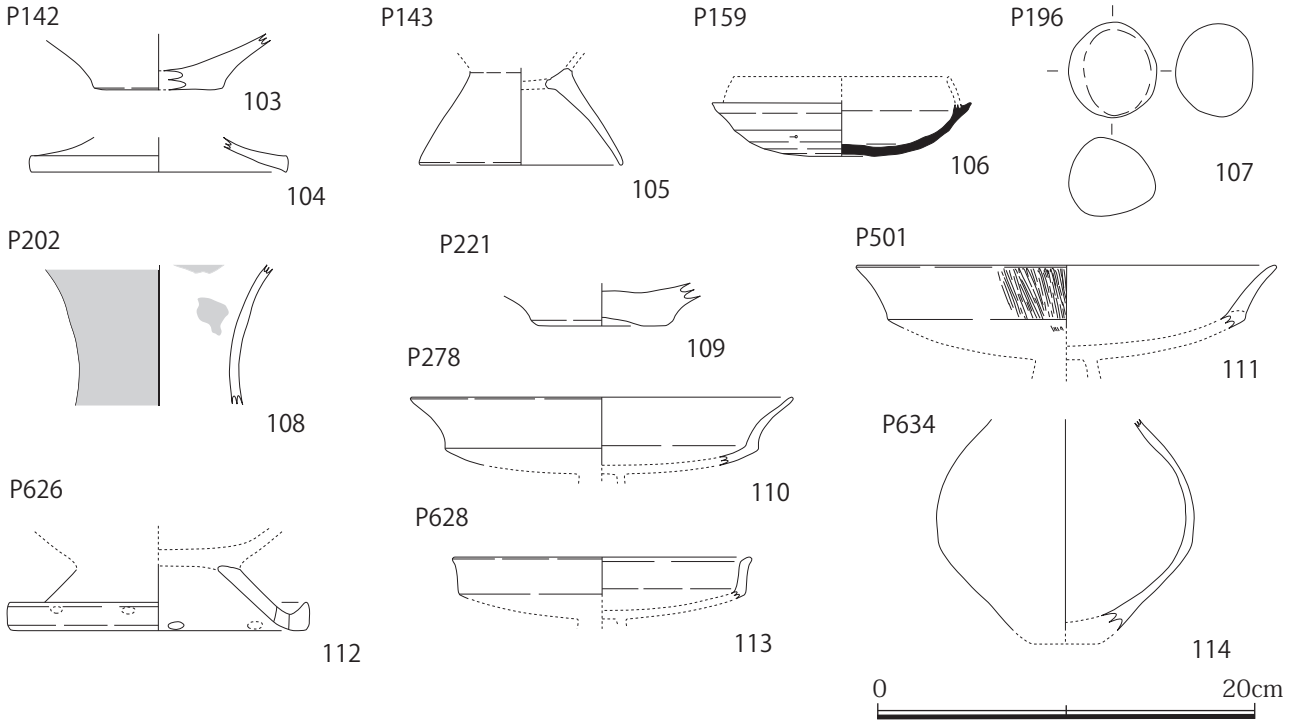


Fig.51　ピットの出土遺物（S=1/4）

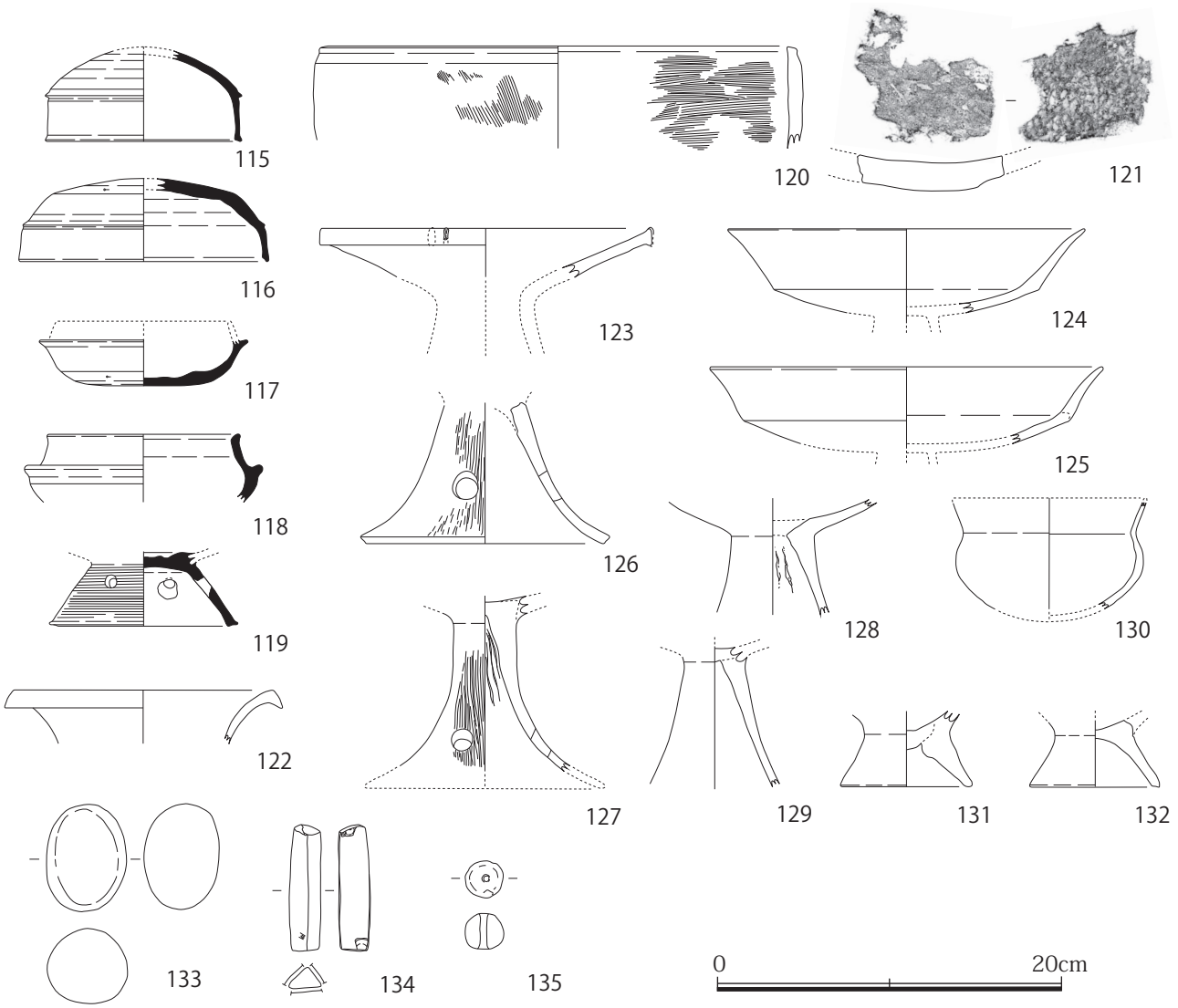


Fig.52　包含層・検出等の出土遺物（S=1/4）

P143（Fig.51）

105 は SH0853/54 内の P143 から出土した。弥生時代の台付甕だと考えられる。

P159（Fig.51）

106 は SH0853/54 内の P159 から出土した。須恵器の杯 H 身である。やや扁平な形状であり，古墳時代後期から飛鳥時代頃のものだろう。

P196（Fig.51）

107 は SH0864 内の P196 から出土した。花崗岩製の磨石で，球形を呈する。

P202（Fig.51）

108 は SH0864 の上面で確認した，P202 から出土した。弥生土器の長頸壺になると考えられる。外面は全体的に赤彩されており，内面にも一部赤彩の痕跡が残る。

P221（Fig.51）

109 は SH0854 の南西外側にある P221 から出土した。弥生土器の壺の底部であろう。

P278（Fig.51）

110 は SH0805 の南東主柱穴として調査した P278 から出土したが，実際には SH0880/82 の北東主柱穴の出土である。山中式の高杯の口縁で，大きく外反する。

P501（Fig.51）

111 は SH08211/212 の北西主柱穴に相当する P501 から出土した。

山中式の高杯で，杯部外面にはやや傾いた方向のミガキを密に施している。

P626（Fig.51）

112 は SH08220 内の P626 から出土した。壺などが上にのる器形になろう。脚端部には小さい穿孔を 2 ヶ所確認できたが，おそらく全周していたと想像される。

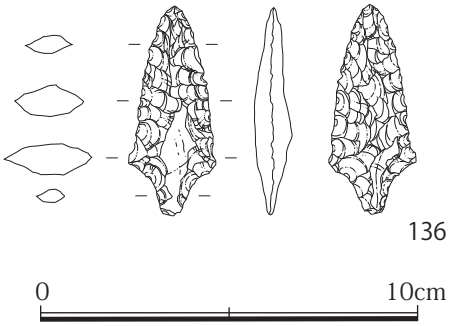


Fig.53　縄文時代の出土遺物（S=1/2）

P628（Fig.51）

113 は SH08220 内の P628 から出土した。弥生土器の高杯である。口縁は直立して立ち上がるので，八王子古宮式併行まで遡る可能性がある。

P634（Fig.51）

114 は SH08215/216 の北辺周壁溝の下部で確認した P634 から出土した。弥生土器の中形壺であるが，口縁と底部を欠く。

7　包含層・検出（Fig.52）

115 ～ 135 までに包含層ないし検出等の出土遺物を掲載した。115 ～ 119 までは須恵器である。115 は丸味をおび，端部や稜に鋭さを残すので，5 世紀末頃まで遡る可能性がある。116 は稜が痕跡的となってきており，口径も 14.2cm と大きいことから，6 世紀前半頃になろう。117・118 はより退化しており，6 世紀から 7 世紀代のものと考えられる。119 は高杯の脚部で，年代的には 115 や 116 の頃であろう。

120 は土師器の甑である。口縁端部は角頭状で面を持ち，内外面ともハケ調整を全面に施す。古墳時代以降のものである。

121 は瓦である。全体にケズリが施されるが，欠損のため詳細不明である。

122 ～ 132 は弥生土器である。123 は器台で，口縁端部には棒状の浮文が認められるが，数や単位は不明である。126 ～ 129 は高杯の脚部で，124・125 は杯部となる。杯部の形状から，山中式前後のものと考えられる。130 は鉢で，131・132 は台付甕の脚台部である。

133 は磨石で，134 は砥石である。134 は珪化木製であり，市内では珍しい石材である。断面三角形の小型品で，三面ともよく使用されている。135 は土玉である。

8　縄文時代の出土遺物（Fig.53）

136 は二上山産サヌカイト製の有茎尖頭器である。SH08103/104 の東辺周壁溝から出土したが，確実に時期が異なるため別に図示した。長さ 5.5cm，幅 2.3cm，厚さ 1.0cm，重量 8.3 g の完形品である。

片面のみ素材面を残すが，全体的には丁寧に押圧剥離が施されている。基部は Y 字状で，比較的短小である。他の縄文時代の遺構や遺物は確認されていないが，その特徴から縄文時代草創期の産物である。

Tab.2-1　遺物観察表

報告番号	調査次数	実測番号	種別	器種	地区	遺構／層位	法量			調整・技法の特徴	胎土	礫の大きさ (mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
1	7-2	085	弥生土器	甕	CQ/CR40	SH0830 南辺周壁溝	14.2			口縁 : ヨコナデ 内外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	淡褐	良	口縁にて 1/8	
2	7-2	086	弥生土器	甕	CQ/CR40	SH0830 南辺周壁溝		4.8		内外 : 磨滅のため不明	やや密	2-3	内 ; 淡白黄 外 ; 淡赤褐	良	脚台部にて完形	
3	7-2	084	弥生土器	高杯	CQ/CR40	SH0830 南辺周壁溝		17.6		内外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	淡褐	良	脚端部にて 1/12	
4	7-2	087	弥生土器	甕	CQ39	SH0831/32 (下のピットか)	10.6			口縁 : ヨコナデ 内 : オサエ　外 : ハケ	密	1-2	淡赤褐	良好	口縁にて 1/8	
5	7-2	082	弥生土器	鉢	北区	SH0811/12/13 西辺周壁溝→ SH0807/08 西辺周壁溝	13.2	6.0	6.0-7.3	内 : ナデ , オサエ , 一部ハケ 外 : ハケ	密	2-3	褐 - 暗褐	良好	完形	個別 1, 粘土紐の積み上げ痕顕著
6	7-2	080	弥生土器	甕	CR40	SH0816 貼床層	15.4			内 : 磨滅のため不明 外 : 刺突	やや密	2	淡赤褐	良	口縁にて 1/8	
7	7-2	083	弥生土器	甕	CR41	SH0816 西辺周壁溝	13.0			口縁内 : ハケ　内 : オサエ 外 : ハケ	密	ほとんど含まない	褐灰	良好	口縁にて 1/8	
8	7-2	079	弥生土器	壺	CR39	SH0814 西辺周壁溝		7.8		内外 : 磨滅のため不明	密	2.-3	内 ; 淡灰 外 ; 淡灰褐	良	底部にて完形	
9	7-2	073	弥生土器	壺	CR40/41	SH0804 ベルト以南	12.6			内外 : 磨滅のため不明	密	2	内 ; 淡黄灰 外 ; 淡褐	良	口縁にて 1/8	
10	7-2	074	土製品	土玉	CR/CQ40	SH0804 ベルト以北				長 :4.0m　残存幅 2.0cm 残存厚 :3.5cm　重量 :20.2 g	密	ほとんど含まない	灰褐	良	1/3	4cm くらいの球形に直径 4mm の穿孔
11	8	081	弥生土器	壺	CQ/CR42	SH0815 南辺周壁溝		3.5		内外 : ナデ , オサエ	密	3-4	暗褐	良好	底部にて完形	
12	7-2	088	弥生土器	壺	北区	SH0846 南辺周壁溝	18.8			内外 : 磨滅のため不明	密	2	淡黄褐	良	口縁にて 1/2	個別 2
13	8	089	弥生土器	壺？	CN/CO/CP40	SH0846 南辺周壁溝		5.8		内 : ナデ , オサエ　外 : ハケ	密	2-3	内 ; 淡黄灰 外 ; 淡灰褐	良	底部にて 1/2	
14	8	094	弥生土器	甕	CO/CP41	SH0853 南辺周壁溝	19.0			内外 : 磨滅のため不明	やや密	2-3	淡黄褐	良	口縁にて 1/8	
15	8-2	091	弥生土器	高杯	CM39	SH0853 西辺周壁溝	20.0			口縁 : ヨコナデ 内外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	明褐	良好	杯部にて 1/8	
16	8-2	092	弥生土器	高杯	CM39	SH0853 西辺周壁溝	31.8			内外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	黄褐	良	杯部にて 1/16	口径の誤差大
17	8	093	石器	砥石	CO41	SH0853 南辺周壁溝				長 :18.3m　幅 :11.4cm 厚 :5.9cm　重量 :1,155 g					完形	個別 29, 砂岩製
18	8	090	石器	石鏃	CP40	SH0852 東辺周壁溝				長 :3.6m　幅 :1.5cm 厚 :0.7cm　重量 :3.3 g					完形	個別 5, チャート (緑灰色) 製
19	8	095	弥生土器	高杯	CN/CO/39/40	SH0854	20.0			内外 : 磨滅のため不明	密	2	淡褐	良	杯部にて 1/12	
20	8	096	石器	敲石 + 磨石		SH0854 南辺周壁溝				長 :9.0　幅 :8.4cm 厚 :4.1cm　重量 :535 g					完形	個別 30, 砂岩製
21	8	112	弥生土器 / 土師器	甕	CN43	SH0864 西辺周壁溝	19.0			内 : 磨滅のため不明 外 : ハケ	やや密	2	内 ; 黒褐 外 ; 淡黄灰	良	口縁にて 1/8	
22	8	105	弥生土器	壺	CO43	SH0864 南辺中央土坑	10.2			内外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	内 ; 黒灰 外 ; 灰白	良	口縁にて 1/6	
23	8	106	弥生土器	壺 / 甕	CO43	SH0864 南辺中央土坑		13.0		内外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	淡黄灰	良	脚端部にて 1/8	
24	8	103	弥生土器	甕	CO43	SH0864 南辺中央土坑	14.0			内 : 磨滅のため不明 外 : 刺突 , 直線文 , 波状文	密	4	淡褐灰	やや軟	口縁にて 1/6	
25	8	104	弥生土器	高杯	CO43	SH0864 南辺中央土坑		10.6		内 : 磨滅のため不明 外 : ミガキ	密	2-3	褐灰	良	脚部にて 1/6	
26	8	107	弥生土器	甕	CO42	P215(SH0864 北西主柱穴)		3.9		内外 : ナデ , オサエ	密	ほとんど含まない	内 ; 灰黒 外 ; 淡黄褐	良	底部にて完形	
27	8	108	弥生土器	甕	CO43	P187(SH0864 南西主柱穴)		6.0		内外 : 磨滅のため不明	やや密	2-4	淡赤褐	良	脚台部にてほぼ完形	
28	8	109	石器	敲石	CP43	SH0864 東辺周壁溝				長 :10.4　幅 :5.6cm 厚 :5.1cm　重量 :395 g					完形	個別 19, 砂岩製
29	8	099	須恵器	杯蓋	CN43/44	SH0862 東辺周壁溝	14.0		5.1	口縁 : ロクロナデ 内 : ロクロナデ　外 : 回転ヘラ削り (反時計まわり)	密	2-3	暗青灰	良好	ほぼ完形	天井部全体に降灰痕あり
30	8	101	土師器	甕	CN43	SH0862 東辺周壁溝	14.8			口縁 : ヨコナデ　内 : 磨滅のため不明　外 : ハケ	密	ほとんど含まない	淡黄褐	良	口縁にて 1/6	個別 7
31	8	100	土師器	甕	CN43	SH0862 東辺周壁溝	16.8			口縁 : ヨコナデ　内 : オサエ　外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	淡黄褐	良	口縁にて 1/4	個別 9
32	8	102	須恵器	杯蓋	CN43	SH0863 東辺周壁溝	13.2		4.8	口縁 : ロクロナデ 内 : ロクロナデ　外 : 回転ヘラ削り (時計まわり)	密	1-2	灰	良好	1/4	個別 6, 内面全体に降灰痕→逆位にて重ね焼き
33	8	110	弥生土器	甕	CN44	SD0867 (SH0867 か ?)		5.6		内 : ナデ　外 : ハケ	密	2-3	淡褐赤	良	脚台部にて完形	

Tab.2-2　遺物観察表

報告番号	調査次数	実測番号	種別	器種	地区	遺構／層位	法量			調整・技法の特徴	胎土	礫の大きさ (mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
34	8	111	弥生土器	壺	CR44	SH0879=89		3.7		内外 : 磨滅のため不明	密	3-5	淡黄褐	良	底部にて完形	個別 20
35	7-2	077	土製品	土玉	北区	SH0805/29				長 :3.1m　幅 :3.1cm 厚 :2.1cm　重量 :12.6 g	密	ほとんど含まない	灰褐	良好	完形	個別 4, 算盤球状
36	7-2	075	石器	砥石	CQ/CR41	SH0805/09 上層				長 :3.9m　幅 :2.3cm 厚 :1.6cm　重量 :25.5 g					完形	凝灰岩製
37	8	078	石器	石錐	CP42	SH0809/29 西辺周壁溝				長 :4.4m　幅 :1.3cm 厚 :0.9cm　重量 :4.3 g					完形	下呂石 (円礫) 製, 先端はよく磨滅
38	8	076	石器	磨製石斧	CP42	SH0809/29 西辺周壁溝				長 :13.9m　幅 :6.5cm 厚 :3.5cm　重量 :490 g					完形	個別 18, ハイアロクラスタイト製
39	8	115	弥生土器	甕	CQ46	SH0889 南辺周壁溝	14.4			内外 : 磨滅のため不明	密	2-3	黄灰	やや軟	口縁にて 1/8	個別 13
40	8	113	弥生土器	壺	CQ46	SH0889 南辺周壁溝		4.2		内外 : 磨滅のため不明 , 一部ハケ残る	密	4-6	内 ; 黒灰 外 ; 淡褐灰	良	下半部にて完形	個別 12
41	8	114	弥生土器	甕	CQ46	SH0870 南辺周壁溝？		4.2		内外 : 磨滅のため不明	密	2	灰白	良	底部にて完形	個別 14
42	8	120	弥生土器	高杯	CP48	SH08103/104 西辺周壁溝		14.9		内 : ナデ　外 : ミガキ	密	ほとんど含まない	暗褐	良	脚端部にて 1/12	
43	8	118	ミニチュア土器	壺形		SH08103/104 西辺周壁溝	7.4		5.0	内外 : ナデ , オサエ	密	2	淡黄褐	良	ほぼ完形	個別 16
44	8	119	ミニチュア土器	甕形		SH08103/104 西辺周壁溝		2.6		内外 : ナデ , オサエ	密	ほとんど含まない	内 ; 黄灰 外 ; 黒灰	良	底部にて完形	個別 16
45	8	117	石器	砥石	CO/CP46	SH08104 西辺周壁溝				長 :30.7　幅 :14.1cm 厚 :12.0cm　重量 :5,650 g					完形	砂岩製
46	8	121	弥生土器	壺	CO48	SH08121	15.4			内外 : 磨滅のため不明	密	2	淡黄灰	良	口縁にて 1/6	
47	8	122	弥生土器	壺	CO48	SH08121	16.0			内外 : 磨滅のため不明	密	3-4	淡黄褐	良	口縁にて 1/8	
48	9	123	弥生土器	壺 / 甕		SH08215 南辺周壁溝	12.8			内外 : 磨滅のため不明	密	2-4	淡褐灰	良	口縁にて 1/12	第 9 次調査の遺物 , 口径の誤差大
49	8-2	029	弥生土器	高杯	CK47	SD08223 → SH082 15/216 南辺周壁溝		16.4		円形透かし 1 ヶ所のみ 内外 : 磨滅のため不明	密	2-3	褐灰	良好	脚端部にて 1/8	
50	8-2	048	須恵器	杯蓋	CM40	P566 西半 SB08211				内 : ロクロナデ　外 : 回転ヘラ削り (時計まわり)	密	ほとんど含まない	暗青灰	良好	天井部にて 1/3	天地逆の可能性あり
51	8-2	049	須恵器	杯身	CN40	P557 東半 SB08211				内外 : ロクロナデ	密	ほとんど含まない	灰青	良好	受部付近にて 1/6	口径小さい
52	7-2	047	須恵器	杯蓋	CP41	P63　SB0860	13.2		4.5	口縁 : ロクロナデ　内 : ロクロナデ　外 : ヘラ切り	密	ほとんど含まない	内 ; 淡赤灰 外 ; 淡灰青	良	1/3	全体に磨滅が著しい
53	8	135	須恵器	杯身	CP40	P128 (SH0853 上)				内 : ロクロナデ　外 : 回転ヘラ削り (方向不明)	密	2-3	灰白	良好	受部付近にて 1/6	重ね焼きの痕跡あり
54	8	050	須恵器	甕	CP40	P152(SH0853 上) SB0860/128				内 : ロクロナデ 外 : タタキ	密	ほとんど含まない	暗青灰	良好	頸部破片	
55	8	043	弥生土器	壺	CO44	SK0871　1 層黒褐色砂礫混シルト		7.0		内外 : 磨滅のため不明	密	4-6	淡黄褐	良	底部にて完形	
56	8-2	042	須恵器	杯身	CM41	SX08206	10.4			口縁 , 内 : ロクロナデ　底部 : 回転ヘラ削り (時計まわり)	密	ほとんど含まない	灰	良好	口縁にて 1/6	焼け歪むため口径の誤差大
57	8	044	弥生土器	鉢	CP48	SX08130	10.1	3.9	7.3	内 : ナデ　外 : ハケ	密	2-4,8	黄褐	良	ほぼ完形	個別 11, 外面に黒斑あり
58	8	045	弥生土器	高杯	CP48	SX08130		10.2		円形透かし 3 ヶ所 内外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	灰褐	良	杯部を欠くのみ	個別 11
59	8	046	石器	砥石	CP48	SX08130				残存長 :12.1cm 幅 :10.1cm　厚 :5.0cm 重量 :960 g						凝灰岩製
60	8	025	山茶椀	椀	CN46	SD0860	13.0			口縁 : ロクロナデ	密	ほとんど含まない	灰白	良好	口縁にて 1/12	
61	8	097	山茶椀	椀	CM44/45	SH0860 東辺周壁溝 → SD0860	15.6			内外 : ロクロナデ	密	ほとんど含まない	灰白	良好	口縁にて 1/6	
62	8	098	須恵器	甕	CM44/45	SH0861 東辺周壁溝 → SD0861	17.4			内外 : ロクロナデ	密	ほとんど含まない	内 ; 暗青灰 外 ; 灰青	良好	口縁にて 1/12	
63	8	030	弥生土器	壺	CO42	SD0868	21.4			内外 : 磨滅のため不明	やや密	3-5	黄褐	良	口縁にて 1/8	
64	8	031	弥生土器	甕	CO42	SD0868		9.4		内外 : 磨滅のため不明	密	2-4	淡褐灰	良	脚部にて 1/2	
65	7-2	027	弥生土器	高杯	-	SD08133				円形透かし 1+3 ヶ所 内 : シボリ　外 : 直線文	密	3-5	淡橙	良	脚部にて端部を欠く	個別 3
66	8	002	弥生土器	高杯	CQ47	SD0891				内外 : ミガキ	密	1-6	淡黄褐	良好	杯部にて口縁端部を欠く	個別 27, 外面に黒斑あり
67	8	003	弥生土器	甕	CQ44/45	SD0885 (SH08104 排水溝)		8.0		内 : ナデ上げ 外 : 磨滅のため不明	やや密	1-5	淡黄灰	良	脚台部にて完形	
68	8	005	弥生土器	甕	CL/CM47	SD08108	17.6			内外 : 磨滅のため不明	やや密	1-3,5-6	灰褐	良	口縁にて 1/6	
69	8	004	弥生土器	高杯	CL/CM47	SD08108	15.8			内 : ミガキ 外 : 磨滅のため不明	やや密	1-3	黄灰	良	杯部にて 1/8	

Tab.2-3　遺物観察表

報告番号	調査次数	実測番号	種別	器種	地区	遺構／層位	法量			調整・技法の特徴	胎土	礫の大きさ (mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
70	8	006	石器	磨製石斧	CL47	SD08108				残存長 :9.8cm　残存幅 : 6.3cm　残存厚 :5.5cm 重量 :485 g					基部及び刃部を欠く	斑レイ岩製か
71	8	001	弥生土器	高杯	CO45/46	SD0870	21.8			内 : 磨滅のため不明 外 : ミガキ	密	1-4	淡黄灰	良好	杯部にて 1/3	杯部高 5.0cm
72	8	032	弥生土器	甕	CL45	SD08108=208	12.0			内外 : 磨滅のため不明	密	1-2	灰褐	良	口縁にて 1/8	
73	8	008	弥生土器	高杯	CM47	SD08107				内外 : 磨滅のため不明	密	2-4	淡黄褐	良好	脚部と杯部の接合部のみ残存	個別 25
74	8	007	弥生土器	高杯	CM47	SD08107	13.9			内外 : 磨滅のため不明	密	3-4	灰白	良	脚部下半を欠く	個別 26, 薄手
75	8-2	033	石器	砥石	CL46	SD08108=208				長 :10.0cm　幅 :5.4cm 厚 :3.9cm　重量 :172.2 g						凝灰岩製
76	8	017	弥生土器	壺	CO45	SD0866	18.1			内外 : 磨滅のため不明	密	5	内 ; 灰褐 外 ; 黄褐	良	口縁にて 1/4	
77	8	024	弥生土器	壺 / 甕	CO42	SD0866	13.0			内外 : 磨滅のため不明	密	2-4	淡黄褐	良	口縁にて 1/6	
78	8	022	弥生土器	甕	CO44	SD0866	14.8			口縁 : ヨコナデ 外 : ハケ , 刺突	密	ほとんど含まない	黄褐	良好	口縁にて 1/6	
79	8	021	弥生土器	甕	CO44	SD0866	15.4			内外 : 磨滅のため不明	やや密	ほとんど含まない	淡黄白	やや軟	口縁にて 1/6	
80	8	023	弥生土器	高杯	CO42	SD0866	19.5			内外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	淡黄灰	良	杯部にて 1/12	
81	8	020	弥生土器	高杯	CO45/46	SD0866				円形透かし 3 ヶ所か 内 : シボリ 外 : 磨滅のため不明	密	4-6	淡灰褐	良	脚部にて端部を欠く	
82	8	019	弥生土器	高杯	CO45/46	SD0866				円形透かし 1 ヶ所 内外 : 磨滅のため不明	やや密	2-4	淡黄白	良	脚部にて端部を欠く	
83	8	018	弥生土器	高杯	CO45/46	SD0866				円形透かし 3 ヶ所　内 : シボリ　外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	黄褐	良	脚部にて端部を欠く	
84	8-2	028	弥生土器	壺	CL47	SD08221	16.0			内外 : 磨滅のため不明	密	2-3	淡赤褐	良	口縁にて 1/8	
85	8	037	弥生土器	壺	CN46	SD0896	19.4			内外 : 磨滅のため不明	密	2-4	淡黄灰	良	口縁にて 1/8	
86	8	036	弥生土器	甕	CL47	SD0896	14.6			内外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	内 ; 黒灰 外 ; 淡赤褐	良	口縁にて 1/6	
87	8	038	弥生土器	甕	CL47	SD0896		7.2		内 : 磨滅のため不明 外 : ハケ	密	2	淡黄褐	良	脚台部にて完形	個別 23
88	8	011	弥生土器	壺	CM47	SD0895	19.2			内 : 羽状刺突 外 : 磨滅のため不明	密	2	淡黄褐	良好	口縁にて 1/12	
89	8	012	弥生土器	壺	CM47	SD0895	13.4			内外 : 磨滅のため不明	密	4	淡黄褐	良	口縁にて 1/6	
90	8-2	015	弥生土器	壺	CK46	SD08219		3.0		内外 : 磨滅のため不明	密	2-4	淡黄褐	良	底部にて完形	
91	8	016	弥生土器	壺	CN46	SD0895		6.0		内 : ユビオサエ 外 : 磨滅のため不明	やや密	3-6	淡黄灰	良	胴部以下にて 1/3	個別 10, 外面に黒斑あり
92	8	010	弥生土器	甕	CM47	SD0895		4.0		内 : ハケ　外 : ナデ	密	3-4	内 ; 黒褐 外 ; 褐灰	良	底部にて完形	
93	8	013	弥生土器	甕	CN46	SD0895	14.4			口縁 : ヨコナデ 内外 : ハケ	密	ほとんど含まない	黄褐	良好	口縁にて 1/8	個別 10
94	8	009	弥生土器	壺 / 甕	CN46	SD0895		10.1		内外 : 磨滅のため不明	密	3-5	灰褐	良	脚部にて完形	個別 10
95	8	014	弥生土器	高杯	CN46	SD0895		9.4		内外 : 磨滅のため不明	密	3-5	灰褐	良	脚部にて完形	個別 10
96	8	116	弥生土器	壺	CQ45	SH0886	16.4			口縁 : 刺突 内外 : 磨滅のため不明	密	2-4	淡黄褐	良	口縁にて 1/4	
97	8	040	弥生土器	壺	CN47	SD08100		4.8		内外 : 磨滅のため不明	密	2-4	内 ; 黒灰 外 ; 淡黄褐	良		個別 17, 外面に黒斑あり
98	8	039	弥生土器	高杯	CN47/48	SD08100		14.8		内外 : 磨滅のため不明	やや密	2-3	黄灰	良	脚端部にて 1/6	天地逆かも
99	8	041	弥生土器	甕	CN48	SD08100	15.3	6.2	25.2?	内 : 磨滅のため不明 外 : ハケ ?	やや密	2-5	内 ; 灰黒 外 ; 灰褐	良	上半部にて 1/3, 脚台部にて完形	個別 15
100	8-2	035	弥生土器	甕	CJ46	SD08218	13.6			口縁 : 刺突 内外 : 磨滅のため不明	やや密	2-4	明褐	良	口縁にて 1/6	
101	8-2	034	石器	砥石	CJ46	SD08218				残存長 :4.6cm　幅 :5.4cm 厚 :2.0cm　重量 :57.3 g						砂岩製
102	8	026	山茶椀	椀	CR46/47	SD0893		8.0		内外 : ロクロナデ 高台 : 籾殻痕	密	ほとんど含まない	灰白	良好	底部にて 1/2	
103	8	057	弥生土器	壺	CO47	P315		6.8		内外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	内 ; 灰褐 外 ; 淡黄褐	良	底部にて 1/2	
104	8	056	弥生土器	高杯	CN41	P142(SH0953 内)		13.4		内外 : 磨滅のため不明	密	1-2	灰褐	良	脚端部にて 1/8	
105	8	059	弥生土器	甕	CO40	P143(SH0854 内)		10.6		内外 : 磨滅のため不明	やや密	2	淡黄灰	良	脚台部にて 1/3	

Tab.2-4　遺物観察表

報告番号	調査次数	実測番号	種別	器種	地区	遺構／層位	法量			調整・技法の特徴	胎土	礫の大きさ (mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
106	8	061	須恵器	杯身	CN40	P159(SH0854 内)				内 : ロクロナデ　外 : 回転ヘラ削り (時計まわり)	密	2-4	灰青	良好	底部にて 1/4	
107	8	062	石器	磨石	CN43	P196(SH0864 内)				長 :5.1m　幅 :4.7cm 厚 :4.2cm　重量 :134.5 g						花崗岩製？
108	8	060	弥生土器	壺	CO43	P202(SH0864 上)				内外 : 磨滅のため不明 , 赤彩	密	ほとんど含まない	褐灰 + 明赤褐	良		
109	8	058	弥生土器	壺	CN41	P221(SH0881 内)		7.5		内 : ハケ , オサエ 外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	灰褐	良	底部にて完形	
110	8	053	弥生土器	高杯	CR42	P278(SH0805 南東主柱穴) → SH0880 /82 北東主柱穴	20.2			内外 : 磨滅のため不明	密	3	灰白	良	口縁にて 1/6	
111	8-2	054	弥生土器	高杯	CL40	P501 → SH08211 /212 北西主柱穴	22.0			内 : 磨滅のため不明 外 : ミガキ	密	ほとんど含まない	淡黄褐	良		外面に黒斑あり
112	8-2	055	弥生土器	壺 / 甕	CI46	P626(SH08220 上)		15.6		内外 : 磨滅のため不明	密	2-3	淡黄白	良	脚台部にて 1/6	直径 9mm の穿孔 2 ヶ所以上
113	8-2	052	弥生土器	高杯	CJ46	P628(SH08220 上)	15.6			内外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	淡黄白	良	口縁にて 1/12	
114	8-2	051	弥生土器	壺	CJ46	P634				内外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	内 ; 淡灰褐 外 ; 淡赤褐	良	胴部にて 1/2	
115	8	064	須恵器	杯蓋	南区	検出	11.2		5.4	口縁 : ロクロナデ 内 : ロクロナデ 外 : 回転ヘラ削り (不明)	密	ほとんど含まない	灰	良好	1/6	薄手
116	8-2	063	須恵器	杯蓋	北区	検出	14.2		4.8	口縁 : ロクロナデ 内 : ロクロナデ , 不整方向ナデ　外 : 回転ヘラ削り 時計まわり)	密	ほとんど含まない	灰青	良好	1/4	天井部全体に降灰痕あり
117	8	127	須恵器	杯身	南区	検出				内 : ロクロナデ　外 : 回転ヘラ削り (反時計まわり)	密	ほとんど含まない	灰青	良好	1/2	
118	8	066	須恵器	杯身	CM44	カクラン 9	11.0			口縁 : ロクロナデ 内 : ロクロナデ 外 : 回転ヘラ削り (不明)	密	ほとんど含まない	青灰	良好	口縁にて 1/6	厚手
119	8	065	須恵器	高杯	CO43	カクラン 3		10.6		内 : ロクロナデ 外 : ロクロナデ , カキ目	密	ほとんど含まない	暗青灰	良好	脚部にて 1/2	円形透かし 3 ヶ所 , 逆位焼成
120	8	124	土師器	甑	CN/CO42	包含層	26.6			口縁 : ヨコナデ　内 : ヨコハケ　外 : タテハケ	密	3	黄褐	良	口縁にて 1/12	
121	8	125	瓦	平瓦？	CM/CN/ CO43	包含層				内外 : ケズリ	密	4	灰白	良好	破片	
122	8	126	弥生土器	壺	-	表面採集	15.0			内外 : 磨滅のため不明	密	5	淡黄白	良	口縁にて 1/6	
123	8	068	弥生土器	器台	中区	検出	19.0			内外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	内 ; 褐 外 ; 褐灰	良好	口縁にて 1/4	棒状浮文あり
124	8	133	弥生土器	高杯	南区	検出	20.6			内外 : 磨滅のため不明	密	2	黄褐	良	杯部にて 1/8	
125	8	134	弥生土器	高杯	南区	検出	22.7			内外 : 磨滅のため不明	密	4	黄褐	良	杯部にて 1/12	
126	8	067	弥生土器	高杯	南区	西半　検出		13.8		内 : 磨滅のため不明 外 : ミガキ	密	1-3	淡黄褐	良	脚部にて 1/3	円形透かし 1 ヶ所以上
127	8	132	弥生土器	高杯	南区	検出				内 : シボリ　外 : ミガキ	密	ほとんど含まない	淡褐灰	良	脚部にて端部を欠く	
128	8	131	弥生土器	高杯	南区	検出				内外 : 磨滅のため不明	密	ほとんど含まない	淡黄灰	良	杯部と脚部の接合部のみ	
129	8	069	弥生土器	高杯	南区	西半　検出				内外 : 磨滅のため不明	やや粗	2-6	黄褐	良	脚部にて上半部のみ	
130	8	128	弥生土器	鉢	南区	検出				内外 : 磨滅のため不明	密	3-4	淡黄灰	良	体部にて 1/3	
131	8	130	弥生土器	甕	南区	検出		7.2		内外 : 磨滅のため不明	やや密	4-8	淡赤褐	良	脚台部にて完形	
132	8	129	弥生土器	甕	南区	検出		7.4		内外 : 磨滅のため不明	密	2-3	淡黄褐	良	脚台部にてほぼ完形	
133	8	072	石器	磨石	南区	検出				長 :6.2m　幅 4.7cm 厚 :4.3cm　重量 :155.0 g					完形	凝灰岩製？
134	8	071	石器	砥石	南区	検出				長 :7.3m　幅 1.9cm 厚 :1.3cm　重量 :18.9 g					完形	珪化木製
135	8	070	土製品	土玉	南区	検出				長 :2.1m　幅 2.2cm 厚 :2.1cm　重量 :7.9 g	密	1-2	暗褐	良好	完形	
136	8	290	石器	有茎尖頭器	CQ46	SH08103/104 東辺周壁溝				長 :5.5m　幅 2.3cm 厚 :1.0cm　重量 :8.3 g					完形	個別 28, 二上山産サヌカイト製
137	8	PL20	石製品	軽石	CQ/CR44	SH0879/80/82 埋土				重量 :26.8g					完形	加工を施さない
138	8	PL20	石製品	軽石	中区	SH08103/104 埋土				重量 :95.1g					完形	加工を施さない

第Ⅵ章　調査の成果

磐城山遺跡では，7 次にわたって発掘調査が進められてきた。これまでの調査の成果から，弥生時代後期を中心とした集落に加え，主に 6 世紀前半頃の古墳時代の集落，古代の掘立柱建物群，木田城跡に係る中世後半の城館跡からなる複合遺跡として周知されている（田部 2011，2014，2015）。

本書は，平成 26 年度末から平成 27 年度にかけて実施した発掘調査の報告書である。届出がなされた対象地が広大であるため，発掘調査は平成 28 年度以降も継続している。そのため，遺跡の全体像が判明したわけではないが，第 7-2･8･8-2 次調査区で得られた知見を中心にまとめておきたい。

1　弥生時代後期の集落について

磐城山遺跡の最も盛行した時期の一つである。第 1 次調査の成果から，環濠を伴う集落と周知されていたが，台地の北端である第 5 次調査区でその続きは確認されなかった。また，今回の調査区も台地の北端にあたり，第 1 次調査の濠が環状にまわるならば，検出されてもおかしくない位置であったが，濠は検出されなかった。第 1 次調査の濠が直線的であることから，台地の先端部を遮断するような意図で開削された，条濠（壕）のようなものであった可能性が高い。津市大城遺跡等では，集落や墓を幾筋かの大溝で区画する事例も確認されるので（田中 1998），磐城山遺跡でもこのような構造をとるのか，注意して調査を進めていく必要がある。

また，台地上を覆い尽くすように夥しい数の竪穴住居が建てられている。条濠（壕）から北西へ約 110 m進んだ所まで調査が進んできたが，一向に集落が途切れる気配はない。同じ台地上のやや奥まった所（第 8 次調査区から西へ約 230 m）にある木田坂上遺跡では，弥生時代の集落跡は一切確認されていないので，その間までに途切れることになるが，県下でも随一の遺構密度を誇る磐城山遺跡の西限も検討課題の一つといえる。

さらに，竪穴住居の多くには，排水のためと考えられる溝が付属している。磐城山遺跡の多くの竪穴住居で確認されるが，このような溝は建物の北東ないし北西の周壁溝の隅，あるいは南辺中央土坑から住居の内部を通り抜け，地形的に低い方向へ向かって掘られている。掘り方は深く，断面が逆台形をしており，かなり堅牢なものであることが多い。市内では，弥生時代中期（凹線文段階）までの竪穴住居には見られない特徴で，弥生時代後期頃に突然登場したようにみえる。今後は，その由来についても検討したい。また，今回の調査では，SD0898 と SD0899 や SD0896 と SD0899, SD0898 と SD08100 等，明らかに溝同士が接続している事例が認められた。今後は，このような排水溝の事例を検討し，住居跡と併せて検討する必要を感じている。

2　古墳時代後期の集落について

弥生時代後期の集落が衰退し，再び集落が形成されるようになるのは，5 世紀末以降，ほぼ 6 世紀に入ってからのことである。この時期の集落は，台地の東端に多く構築されている。第 7-2・8・8-2 次調査区内でも SH0862/63, SH08202 等の 3 棟程度であり，後の方形区画とする内部には顕著でないことが指摘できる。

これらの集落も，6 世紀中頃には再び衰退するようで，6 世紀後半にはほとんど見られなくなる。今回の調査で確認された掘立柱建物群やこれらを区画すると考えられる直線的な溝（SD0777 等）は，出土遺物から 6 世紀後半以降から 7 世紀代にかけての遺構だと推定される。そのため，ちょうど方形の区画が形成され始める時期に，入れ替わるようにして古墳時代の集落が消滅する様子が明らかになってきた。これらのことから，後述する掘立柱建物群の運用にあたって古墳時代の集落を意図的に移動させていると理解できる。

なお，6 世紀後半以降に移動した集落の行き先としては，境谷遺跡が考えられる（浅野 2007，2008）。境谷遺跡は，磐城山遺跡から谷を 3 つほど隔てた近距離にあり，弥生時代中期後葉で衰退した後，6 世紀後半から 7 世紀にかけての竪穴住居が広がっている。近接した位置でちょうど入れ替わるように遺跡が消長しており，その関連性が注意される。

3　古墳時代後期から古代の掘立柱建物群について

第 7-2･8･8-2 次調査の最大の成果といえるのが，6 世紀後半～7 世紀代と推定される掘立柱建物群の検出である。今回 13 棟を確認したが，この内の 10 棟がほぼ同じ位置で繰り返し建て替えられている。その選地にあたってかなり固定的であったといえるが，第 1･3･4･7 次調査区で確認されている直線的にのびる SD0777 等の溝（以下，方形区画）の存在も無関係でなかったと想定される。

方形区画は，南北 61 m以上にわたって直線的にのびている。北端は台地の縁辺であるため，土砂の流出によっ

Tab.3　掘立柱建物一覧表

遺構番号	向き	形態	長軸方向	規模（間数）	面積（㎡）	梁行（m）	桁行（m）	1間の距離；梁行（m）	1間の距離；桁行（m）	出土遺物
SB08211	N-7°-W	総柱	南北	2×3間	16.8	4.0	4.2	2.0	1.4	須恵器杯H身・蓋 7世紀代
SB03101	N-8°-W	側柱	東西	3×4間	25.4	3.9	6.5	1.3	1.6	
SB08128	N-8°-W	総柱	東西	3×3間	11.9	3.3	3.6	1.1	1.2	
SB08129	N-9°-W	総柱	東西	3×3間	16.8	4.0	4.2	1.4+1.2+1.4	1.4	
SB0859	N-15°-W	総柱	東西	3×3間	17.8	4.1	4.35	1.3+1.3+1.5	1.45	
SB08125	N-16°-W	総柱	東西	3×4間	26.2	4.1	6.4	1.3+1.5+1.3	1.6	
SB03102	N-17°-W	側柱	東西	2×5間	28.1	3.6	7.8	1.8	1.55	梁行き2間は不明瞭
SB08126	N-17°-W	総柱	東西	3×3間	17.1	3.8	4.5	1.4+1.4+1.0	1.5	須恵器杯H身 6世紀後半～7世紀代
SB08130	N-20°-W	総柱	東西か	1×3間以上	(18前後)	4.0か？	4.5	2.0	1.5	
SB0724	N-21°-W	総柱	—	3×3間	15.2	3.9	3.9	1.3	1.3	古墳時代後期？のSH0711より新しい
SB08127	N-26°-W	総柱	東西	2×3間	12.2	3.2	3.8	1.6	1.25	
SB08223	N-27°-W	総柱	東西か	0×3間以上	-	-	3.8	-	1.25	
SB0860	N-0°	総柱	東西	3×3間	15.5	3.7	4.2	1.3+1.1+1.3	1.4	須恵器杯H蓋(ヘラ切り) 6世紀後半～7世紀代
SB08133	N-1°-E	総柱	—	1×2間以上	-	2.8	1.7	1.4	1.7か	
SB08132	N-4°-E	総柱	東西か	3×1間以上	-	5.1	1.5	1.5+1.8+1.8	1.5	中世か
SB0636	N-8°-E	側柱	東西	1×2間	8.0	2.0	4.0	2.0	2.0	中世か
SB08222	N-18°-E	総柱	南北か	1×3間以上		(1.35)	3.9	1.35	1.3	

※　第3～8次調査までのものを対象とする

て消失してしまっている。また，南東隅がやや途切れているが，第1次調査区では，そこから直角に折れ曲がって西方へ60 m以上のびている。西側は調査区外であるためはっきりしないが，さらに西方を調査した第2次調査では確認されていないため，第1次調査区と第2次調査区の間にある大規模な現代溝によって削平されている可能性が高い。第1次調査で確認された東西溝は，南東隅から約33 mの位置で約6 m途切れており，ここが中央の出入り口であったと想定される。この場合，東西は約70 mの規模をもつこととなる。なお，平成30年度以降の調査区がその西辺に相当する範囲を調査することとなるので，今後の調査の進展に期待したい。

このように，磐城山遺跡には70 m程度の方形区画が推定できるが，この帰属時期は十分に絞り込めていない。明らかに混在である弥生土器を除くと，6～7世紀の須恵器等が出土しているので，7世紀代に埋没した可能性が最も高いと判断している。

これらのことから，今回の調査で検出された掘立柱建物と方形区画を形成する溝は，概ね6世紀後半から7世紀にかけての同じ時期の遺構だと理解され，両者は互いに関連していたと想像される。そこで，区画溝と掘立柱建物群の方位を検討したものが，Fig.54である。

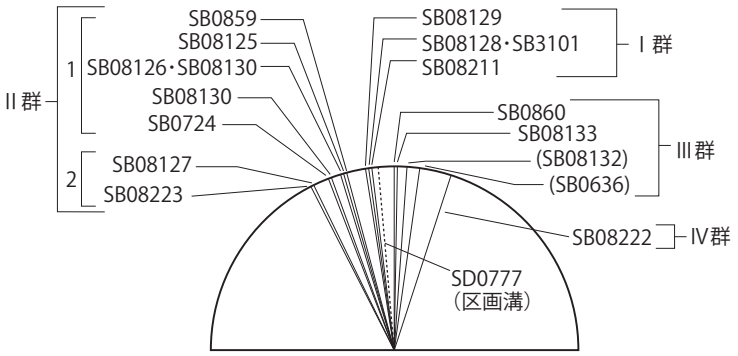


Fig.54　掘立柱建物の方位の分析

区画溝はN-5°-Wであり，これとほぼ同じものがSB08129やSB08128，SB08211等である。ここでは，これらをⅠ群としておく。また，区画溝の方位よりもさらに西へ傾くSB0859からSB08223までを，大きくⅡ群としてまとめた。このⅡ群を細かく見るとSB0859からSB0724までの小群と，SB08127・SB08223の小群の2

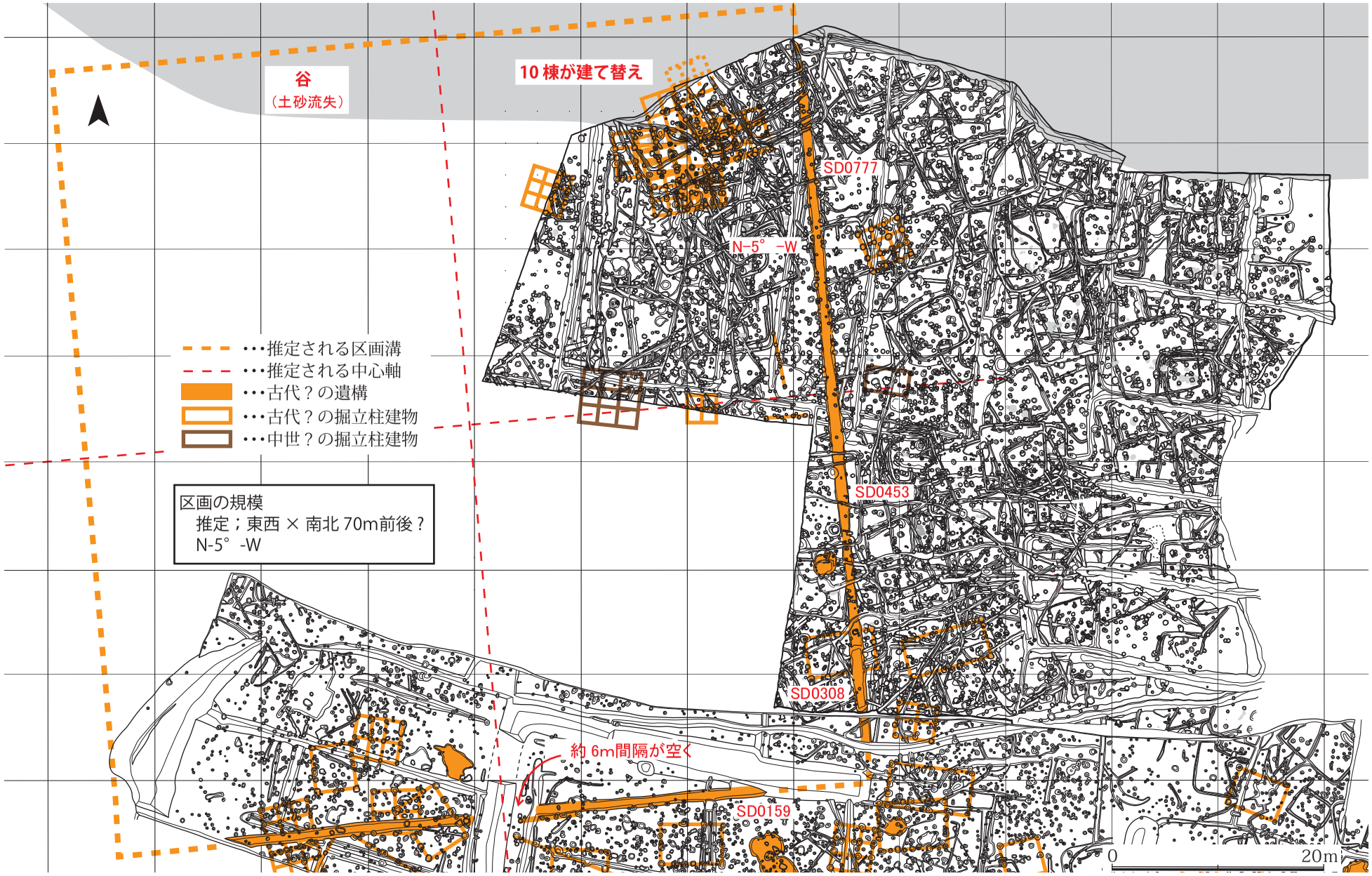


Fig.55　方形区画と掘立柱建物の位置関係（S=1/500）

つに分けることが可能のようで，前者をⅡ-1群，後者をⅡ-2群とする。また，正方位から東へ傾くSB0860からSB0636をⅢ群とした。このⅢ群は，SB08132とSB0636の2棟が中世の可能性があるので，これを除くSB0860とSB08133の2棟が，ほぼ正方位を向く建物ということになる。なお，一応，Ⅳ群として区別したが，SB08222のみ大きく東へふれている。

さて，これらの群分けからみえてくる姿は，建物の組み合わせがそれほど明確でない点である。Ⅰ群は3棟が重複した位置にあるため，それぞれ別の時期に建てられたことは間違いない。一方，Ⅱ群はSB08130とSB08126，SB0859とSB08125，SB08127とSB08223の2棟1単位の組み合わせが認められるかも可能性がある。Ⅲ群はSB0860のみ正方位をとり，いずれとも異なる時期のものであろう。このように考えると，少なくとも，6～7時期にわたる変遷が想定でき，かなりの長期間にわたって同一場所で倉庫が営まれていたことになる。

問題なのはこれらⅠ群からⅣ群までの時間的な前後関係が不明で，いつの時点で倉庫が形成され，またいつの段階で区画溝を伴うのか不明なことである。今後の調査の進展を期待する他ないが，今回の調査区は方形区画の北東4分の1を調査したことになる。この倉庫群以外に6世紀後半～7世紀代の目立った遺構は検出されておらず，倉庫の周囲は空白地帯が広がっているようである。今後，区画内部の調査を進める予定になっているが，掘立柱建物等の構造物はもちろん，この空白部分にも意識して調査を継続する必要があろう。

4　中世城館に係る遺構について

古代の掘立柱建物群の後は，中世後半に至るまで目立った痕跡は確認されていない。僅かに灰釉陶器や山茶椀が出土するが，その時期の遺構は皆無である。中世後半になると，地割り溝や礫を多く含む土坑等（土坑墓と推定している）である。

今回の調査で土坑墓は確認されなかったが，併行する2条の溝を2ヶ所で検出した。これは，道路跡（SC08224・SC08225）と考えられる。SC08224は幅3.0～3.3m程度あり，緩やかに湾曲しながら南北へ通じている。SC08225は幅1.8mで，SC08224よりも直線的で屋敷地を区画する溝であり，溝の間に土塁等があった可能性もある。

なお，SC08225は，N-10°-Eの方位をとる。磐城山遺跡の下の沖積地では，十宮以東でN-20°-E，十宮以西（河田町から甲斐町）でN-10°-Eの条理地割が施工されている。十宮以西の地割りとSC08225の方位がほぼ一致しており，SB0636も一致する。

これまでも中世後半の地割り溝は確認されてきたが，他の時期の遺構の重複が激しいため建物の様子は不明であった。西側に隣接して登録されている木田城跡にも近づいてきており，今後は城館に関わる遺構もより濃くなると予想されるので，注意して調査を進める必要がある。

参考・引用文献

赤塚次郎　1990『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　1992『山中遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　1997『西上免遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　2001『八王子遺跡』財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　2003「八王子古宮式と近江湖南型甕」『研究紀要』第4号　財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター

浅尾　悟　1993『伊勢国分寺跡（5次）・長者屋敷遺跡（1次）』鈴鹿市教育委員会

浅野隆司　2007『境谷遺跡第1次発掘調査概要報告』鈴鹿市考古博物館

浅野隆司　2008『境谷遺跡第2次発掘調査概要報告』鈴鹿市考古博物館

伊藤淳ほか　2007「南山遺跡（第3次）」『鈴鹿市考古博物館』第8号　鈴鹿市考古博物館

伊藤　洋　2010『十宮古里遺跡発掘調査報告』鈴鹿市考古博物館

伊藤裕偉　2004『河曲の遺跡』三重県埋蔵文化財センター

上村安生　2002「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の編年と様式』木耳社

大場範久・仲見秀雄　1972「鈴鹿市高岡青谷遺跡調査報告」『神戸史談』第8号　三重県立神戸高等学校

岡田雅幸　2000「磐城山遺跡（2次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第1号　鈴鹿市考古博物館

岡田雅幸・林和範　2003「一反通遺跡（4次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第4号　鈴鹿市考古博物館

岡田　登　1995「伊勢大鹿氏について」『史料』第135・136号　皇學館大学史料編纂所

岡田　登　2005「西ノ岡A遺跡」『三重県史』資料編　考古1　三重県

小倉　整　2005『国分北遺跡（3次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター

角正淳子　2000「国分北遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター

真田幸成・大場範久・仲見秀雄　1970『上箕田　弥生式遺跡第二次調査報告』鈴鹿市教育委員会・上箕田遺跡調査会

清水政宏　2004a『山奥遺跡』Ⅰ　四日市市教育委員会

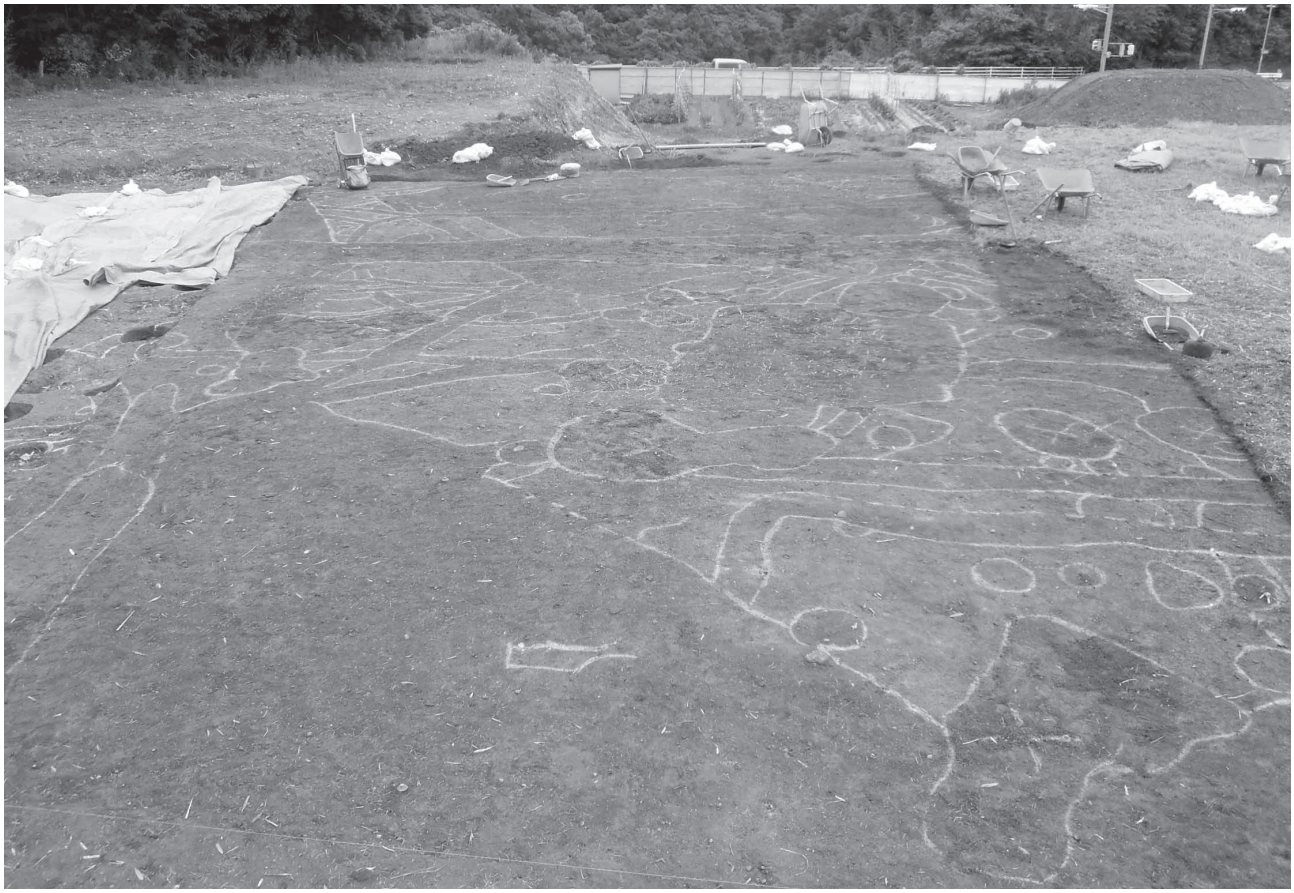
清水政宏　2004b『山奥遺跡』Ⅱ　四日市市教育委員会

杉立正徳　1997「山辺瓦窯跡発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財年報』Ⅳ　鈴鹿市教育委員会

杉立正徳　1998 「磐城山遺跡発掘調査概要」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』Ⅴ　鈴鹿市教育委員会
鈴鹿市　2008 『鈴鹿市の自然―鈴鹿市自然環境調査報告書―』鈴鹿市環境部環境政策課
鈴鹿市教育委員会編　1980 『鈴鹿市史』第一巻　鈴鹿市
田中秀和ほか　1998 『大城遺跡発掘調査報告書』 安濃町教育委員会・安濃町遺跡調査会
田部剛士　2009 『沢城跡 第 1 次発掘調査報告書』 鈴鹿市考古博物館
田部剛士　2011 「磐城山遺跡（3 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 13 号　鈴鹿市考古博物館
田部剛士　2013a 「磐城山遺跡（4 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 14 号　鈴鹿市考古博物館
田部剛士　2013b 「須賀遺跡（6 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』 第 14 号　鈴鹿市考古博物館
田部剛士　2013c 「磐城山遺跡（5 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 15 号　鈴鹿市考古博物館
田部剛士　2014 『磐城山遺跡（第 4･5 次）発掘調査報告書』鈴鹿市考古博物館
田部剛士　2015a 『磐城山遺跡（第 6･7 次）発掘調査報告書』鈴鹿市考古博物館
田部剛士　2015b 「宮ノ前遺跡（第 2 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 16 号　鈴鹿市考古博物館
田部剛士　2015c 「磐城山遺跡（6 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 16 号　鈴鹿市考古博物館
田部剛士　2015d 「磐城山遺跡（第 7 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 17 号　鈴鹿市考古博物館
田部剛士　2016 『平田遺跡発掘調査報告書―御門垣内地区の調査―』 鈴鹿市考古博物館
田部剛士　2017a 「磐城山遺跡（第 8 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 18 号　鈴鹿市考古博物館
田部剛士　2017b 「間瀬口遺跡（第 1 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 18 号　鈴鹿市考古博物館
田部剛士　2017c 『宮ノ前遺跡（第 3 次）発掘調査報告書』鈴鹿市
田部剛士　2018 「磐城山遺跡（第 9 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 19 号　鈴鹿市考古博物館
仲見秀雄　1961 『上箕田　弥生式遺跡第一次調査報告』 三重県立神戸高等学校郷土研究クラブ
中森成行　1978 『富士山 10 号墳発掘調査概要』 鈴鹿市教育委員会
新田　剛　1991 『南山遺跡･南山 6 号墳』 鈴鹿市教育委員会･鈴鹿市遺跡調査会
新田　剛　1993 『上箕田遺跡』 鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会
新田剛ほか　1996 「南山遺跡発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』Ⅲ　鈴鹿市教育委員会
新田　剛　1998 「一反通遺跡（3 次）」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』Ⅴ　鈴鹿市教育委員会
新田　剛　2005 「中尾山遺跡」『三重県史』資料編　考古 1　三重県
新田　剛　2010 『八重垣神社遺跡（第 6 次）』 鈴鹿市考古博物館
新田　剛　2018 『史跡伊勢国分寺跡 - 遺物編 -』 鈴鹿市
服部英世　2006 「萱町遺跡」『鈴鹿市考古博物館年報』第 7 号　鈴鹿市考古博物館
林　和範　2004 「天王遺跡（第 10 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 5 号　鈴鹿市考古博物館
藤原秀樹　1996 「木田坂上遺跡（2 次）発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』Ⅳ　鈴鹿市教育委員会
藤原秀樹　1998 「岸岡山Ⅲ遺跡―平成 9 年度発掘調査概要―」鈴鹿市教育委員会
藤原秀樹　2003 「沖ノ坂遺跡」『発掘された鈴鹿 1991』 鈴鹿市考古博物館
藤原秀樹　2005 「扇広遺跡」『三重県史』資料編　考古 1　三重県
藤原秀樹　2007 「南山遺跡（第 4 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 9 号　鈴鹿市考古博物館
藤原秀樹　2008a 「Ⅳ.7. 八重垣神社遺跡（第 4 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 10 号　鈴鹿市考古博物館
藤原秀樹　2008b 「Ⅳ.9. 八重垣神社遺跡（第 5 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 10 号　鈴鹿市考古博物館
藤原秀樹・吉田真由美　2015 「河曲郡衙と伊勢国分寺」『平成 27 年度あいちの考古学 2015 資料集』 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
藤原秀樹　2017 『史跡伊勢国分寺跡 - 遺構編 -』 鈴鹿市
穂積裕昌　2005 『菟上遺跡発掘調査報告書』 三重県埋蔵文化財センター
松阪市教育委員会　1991 『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』
森川常厚　1994 『磐城山遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター
山田　猛　1973 「鈴鹿市土師町・土師南方遺跡」『昭和 47 年度県営圃場整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会
吉田隆史　2011 『岸岡山Ⅲ遺跡』 鈴鹿市考古博物館
吉田隆史　2013 『平田遺跡（第 19･22 次）- 平田送水場改築に伴う発掘調査報告書』 鈴鹿市考古博物館
吉田隆史　2018 「十宮古里遺跡（第 5･6 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』
第 19 号　鈴鹿市
吉田真由美　2007 「寺山遺跡（7 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 8 号　鈴鹿市考古博物館
吉田真由美　2008 「Ⅳ.1. 萱町遺跡（第 2 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 10 号　鈴鹿市考古博物館
吉田真由美　2012 『須賀遺跡（第 5 次）―宅地造成工事にかかる発掘調査報告書―』 鈴鹿市考古博物館

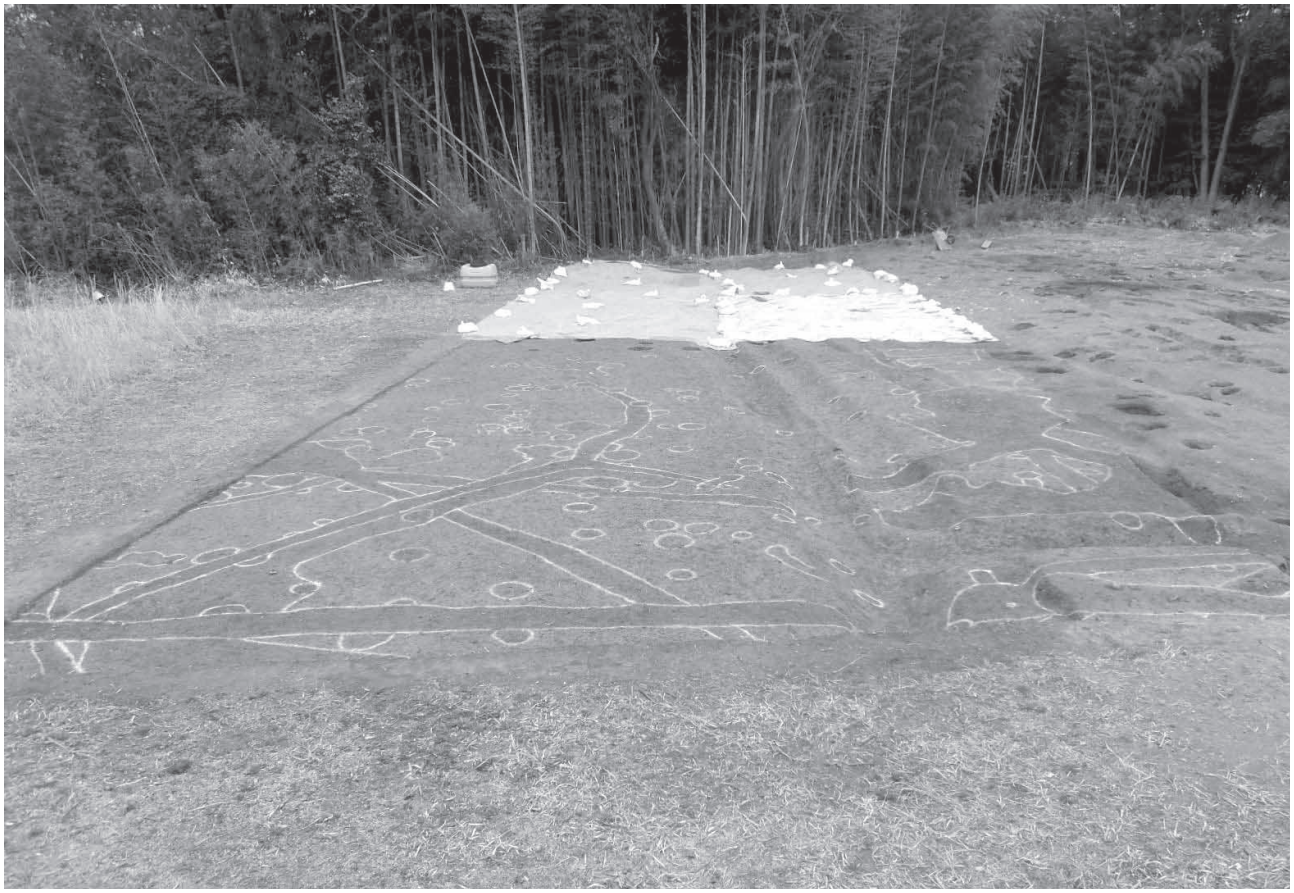
写　真　図　版

1　第 7-2 次調査区検出（南から）



2　第 8 次調査区中区検出（西から）

1　第 8-2 次調査区北西区検出（南から）



2　第 8-2 次調査区南西区検出（南から）

1　SB08211 検出（南から）

2　SH08215/216 検出（北西から）

1　第 7-2 次調査区 / 第 8 次調査区北区完掘（西から）

2　第 8 次調査区完掘（南西から）

1　第 8 次調査区中区完掘（西から）

2　第 8 次調査区南区完掘（西から）

1　SH0811/12/13・SH0821/22/23・SH0830/31/32 完掘（西から）

2　SH0804/16/19/20 完掘（南から）

1　SH0853/54 完掘①（西から）

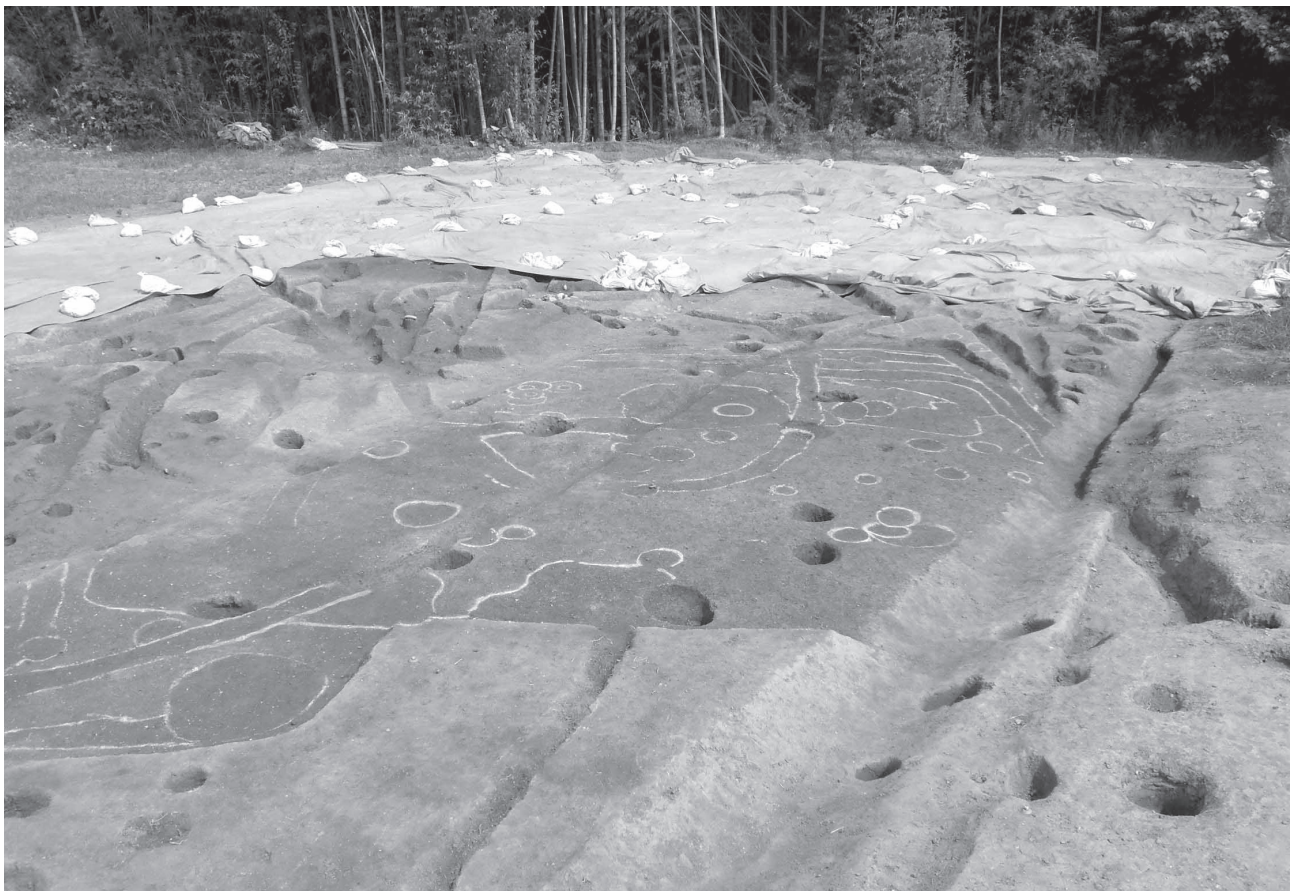
2　SH0853/54 完掘②（東から）

1　SH0864 完掘（南東から）

2　SH08062/63 完掘（南から）

1　SH0805/09/29 完掘（西から）

2　SH0875 完掘（西から）



1　SH0880/82 床面検出（南から）

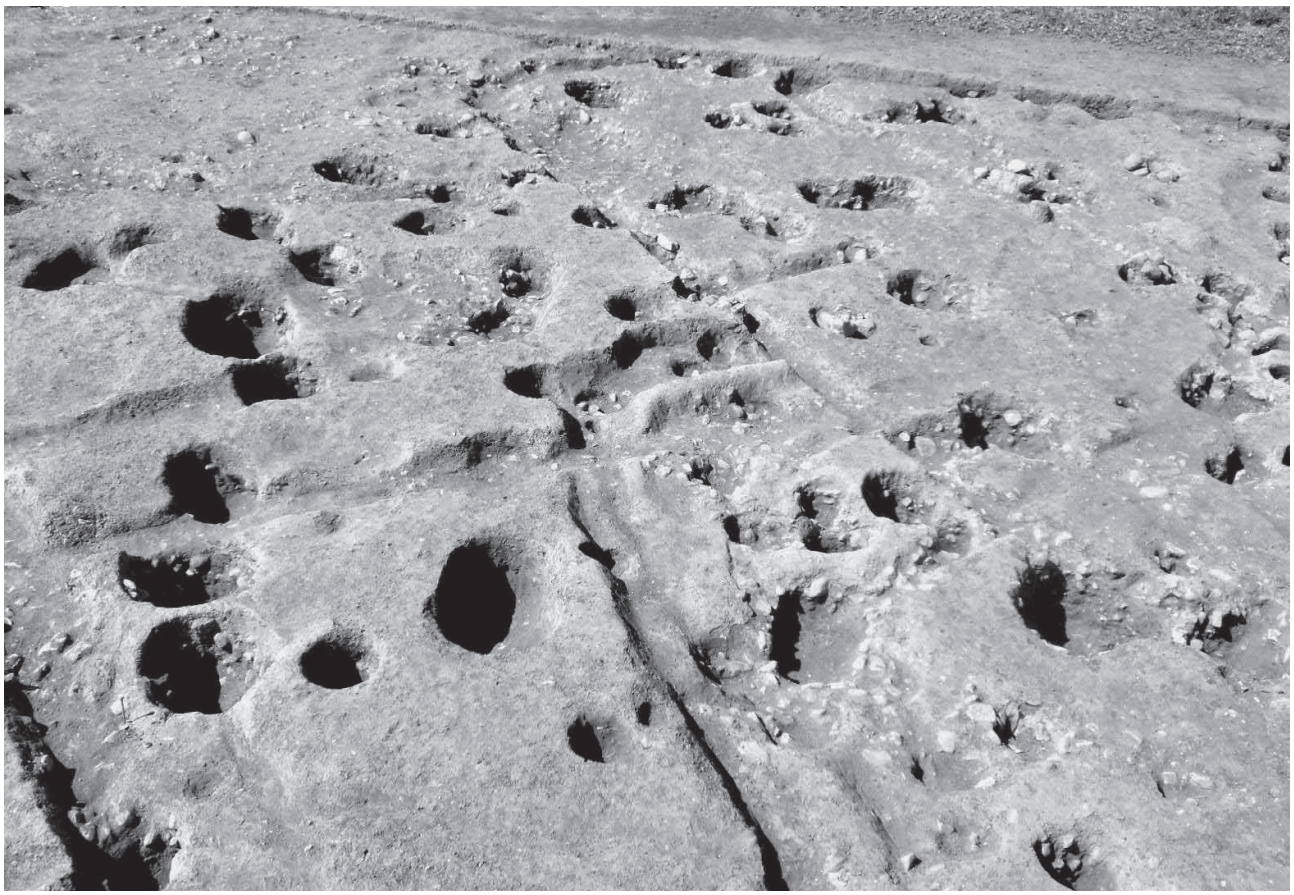
2　SH0879/80/82 完掘（西から）

1　SH0889/90 完掘①（西から）

2　SH0889/90 完掘②（南から）

1　SH08101 完掘（北西から）

2　SH08103/104 完掘（南東から）



1　SB0860/128/129 完掘①（東から）

2　SB0860/128/129 完掘②（南から）

1　SB08125/126 完掘①（西から）

2　SB08125/126 完掘②（東から）

1　SX08115/120 完掘（南から）

2　SC08224 完掘（南から）

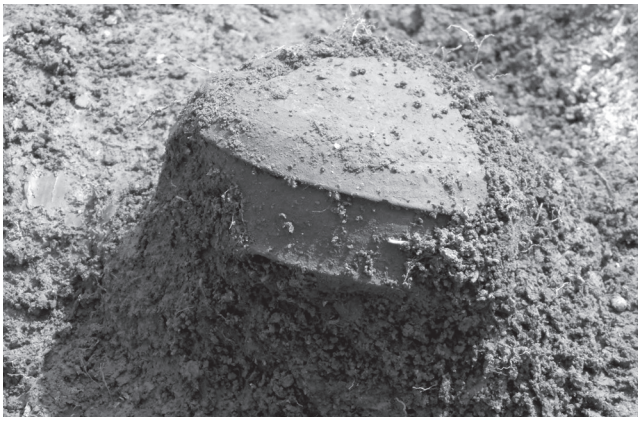
1　SH0853 東辺周壁溝出土の石鏃 (Fig.44-18)（南から）

2　SH08103/104 東辺周壁溝出土の有茎尖頭器 (Fig.53-136)（北から）

3　SH0805/09/29/79 出土の磨製石斧 (Fig.45-38)（南東から）

4　SH0864 出土の磨石 + 敲石 (Fig.44-28)（東から）

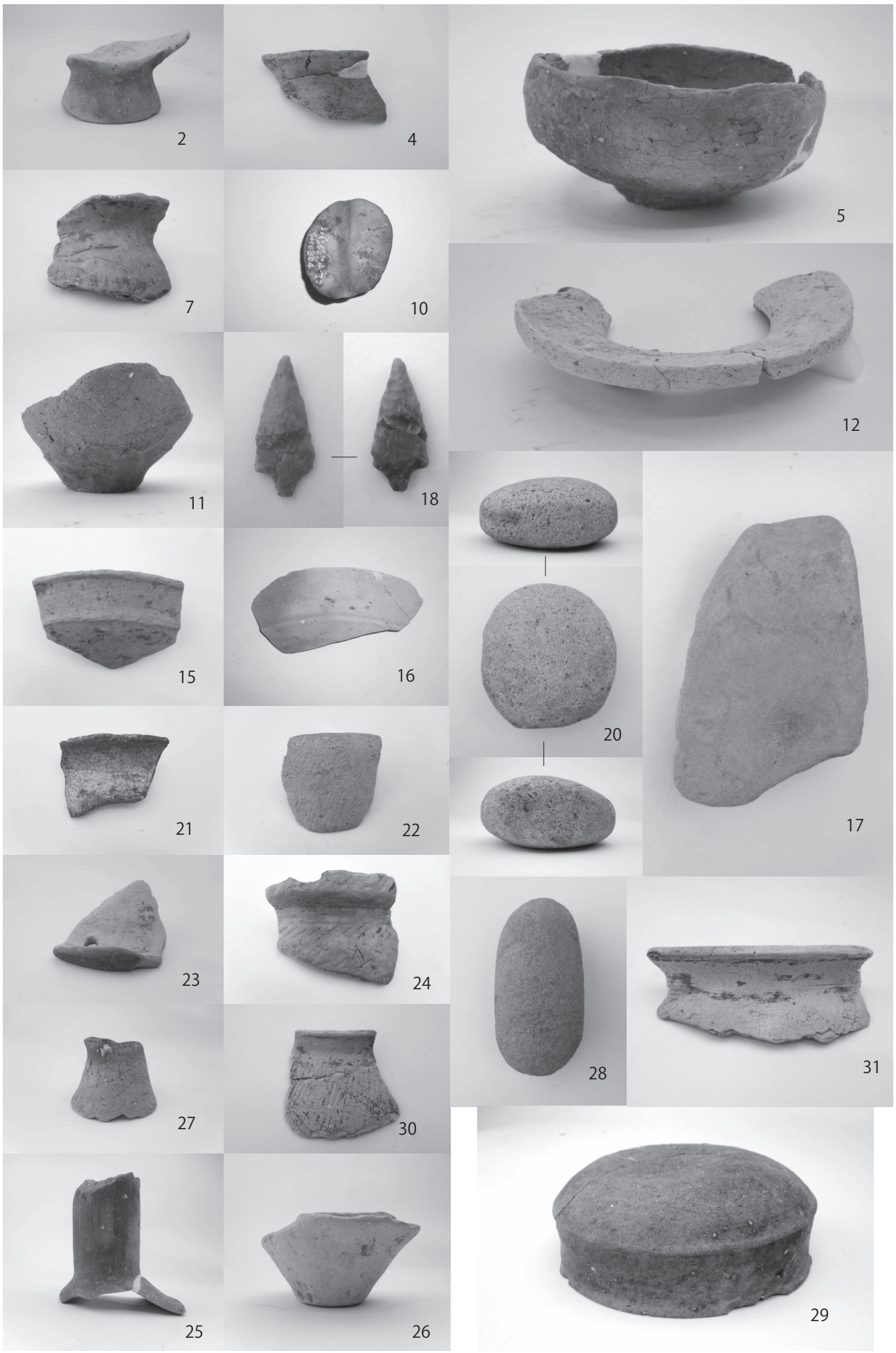
5　SH0862 東辺周壁溝出土の須恵器杯蓋 (Fig.44-29)（北から）



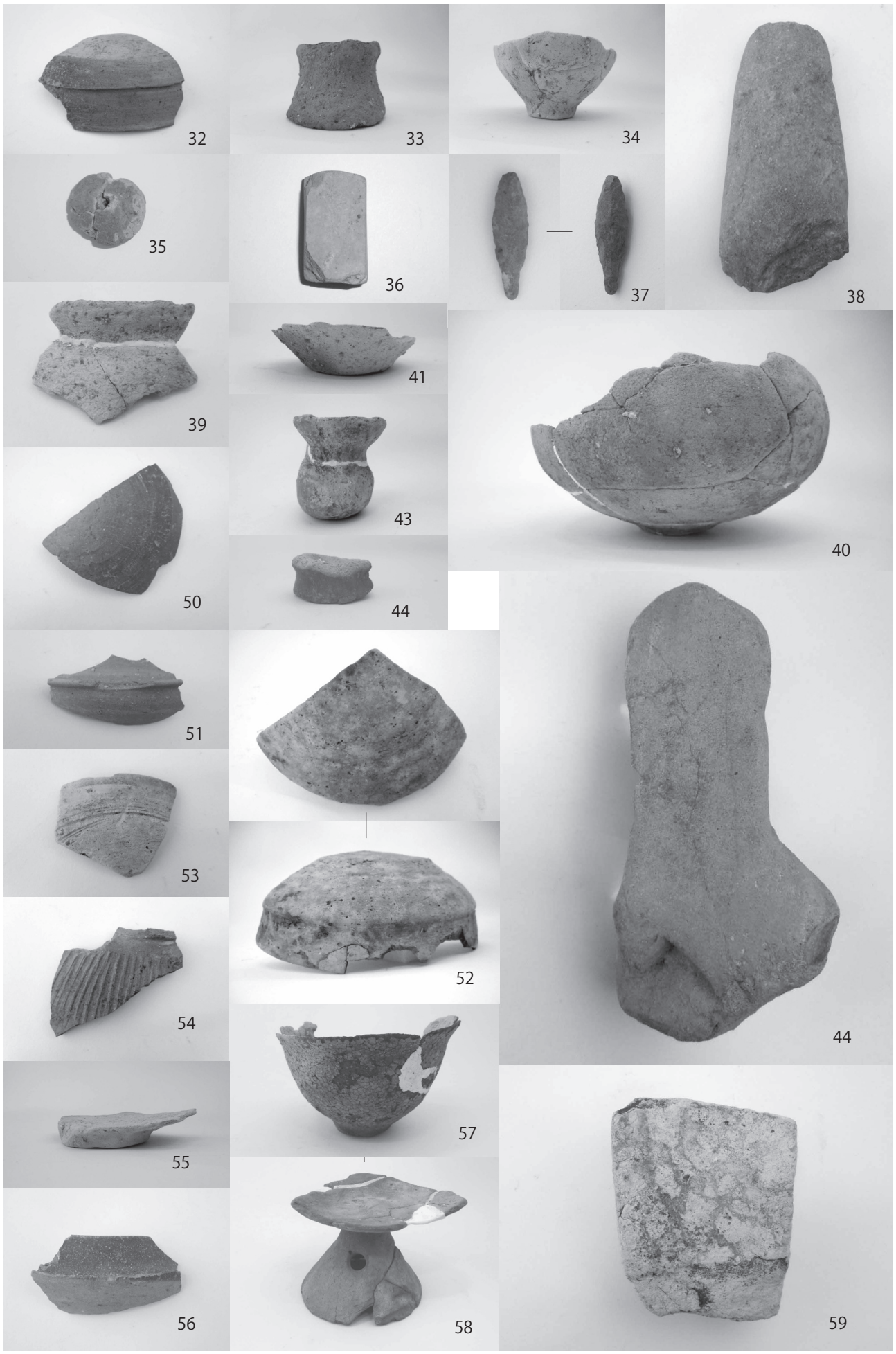
6　SH0863 東辺周壁溝出土の須恵器杯蓋 (Fig.44-32)（北から）

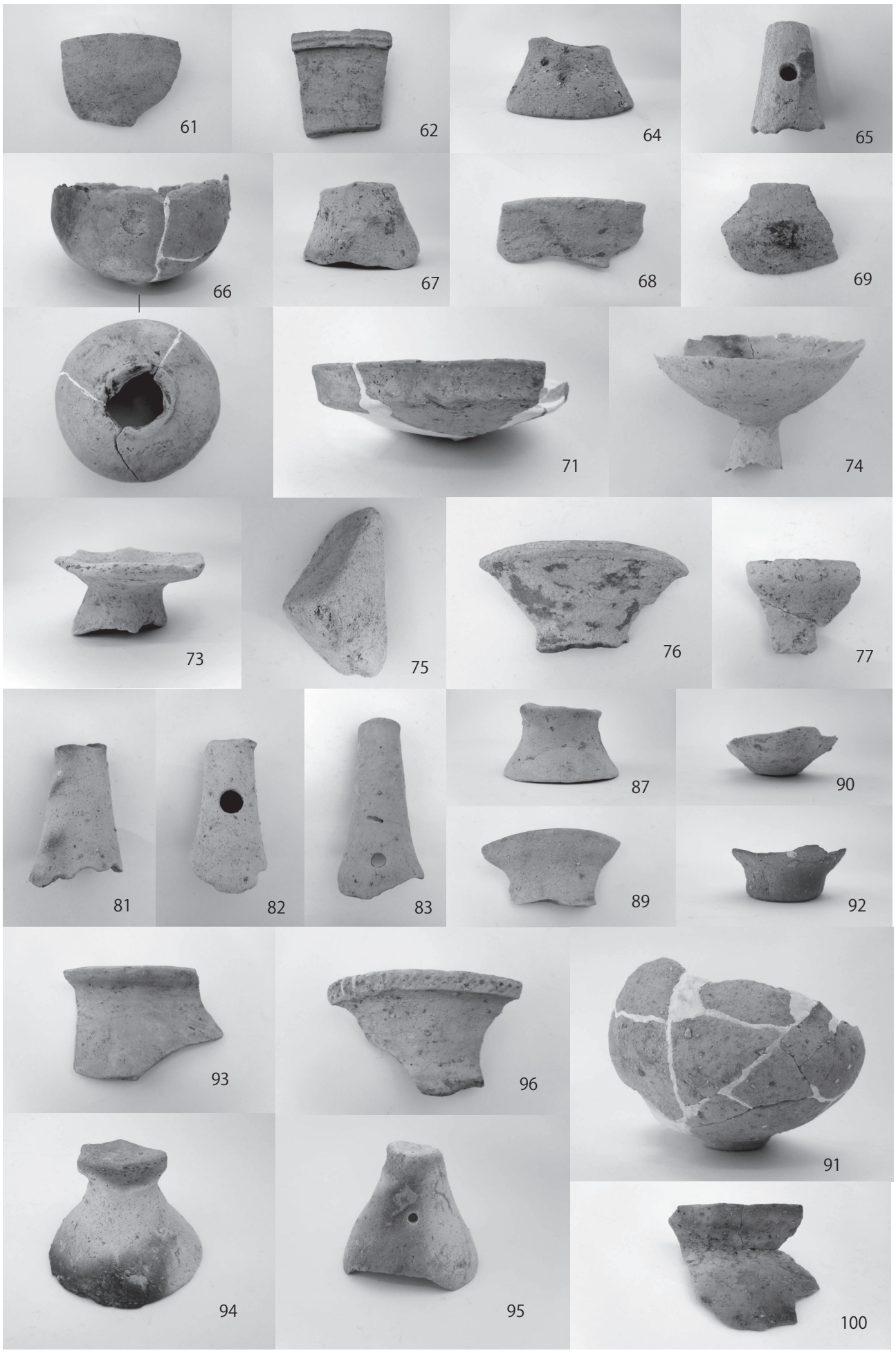
7　SH0862/63 の出土状況（北から）

8　発掘調査の作業風景（南から）

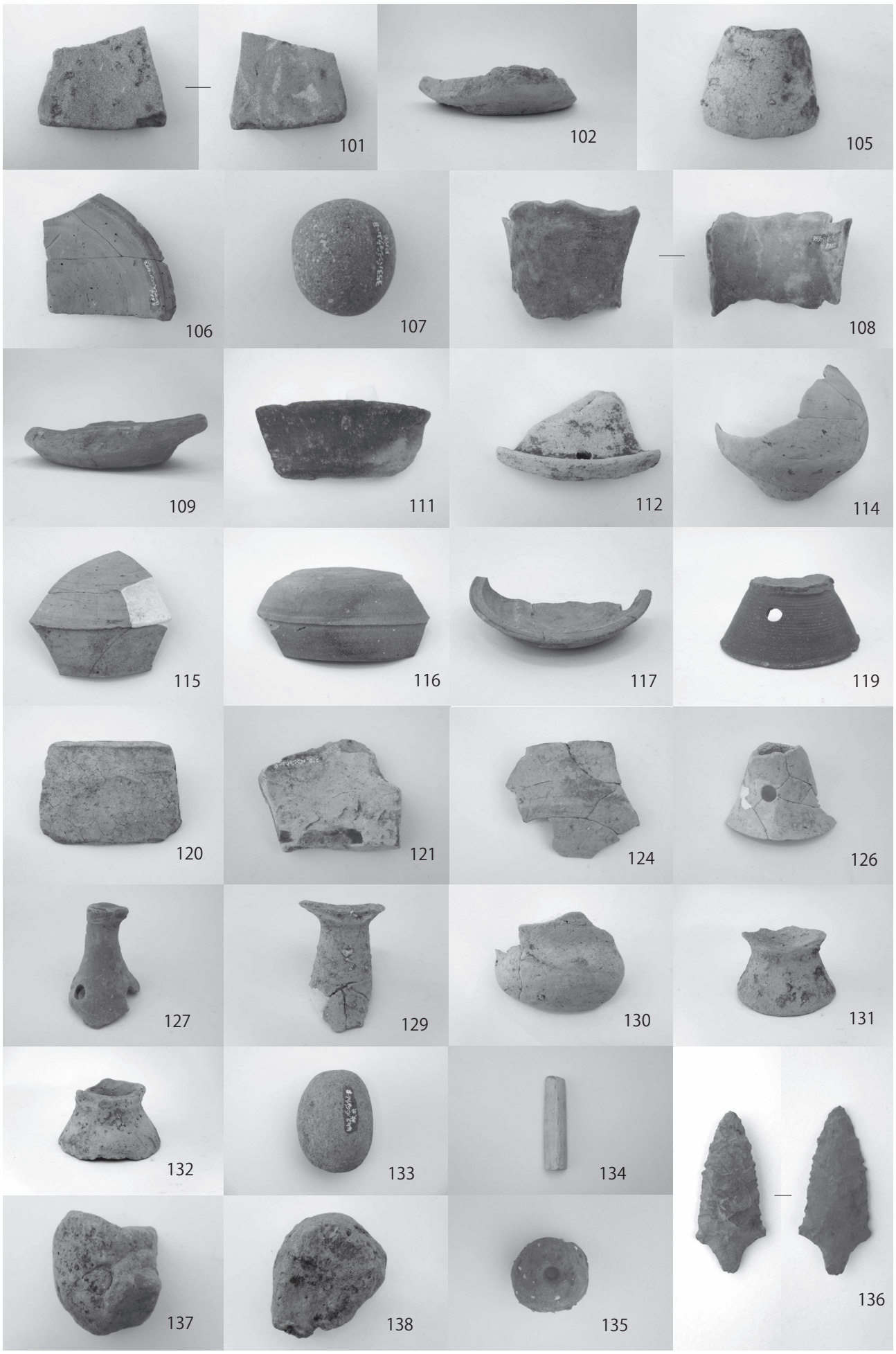

2
4
5
7
10
12
11
18
15
16
20
17
21
22
23
24
28
31
27
30
25
26
29

PL.18




61
62
64
65
66
67
68
69
71
74
73
75
76
77
81
82
83
87
90
89
92
93
96
91
94
95
100

PL.20


101
102
105
106
107
108
109
111
112
114
115
116
117
119
120
121
124
126
127
129
130
131
132
133
134
136
137
138
135

報 告 書 抄 録

ふりがな	ばんじょうざんいせき（だいななのに・はち・はちのにじ）はっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	磐城山遺跡（第 7-2･8･8-2 次）発掘調査報告書
副 書 名	農地改良工事に伴う緊急発掘調査
編著者名	田部　剛士
編集機関	鈴鹿市　文化スポーツ部　文化財課
所 在 地	〒 513-0013　　三重県鈴鹿市国分町２２４番地　　TEL ０５９（３７４）１９９４
発行年月日	２０１８年 ３月 ３１日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
磐城山遺跡（第 7-2 次）	鈴鹿市木田町字上條 2275，2276	24207	16	34°54′06″	136°34′17″	2015 年 2 月 6 日 ～ 2015 年 3 月 18 日	87 ㎡	緊急発掘調査
磐城山遺跡（第 8 次）	鈴鹿市木田町字上條 2275，2276					2015 年 6 月 2 日 ～ 2015 年 11 月 5 日	426 ㎡	
磐城山遺跡（第 8-2 次）	鈴鹿市木田町字上條 2279					2016 年 1 月 25 日 ～ 2016 年 3 月 25 日	220 ㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
磐城山遺跡（第 7-2 次）	集落跡	弥生・古墳・飛鳥・鎌倉・室町	竪穴住居・掘立柱建物・溝・道路・土坑・ピット	弥生土器・土師器・須恵器・山茶椀・石器・鉄器・石製品・土製品	主に弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居を多数検出した。また，古墳時代後期から古代にかけての掘立柱建物や中世後半の道路状遺構も確認した。
磐城山遺跡（第 8 次）					
磐城山遺跡（第 8-2 次）					

要　　約	弥生時代後期の竪穴住居が多数検出された。遺構が著しく重複しているため正確な棟数は不詳だが，今回の調査区だけでも 50 棟程度が存在しているとみられる。この他，竪穴住居から続く排水用の溝や古代の掘立柱建物，中世の道路状遺構等も確認されている。特筆されるのは，古墳時代後期から飛鳥時代の可能性のある掘立柱建物 10 棟が，ほぼ同じ位置に繰り返し建て替えられていることである。これらは，いずれも総柱建物で倉庫と考えられ，これまでに見つかっている（方形）区画の内部を構成する建物群だと理解される。徐々にその内部構造が明かとなってきている。

磐城山遺跡（第 7-2･8･8-2 次）発掘調査報告書

発　行　日　　平成 30（2018）年 3 月 31 日
編集・発行　　鈴鹿市
文化スポーツ部　文化財課　発掘調査グループ
〒 513-0013
三重県鈴鹿市国分町 224 番地
TEL　059（374）1994
FAX　059（374）0986
E-mail: bunkazai@city.suzuka.lg.jp
URL: http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/
印　　刷　　株式会社　三ッ星

Excavation Report

Suzuka City, Mie Pref., Japan

Banjyozan Site (7-2th·8th·8-2th)

March, 2018

Suzuka City